

3143

SEIYOW FUZOKUKI  
SHINSHINDOHATSUDA

西洋風俗記 全

報知新聞社  
上田石勝先生編  
西澁生先生著

巽三堂本店發兌

027343-000-9

特13-991

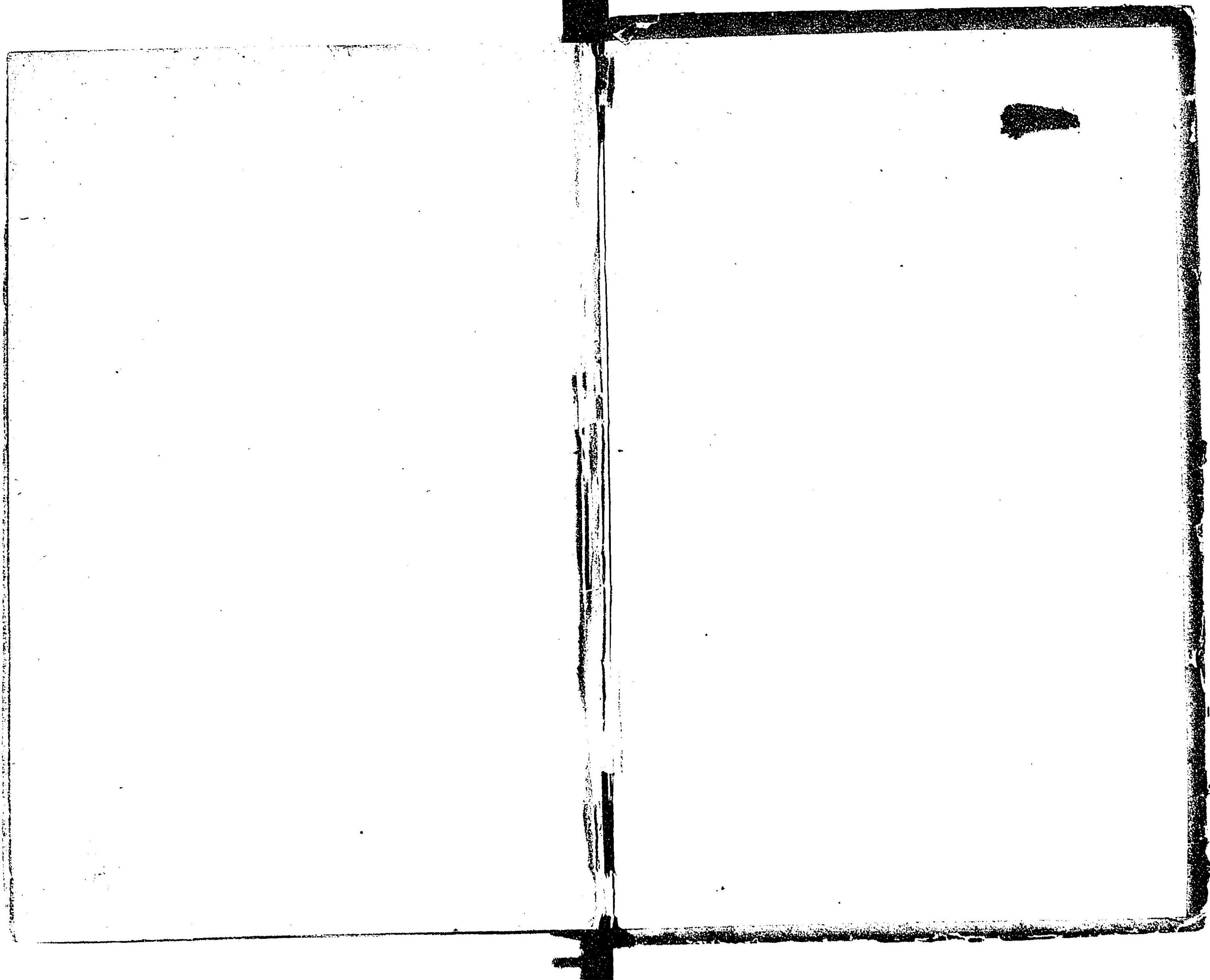
西洋風俗記

西澁生 / 著

M20

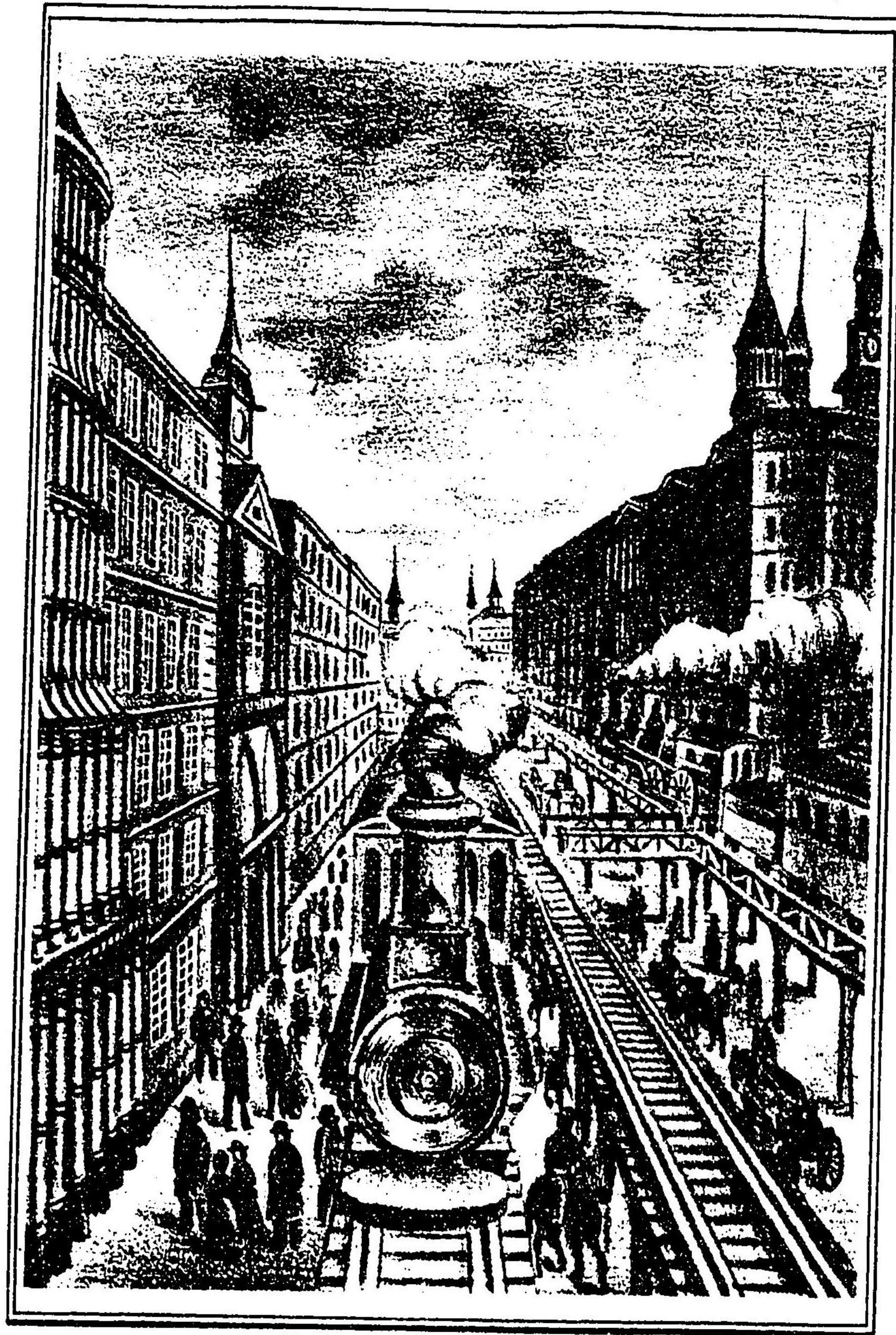
ADJ-0098





詩13  
991





景ノ道鐵架高上街

目次

- 西洋にて衣服帽子靴杯の有様の事
- 衣服襟飾杯の着用工合の事
- 日 受の英佛と趣を異にする事
- 食事の工合の事
- 西洋常川の茶の事
- オペラと芝居の事
- 日本の伊と申す様のもの、有る事
- 小屋掛り舞臺棧敷杯の有様の事
- 樂器離方幕の工合の事
- 東京芝居と西洋芝居と比較の事
- 棧敷敷物等の事
- 平土間の事
- 燈火の工合の事



- 舞臺飾付の事
- 英國杯の一般行儀の事
- 吉凶の時衣服の様子の事
- 下女の有様の事
- 彼岸の團子玄猪萩餅の事
- 正月並クリストマスの事
- 西洋人の相貌骨格の事
- 日曜日の有様の事
- 西洋諸國にて碧眼を貴ぶ事
- 婦人の毛髪之事
- 公園の有様の事
- 倫敦の市中鉄道の事
- 西洋諸國男女の髪之流行の事
- 男子口髭の摸様の事

二

- 鉄道馬車乗合馬車の事
- 寄席落語手品輕業等の事
- 辻馬車牛車の事
- 音樂場躍所作事の事
- 家屋の有様屋根瓦の事
- 道路の有様の事
- 家屋の規模窓の有様の事
- 窓飾ガラス戸の事
- 戸敲並曳鈴の事
- 居酒屋並同手代の事
- 菓子屋婚禮菓子等の事
- 魚類の事
- 野菜の事
- 湯屋の有様の事

する事

- 花候の景色氣象の事
- 人家に近き禽類の事
- 自轉車并自轉車遊の事
- 米國よてモルモン宗徒の開きたるソート
- レーキ、シテの有様の事
- モルモン宗の奇談の事
- 新聞紙上の日本と異なる事
- 新聞社か會議の筆記杯取る事
- 子守女の事
- 一夫多妻の有様の事
- 歳暮年始の儀式并クリスマス等の景況の事

三

- 通例物品の贈答の事

パノラマの事

- 毎朝八百屋杯の來る事
- 露馬並英國マルヒーローの有様の事
- 西洋諸國新聞紙体裁の事
- 伊太利國風俗の英國と異なる事
- 外套蝙蝠傘の事
- 伊太利國衣服家屋の有様の事
- 鳥の種類並同風味の事
- 羅馬府の有様同名所の事
- 佛國巴里グランドホテル並諸國ホテルの有様の事
- アルプス山の景色の事
- 倫敦氣候の事
- 氣候の變遷に依り風俗及國圖の趣を異よ

伊太利國地底住居の古跡の事

- 一寸買物杯に行く時の工合の事
- 英國にて議日大改撰の節改進黨の勝敗を争ふ有様の事
- ナヤムベルライオン氏の演説并其他大改撰の景況の事
- 撰舉人投票の手續其他の有様の事
- 大改選總体の有様の事
- メスメリズムと稱へ奇術を施す事
- メスメリズム施術の有様并之を試験せし筋書の事
- 煙草を嗜む事
- 芝居の詳細なる摸様の事
- 所作事付我邦の芝居と異なる事

四

- 芝居よて惨酷の所作を慎み避る事
- 役者舞臺の有様の事
- 芝居の事並其他の事に付き我邦と異同ある事
- 芝居の趣向并一ト幕芝居の筋書の事
- ナイティンゲール島の事
- ケンシントン博物館の事
- 鵠、高麗鳥の事
- 回航紀事
- 倫敦よりリバプール港迄紀行の事
- 歴的瀾洋渡航の事
- 紐育着前船中よて訣別會の事
- 西班牙を日本人と見異へし事
- 米陸着港の事

- 下宿屋の事
- 高架鉄道の事
- 新聞社の景況の事
- シラント將軍の墓の事
- 土耳其湯露西亞湯の事

目次終

西洋風俗記

郵便報知新聞社員

西 澁 生 著

同

吉 田 燕 六 紀 事

西洋より歸りたる當分は逢ふ人も見る人も皆な西洋の土産話せよと責せらるれど政治法律杯の事柄と違ひ際限なき浮世話の何より始めん何を先きよせんと云ふ次第も立ちかぬれば先づ御尋ねよ任せて御話申さんと返答するを常とせり今日の日本人に就て西洋の事物に味らき最も重もある關點を數ふれば政治法律杯學問道理よて求め得らる、所のものよは在らまして却て風儀習俗の細事に在るなり而して其風儀習俗の細事は取りも直さず政治あり法律なりの由りて生ずる所の原素となるものをれば荷も國の眞どの根を看んとするよは細事と見ゆる風儀習俗こそ却て大切なる意味あるものなるなれば左れば朋友故舊問一時の問答も或は今日の關點を補ふて西洋風俗の一端を知らしむる便りよなる事もやと續々之を掲るととなせり

●問 西洋にて衣服帽子靴杯の様子は如何に候や其着様格好と如何に候や  
 ●答 私共が始めて巴里に到着し亦九倫敦よ參りたる時第一に目立ちて覺へたるは市中往來の人の帽子よ候凡そ中以上と見ゆる人々は皆な日本よて禮帽と稱なへ居る高さ絹の帽子を

冠り辻々も屯せる馬車夫までも派出を貴ぶ連中は皆を同様又は之を贖せたる塗物の高帽を  
 戴けり日本にて尋常冠り候低き羅紗の丸帽子と牛乳配、八百屋、荷車曳等より下は乞食まで  
 都て先づ手足を働かす中以下の人の冠物候尤も旅行等致す時は遠路の處岷然と高帽を  
 登かし詰めに参るも窮屈あれば輕便なる右の羅紗帽子を着るを多しとす左れと凡べて應對  
 向等又は高帽と云へる者紳士の常装となり居る事あれば大抵身元ある人は旅行するも別  
 に之を箱に入れて携帯する習なり日本より初て参りたる者が郷に入ては郷へト心穏や  
 かならぬ面色し乍ら餘義なく彼の高帽を冠り買物も出掛けたるは前日は「へー」とか「イ、  
 エ」とか答へ放しありし煙草屋の亭主が今日は急よ「へイ旦那」「イ、エ旦那」と忽ち旦那の  
 尊號を加へし等の笑話甚だ多きとあり倫敦等にて中以下の家の息子株に在りては早く算  
 筆に達して商館の手代にでも住込み絹の高帽を冠り見度との一事少年中第一の大望に候  
 衣服は先づ倫敦を以て申さば通例半マントル（モトニング、コート）を着ると候中又はフ  
 ロック、コットを着るもあれど甚だ少し尤も上衣直衣をば黒地にしてズボンには何か縞物を  
 用ると尋常の取合せとする事はマントルもコートも同様なり上下共は黒色ある山立ちなる  
 も全くあきにはあらねど極めて希れあり附け襟は今日日本も流行居る立襟にて襟飾は「又」

の字形の懸飾を多しとは黒色蝶形の結飾と老人用めて少壯の人の着けぬ方あり尤も「又」の  
 字形の懸飾も必き留針を挿すべき規則あり日本にて針無し之を懸け歩く向も折々見受  
 る様あるが失体なるべし西洋に在りて日本仕立の洋服の際立ちて變体に覺る第一上衣直  
 衣とも異常な丈長さ事第二全体はブク／＼として身は合はざる様見ゆる事第三ズボンの下  
 口上部と短襟も甚だ廣く水夫のダン袋に似たる事第四肩行短くまで白襟袷の袖口をこれ過  
 ぎる事等あり其他胸の明け方の大小、襟の折返へしの廣狭等之時々の流行よりて始終移  
 變りもある由なれば強て言わざるべし唯だ何分よえ丈は高く双の肩の頸の付け根より兩手  
 あうけ「へ」の字形に削り落たる如き優形をなせる柔和魁偉の身体あす分のダリヒズミな  
 くツツクリと適あふたる衣服を着けさせた事あれば其格好誠は都雅に立上りて見ゆる事  
 なり偶々其中は日本人が丈は低く肩の四角張りたる上はブク／＼としたるものを着て立交  
 るときは何か無下見劣として我れ乍ら慚づかしき心地するあり三四年前或る英人日本に  
 遊びたる時の紀行に日本の官員と皆を借着した様ある衣服にて云々と再三記しつけたるを  
 見、不平堪へざりしが成程西洋人の目にて遠慮なく悪口云へば左もあらん歟と嘆息致去  
 たる次第は候



四 ●問 西洋之衣服の工合大抵何國も同様な候や

●答 左れば世の流行と申すの處は隨がひ時ふ隨がひ常より移りゆき候へば一定の御返辭致しかね候へ共まづ平日が半マントル若くはフロック、コット餘程あらたまりある處まで燕尾服（イウコング、コート）旅行の時が上下揃ひの縞の脊廣又た靴之本靴「紐掛」もて鈕留もて「が極」まで日本まで流行居る半靴の球投げ杯野懸けの游嬉の折か又之船中等の外之一切穿さ申さる是と一般お少しもて肌衣の露る、を思ひ慎むよりの事あり尤も老人様の中も之其足は寛やかあるを貴びて平日半靴を穿くもあれど此と年お免じての話まで一般の作法にのからせラツトストーン氏の尙だ在朝の比一々余等議院は參聽したるはグ氏の内閣官席の上頭は踏んぞ返りて控へ去が其のズボンの下口より足の甲の邊までダンダラ織の靴足袋長く露れ出て居りて流石は老人と最早や服装にも頓着せざるあらんと可笑く覺へたることあり氏の穿きたるは襪も半靴と見受けたり又グ氏まで憶出し候前さふ附襟之立襟が一般なりと申候が老人はなると外観よるも身は安らなるを擇ぶふと折襟又之立襟の喉佛の處だけ切り抜きたるを着くるも多しシ氏杯も其一人まで喉佛の處を左右は廣く切り抜き夫もて尙は領下の周邊を突かる、をうるさしと覺ると見へ双の襟耳を痛く外邊を推開さ

置く癖あり保守黨の若者共の洒落は「金を儲けたら附襟の一ダスも買てグ氏の襟を取替へあれを内側は曲け込て遣り度」とは何處も同じ例の人の口あるべし又長靴は襪まで參るとか遠足でも致すどりの外之穿かず平日之を穿き居るは泥濘の中をも奔走致さねばならぬ極々の賤民に限ると候

右の處で英國を主として申したるとなれど其他の國々も凡そ似たり寄たりあり但し其國々特別の風と申すは必おあるものあれば一概には參らば例へば巴里にてはフロック、コットの方甚だ多くして半マントル割合は少く丁度倫敦と逆さまなると又たフロック、コットの下は黒色蝶方の結飾を多く用ゐる英國の如く重も老人に限るは非る事又た倫敦杯は例の「へ」の字形の撫肩を悦ぶが故角肩のものも成る可く引詰て肩の角を隠す様せんとするは日耳曼に至れば「丁」の字形の角肩の方を珍重し從て撫肩のものまでも肩先を突出して角立んとそる杯仕立屋の針加減全く相反する事等様々なり

問 左すれば燕尾服を着ると申す事と極て希れは候や之を着たる者を御見かけの事と少あく候や

五 ●答 其事は候以上は都べて中等人の風俗を専らに擧げたることまで此より下等又は半マン

トル杯は愚か奢廣とても上下満足あるは得着ぬ者夥しく又此より上等に参れば貴族杯の暮しにては毎夕晚餐一節は一々燕尾服も更たためて膳は就く由なり尤も茲等もあれば中々も富貴千万なるものめて家内召使の童僕杯も尋常の仕度にては面白うらやとて中世も流行りたりと申す何か異体の装束を着けさせ髪は眞白の粉をふりかけて満頭雪の如く化粧せたるも少からやとの事あり是の頭髪に白粉をふりかけると申すは矢張中世の遺風にて百年許以前までは英國にて身分ある紳士は多く是の粧を志したる者の由日本人の者にて一寸之を思へば何れ故らやチ、穢き白髪を悦びて眞似るとかは好し眞似れば逆何の飾りもあるとかはと批判もすべきあれど西洋人の眞白なる底は紅味を帯びたる一種の桃色の顔に對するは生地は黄金色を白粉にて染め銀の如く照り輝く髪を以てせば誠は派出やかまして品よく一段優美なる風采をあすは相違おし然るに百年許以前有名なるピットの執政中彼の那拿翁三世を抑ゆるため打續たる佛國との長戰に國の費は益々嵩み有ゆる物品も税を課する成行となりし程は髪染の白粉杯は奢侈品の重なる者と認められ重税を課せられたり此より是の白粉を用る者一時は減少し遂は其風俗の息ひまで至りしかり然れども古物を珍重するは凡ての人情なれば奢侈も長せる貴族の暮しにては今も其召使も是の粧をかさし

ひるなり斯る富貴の中なれば平日毎夕燕尾服にて食事致す服も怪むには足らず亦た其他の萬事を併せて想見るべしと存候又た芝居杯も参れば或は燕尾服ならでは入るとの出来ぬ穢敷あり又あさも些と上等の場處杯を取る位の紳士あれば多く燕尾服を着け候又た有志音樂會と申し身分ある男女が各の得意の歌なり琴ありを奏して聴衆より木戸錢を集め之を以て何か慈善義俠等の事のためは使用するとあり是の會は色々天狗連の出掛るとあるか其節婦人も禮服なれば殿原も燕尾服あり仍は其他夜會宴會等も之を看くると申す迄もなき事候

●問 日耳曼之英佛杯より些と趣の異なりたる所も多うるべくと存候如何

●答 御承知の如く日耳曼と元と許多の國々を併合して今の帝國とあり居るものなれば其舊の國々の分ちより一々も吟味せば千差萬別あるべく候へ共先づ私共伯林近傍を旅行致したる通り、りの目を以て申せば伯林邊の巴黎倫敦も異なる物事都へて質素に田舎びて見ゆる事に候衣服之半マントルよりフロック、ユートを着たる方多き位候へ共巴里杯の如く綺麗もなく殊も其帽子の高帽は極て希れしして丸帽の方十の八九あり甚しきと麥藁帽子を冠りたる者さへ少からや立交りて相見候尤も伊太利杯も丸帽隨分多けれども

日軍曼程はあし唯た日軍曼にて綺麗に派出やかに見受けたるは軍人の装束あり流石と武を以て國を建つる處丈は軍人の装束は水際立ちて花々しく帽子杯と兜形の黒地に白磨きの銀紙うち頂きの中央より獨鉗成の立物したる有様四下眩暈ばかりあり此邊は如何ある譯もや人の丈様々にて軍人こそ皆な一樣に揃居れ其他往來の人を見わたせば高さ之余等より乳以上も高さあれば低さの余等の目の下あるもあり参差不同實は甚しく候是は南北人雜りし故斯く不揃あるとにや日軍曼中にも普西亞に限り斯く人の長短参差なる山縁のあり候事にや其邊は未得調べず候へ共兎も角目には立つ事候

●問 西洋よて食事の工合の如何に候や日本よて食べる通りの西洋料理を毎日三度々々繰返すの事候や

●答 西洋は朝の起き方通例餘まり早からず故に朝飯(ブレックファースト)は大抵九時前後候此外は夜食(サッパ)と申すを十時頃用る事あり又近來佛國より始まり來りたる風なりとて五時の茶と申す事大分に流行し今は中等の家までの多く之を用ひ候是は晝飯と夕飯との間の五時に茶を飲む事にて腹加減は恰好の處なり但し是の茶を用る時は少々心し

て夕飯を延ばそは臺所の作務あり世帯持ちの婦人同士ありては是の五時の茶の折を目指去て相訪問れ其茶を飲み乍ら四方山の話をあす杯の工合尤も妙あり扱て其食事の献立と朝食が先づ鹽漬の豚を煎炙つけたるよウダ玉子、麵包、パン、茶若くはカッフィー等なり或は豚の代りに乾魚を用るもあり又た胃の工合よりては茶と焼麵包、ウダ玉子、位めて肉食せざる事もあり晝飯の大抵昨日の夕飯は残りたるロースト、ビーフ(焼牛肉)の冷たき馬鈴芋のウダたる位を添るを常とし然らざれば何か魚の天鉄(フライド、フレッシュ)でも用るかあり此外例の麵包はマヌマヌて是處茶を飲めば先づ水なり或は時として橙皮を砂糖表にしたる者又マヌマヌと稱しヤチ杯の類を砂糖にて表附めてトロトロあしたる者又マヌマヌと稱し右のマヌマヌを一層精製して滑らかあしたる者(恰もマヌマヌと日本の粒餡にてゼリーと稱す)等を添へ置く事あり是等皆あつた同様各自隨意に麵包を塗て食べるものあり五時の茶を茶請として麵包を薄く切りたるマヌマヌを塗りたるをあしらふ位にて左したるものなし或は之をビスケットを加へマヌマヌ又のゼリー杯を添るとも否とも其の臺處の所有次第あり多敷一日中第一の馳走にて醬汁、ビーフメソヒキ、羊の切身、焼牛肉、焼鳥杯の類を二三品と馬鈴芋、胡蘿蔔、蕪菁、葱、其他其時々の野菜を二三品宛添て之をあし

らふ事なり麵包パンを申すまでもなし是等を煮べたるとりたる處にて何の牛乳品牛乳品甘い物を出す例へば玉子を碎きたる牛乳砂糖を交せて煮たる者、林檎の身を小さく切りたるを砂糖砂糖と混じ其上に小麦の粉の衣をかけたるを蒸焼蒸焼したる者、小麦の粉を日本のホウロクホウロク焼糖焼糖と燒き之にレモンの酢をかけ砂糖をふりて食べる者等は此類色々あり乍ら是のや飯中飯中ありて常ねる第一立を占むるハ焼牛肉焼牛肉(ロースト、ビーフ)とデー諸デー諸なり焼牛肉之大塊の牛肉を遠火にて炙るものにて必しを其時食へ盡すありと前云へる如く料理にて仕舞置きて翌日の晝飯晝飯に用るとなり日本にて申せば冷飯冷飯の儲儲をあし置くと同様不意に須事振れ舞ふべき來人杯ありて料理の用意も十手手廻りうぬる時ハ惡意の間柄悪意の間柄は是の冷牛肉を出しても目前の間合ふとなり即ちお茶漬お茶漬と申す場合あり又た馬鈴薯馬鈴薯のウツ方ハ英國自慢の燻梅燻梅のあるもの、由りて晝夕も善く膳の上現これ出るなり純粹英人のハエスキと云ふて是の焼牛肉とデウ羊デウ羊とを兎角兎角一匙一匙しく食べる事あり英人の太食太食と羅巴の名取羅巴の名取で佛國杯ありても英人なりと申せば何と扱置き一番ハ焼牛肉とウツ羊と山の如くは持て來るを常とする英人が自身は語て打笑ふ所なり是を男子のみならず婦人おても随分の大食にて夜の世界の美人の標準ハ支那の足、伊太利の麵、佛國の愛嬌英國の

唇唇と並並ふべ稱稱さる程層薄層薄く口元愛らしく生れつき乍ら其愛らしき口元にて食べるとく大抵の日本男子と迎も叶い染めぬ程ハ候夜食ハ通列茶と麵包麵包の事にて濟ませ候取と全く之を用ひざる者も少やらせ候是は寐しな事故成るべく胃に物物の溜溜る様致すよりの事あり尤も以上と唯だ中等人の處を申したるものにて貧富ハ應じては其摸樣色々相變るものなる事を御合點あり度候又日曜日と大抵皆を寺院寺院ハ參詣の都合もあれば是の日丈と夕飯夕飯の馳走を晝晝と繰上げ午後ハ茶を飲みたる計計にて寺院寺院ハ參詣し夜分歸宅したる處にて尋常晝飯の料理を食へると申すが多く候

●問 近來と日本の茶、追々輸出の途相開けたるや承候西洋にて日本茶御見受けの事あり候や西洋常用の茶と如何ある工合のもの候や

●答 日本茶の少々宛も輸出あるハ米國へ向けての事にて西洋よりあらせ米國にてハ宿屋にて日本茶を出したる處を少からせ候へ共西洋にては好事奇癖の人と知らせ常人の處にて日本茶の顔顔へ見ろくるとなし西洋常用の茶と謂ハゆる紅茶紅茶にて之に牛乳と砂糖とを混せて飲む事あり故ハ茶とさへ申せば必し牛乳砂糖を調合せはありぬものと心得、余等が偶々日本茶を入れると採られハ下女ハ毎つも牛乳と如何、砂糖と如何と尋ねると常例

て牛糞も砂糖も不要と云へば何か不潔氣な面色は候茶の平持したる處茶園が一番上等の物  
 を用る様相見候佛國を名代のカンピー飲みよてカンピーの佳しきと佛國、第一あるべく英  
 國より参りたる衆等も向てと佛人々毎も「英國にて逆も斯るカンピーの石上りれまじ」と言  
 慢せる位又た眞は英國と及ばぬあり左り乍ら斯々カンピーの方を重むる用ゆる丈も茶と頗  
 る疎まる、方よて惣体は上等の物をべ用ひぬ様あり又茶世界もて下ふと申すの日耳曼を  
 り日耳曼と聞ゆる麥酒の名所もて例の甘口よして軟らかある一種の麥酒を醸出す處あり斯  
 く甘口よ柔らかよして酔ふと鮮さが上よ其の價も他國の例よれば異常に賤く日本の目安  
 を以て一寸概算したる處先づ一合一錢内外が通例あり故も血氣の少壯男子の勿論年寄も子  
 供も又た婦女兒も悉く皆を麥酒を嗜み飲み水の代りよを麥酒、茶の代りよも麥酒と一切の  
 飲料と麥酒の一ト手よ持切られたる有様あり故も家内杯よて茶を用ると云ふとは極少さと  
 見へ偶まよ用るを見れば誠に言語同斷の惡茶あり余等の宿まりある宿屋の毎つも大抵其地  
 りて二とと下らぬ家ありし故茶杯と皆を相應のものを出したたりしが伯林逗留中、中ごろよ  
 り下宿を致したりしは茶の惡き事く形容よも話よもあらま幾かよ二口三口飲みたるのみ  
 よて置きたり然るも惡酒と一杯と雖も立どころよ効驗を頭痛よ顯すすが如く僅かよ二口三

口の惡茶直ちよ其効驗を顯のして晝夜と余等兩人共夜半を過る此まで睡るよ能とぞりき翌  
 日と早々よ町よ往た自から茶を求め來たアしが第一茶を賣る店を見出ととぞり餘程苦勞  
 ありしなり漸々よふして其店を見出し求め來りしと店よて最上飛切と申せる分よてアしが  
 矢張余等の口よ上げすよ堪ざりし又伯林第一のカンピー店と云へるよ往きて茶を試みたり  
 しが是も先づ飲むとこと出來たれ中よ倫敦常用の茶よと及ぶべくもあざりし怡も廣さ  
 國中の事あれば日耳曼とて我々の未だ得味あてぬ程の上茶を用ひ居る人も之れ無しと  
 されねど兎も角概したる所よてと日耳曼の茶を用ひぬ國と申て宜まかるべく候  
 ●問 西洋の芝居と如何候や西洋よての王公貴人も表向き芝居よ参るを憚からざる程よ  
 芝居の品位高く從て役者の身分も立上りて取扱くる、様承候如何  
 ●答 大間違候芝居の西洋とて日本とて孰れも同じく衆人の觀せ物も我候ものよて其處  
 主の心持と是の興行よて何卒澤山儲け度と思ひ狂言作者の心持は是の書下よて何卒見物よ  
 面白がられて報酬を滿ツナリ貰い度と思ひ役者の心持と何卒是の役にて見物に悦ばれ給金  
 の昇る様爲し度と思ひ皆な歸する所と金儲けよある有様は誠は簡單無造作、罪も餘もあさ  
 處よて西洋も日本も毫しも異なく候役者の中よて随分心掛宜しく材藝も研さ品行も正ま

士君子の間に容れらるゝ者も一二をさよわらせ候へ共是と其者乃心掛宜しき故の事わて役者あらせとも材難品行兼備はりたる者何とて人々賤まるゝとあふんや是等と別段の話よて先づ概きたる所役者之正當の者として認められぬ方あり西洋と女役の女役者よて務め男役と男役者よて務め芝居と都べて男女入雜りなり左るふ是の女役者なるものこ怡む日本の藝妓と申せ形あてて陰には種々媚を献じ嬌を呈するとを恥ぢせ貴族家杯の少年子弟の之がため身を持ちくづすゆふらぬ事候又男役者の方よりありても色々不始末不身持の行迹致すもの多く凡そ家風正しき士君子又と年若かき娘ある家杯よて役者を近づけ候事一切嚴禁と致すとよて苟そめよめ役者を近づけ又之之を出入り致させ候杯の樽相立つ事と尋常の良家よて甚だ不面目と致し事候あり前よを申す如く元紅粉を粧ひ盛候を弄そびて衆人の觀せ物身み物と相成分者の何とて立上がりたる身分として珍重さるゝ道理あるべさや又た王公貴人の参るを憚らぬと申すこ(オベラ)假りよ能と譯すべし之事よて尋常の芝居(シベラ)よて決まて其様之事之れなく候尋常の芝居と隨分夫れ相應ふ卑陋の事共め少うらせ無論王公の覽に供へべき品位のものよこれ無く候

●問 芝居とオベラと如何なる差違のある者に候やオベラと王公貴人の見物をも忝けなふする程の品位のもの候や

●答 芝居は日本の芝居と同様ある事之前よ申したる通りの次第尤も其任組セリフの工合又と道具立の首領、小屋掛りの造方等よ至りてハ流石よ文化の異なる方に異なる處色々之れあり候へハ大体の上ハ矢張り芝居よと紛ざれ隠れなく候オベラの方よ先づ假りよ日本よ引當て、見れば能と申す處なり役者の舞臺よて述べ候セリフと一ハ歌となり居り皆を離去方の離しまつれと之を唱ふ事あり故に悲しき處と沈みたる細き調子をあして文句をる長く引き延びたる處と揚りたる太き調子をあして文句をる短く促みかける杯聲韻も種々の加減上下のあれども兎も角一切悠永なる歌唱を以て問答應對する事あれば從て手足の動かし方杯仕打萬端尋常の芝居とて遙ろ異りたる趣をあす事候日本の能がセリフと諸語よて述べ手拍子足拍子共一種の舞の態をなすと善く相似たるものあり左れと先づ其チベラと能との相殊りたる重さある箇條を擧ればチベラよと脚色の様子ふよりて幾人もの役者一時の舞臺よ現われ出て、彼此交々セリフを唱へ立てる事尋常の芝居よ異ならば能の役者のシテとワキとよ限であるが如き非せ又た舞臺の舞割、舞付、尤も念入よて山あれば山城あれば城、座敷の座敷、町中と町中、と恰も眞物を見るが如き精巧ある道具立を用ると

尋常の芝居は異ちらざ又た役者の扮粧衣服に至りても務めて花々々々綺麗びやのあるを用ひ皇后登人現はれ出れる其装束につける金銀珠玉摺箔縫箔にて舞臺面炫やさめたり又た壹場の朝廷を描き出せば百官有司の立て連なる冠の秋の夜の星の壹時天降りたるうと怪まるる計ある杯都へて派出くしさと能舞臺の簡古撰茂なるの比は非を左れどオペラ演せる世界は、諸譜の如くは幾番と云るる番組こそあけれ、其作者こそ昔な昔時の大家あして前よ古人あく後よ來者あしと申す擇抜きの各人が心を凝したる中の又た傑作と稱せる者のみあして中々よ近今の文人が壹時漫然筆を執りたればとて之をオペラ舞臺に演せしるもの、に非を茲等が西洋よてオペラと芝居との大差違ある所よて芝居にて新作者新作物代々のあり候へ共オペラと昔よて傳へ來る世界の外新作物の侵入することを許さず是れ恰も日本よて芝居よて近松並木の後よ世々河竹あると得れど能て内外二百番の上よ一番を増し得ぬと同様よて候はせや又脚色セリソよ就て申候もオペラと芝居の書下の如くも卑陋なる事野郎なる事淺薄なる事淺薄しき事の類の甚だしく均しく男女の間柄を描し候も今の俗世界を今の儘よ寫したるものと異なり候が故、只だ優よやさましくして何となく、劇的の高き心持致し又よ同じ憤懣の詞を吐くよも恨むが如く訴ふるが如く自然に餘味を存する杯のオペラ擅

場の處と聲へられ候其品位格式の高きもの亦恰も日本の能が芝居よ於けると善く相似たるよ候とせやオペラと斯く品格の高きものよ候故是こそ王公貴人の覽に供ゆるも恥しかりと王公貴人よ之よ臨て物体の下ると申す程よとあき事よ候左れば西洋にてハ現に宮廷附屬のオペラ舞臺ある國よ少からせ徳川氏の時、芝居は河原者と申せども能は朝野會同の燕よも備へ置きたると同様の譯なり又た世界の日光とも申はべき綺麗第一を誇るる巴里の大オペラ舞臺と那翁三世が列國王公貴人の遊び處とせんため念よ念を入れて普請したる者にして今よ於て毎年佛國政府より幾何の保存補助費を給する所よ候又た伯林よて王宮の直ぐ並ぶびよ小さなオペラ舞臺あり今の維新と常よ屢よ之よ臨む由よ承候是の如き次第よて王公貴人のオペラよ参るとハ表向き面目よ關すると毫も之れなく公然見物致す事よ候尤も芝居とて國中第一と申す大芝居よて平生よ品格も極々上流に置かれたる者にハ間よ王公貴人の見物もあたよ候とねど是こそ希有の事よて且何れうと申せば物体よを宜しからぬ方よまて先づ通例とて王公貴人の目を樂ましむるハオペラと定りたるものよ候

●問 日本 日本 能の變体ある狂言と申はが如き類と西洋の之れなく候や  
●答 西洋よオペラニシテと申すがあり候滑稽オペラの類にして一寸能と狂言との如き

關係を有し居候へ其是の滑稽オペラと頗る下りたるものにして新作物も勝手よ出来、一体の様子向き何かと鄙ましく覺へ候成程セリフと太抵歌唱よて述べ身振と多く踊りの態に致は杯オペラの變体とて見受けらるれとて日本の狂言の如くお名人の傑作を選りて番組を立てるが様ある品格よと参らせ候先づ目前花々しく賑やか女子供の悦やさなる工合と推はる者よ候

●問 日本のおと申を様あるもの之れあく候や

●答 西洋にも滑稽芝居と申はがわて尋常の芝居の前幕に一ト切、出し杯事多くあり左れども東京よて致そ御茶番大阪にて致す俄在言杯の如く扮粧を異様に玄厭ふべき身振仕打をなし見物を強迫して無理に笑らへくと責め立てる同様ある拙劣の譯のものには御坐なく又た故さらに姪りが間敷事厚顔しき事を述べ立て並べ立て、見物の嘲笑乾笑を賣とんとほるが様ある卑陋あるものに御坐おく一寸見たる所にては仕打杯も何の事なくサツと爲て了けるが如く裝束逆も別段に格外異様のものを着けたるにもあらねと只だ之を見るうちに自然腹を捧へる様に相成るあや例へば鹿粗かしき男が或る娘を尋ねたる處にて其娘の氣に叶ふ様面白がる様なる話おさんとて頻りに手を振廻し乍ら喋り立て居るす

ち鈕の留め方や悪しかりけん左りのカフス(白襟の袖口に蒙ふせる飾り下り)スガリと接けて膝下に飛散るを忙しく拾ふてテーパーの嵌にて娘に見へぬ様に話める是時其男の娘の調子を變へて娘は悟られざる様との心配、心急ぐ儘あかしくカフス嵌まらせして益々氣の焦燥つ工合、氣焦燥に従ひ頻に手を操りて身軀甚だ穩やかならぬ格好杯別よ其男が妙に變な身振を長々とあすにもわらせ只た拾ふて二三度嵌め損なふ儘々四半分か廿秒かの間の所作あれども鈕の歪がみたるも失禮とする作法厳しき國ありて婦人の前よてと別して行儀を正くする習あるよ殊お是男別よ詞や色よこそ出さね是娘よ懸想せる趣を疑ふ可らせ左るよ我が屬意の婦人の前よて其氣よ叶えんと勉強して話を折も折とて是始末なれば其心中の周章狼狽推量るべく思ひぞも噴き出さざるを得ざるあり是と唯だ一幕の内の一事を擧げたるものなれどと同じく男女の間柄の模様を種子とするよも其趣の立上がりて品よさよ是の如し以て其他の事共を御類推おさる可く候又彼の談下手の人か可笑しき事柄を談すよ己れ先づ啞々と自ら笑ひ乍ら談まの、れども談したる處よて聴者よと存外可笑しくなく又た上手の人と地味よ徐々と談せども聴く者の顔を解す杯の相違ハ乃ち日本の俄と西洋の滑稽芝居との模様の異なる所と覺へられ候故よ第一よ品の上下第二よ技の巧拙と是の二ツ



の相違の彼此の間は存することを御合點なされる可く候

●問 芝居、オペラ、等惣体小屋掛り舞臺機敷杯の有様如何は候や

●答 小屋掛りの大体よりお話申せば四角なるものあり三角なるものあり外廊の形も其場處の廣狹、近傍の家の建込方よりて一定せざ候舞臺機敷の位置も概略皆な一定ありて舞臺の正面「一」の字形の横たより機敷と舞臺の兩端の付け根より半月の形を成去て連なり對し居候茲は絃極長て短く弓幹極て長た弓ありと假定ひべし絃は即ち舞臺より弓幹と即ち機敷なア舞臺と日本の様は幅廣くして奥行狭く短冊を横ふしたる如きと異が幅と奥行と相似て恰も式紙を置きたるが如くは候機敷と四層乃至六七層も重なりて段々となり居や恰かも棚の如くは候是の半月形の機敷と「一」の字形の舞臺との間を廣く平みて日本より申そ平土間の處は當り申候一寸見たる所より第一は日本と相違するの舞臺は花道の無き事と雌方の平土間の最前(大阪邊にて咬附と稱する處)に控居る事となア平土間の中央より後ろの半分はピットストールとして極賤すさ處なれ共其前の半分をストールとして甚だ貴き處なア是のストールの前即ち舞臺の床の付け根の處を一區畫丈け仕切りて雌方と茲に見物を背にし舞臺に向ふで陣取れり尤も地の堀凹はめおがで雌方の頭と背な床よりも低くなる様になしければ

見物の目障りになる事となけれ共ストールの最前に坐せる見物の最後に坐せる雌方と手の届くまでの近くに相接せるとして接し居候

●問 雌し方の外に床の淨瑠璃又の呼出しの蔭歌杯申す類の之れなく候や

●答 左様、之れなく候

●問 然らば唯だ樂器にて雌立係のみに候や

●答 左様

●問 然らば前面に坐せる雌方一と組の外は何もなく候や

●答 否時おが七曲かに悠遠なる響の風々として地底より湧出るが如く聞ゆる事あり是時前面の雌方の一同に手を翳めて静まり居候是れ床下か或て舞臺の背にて奏る事と存せられ候但老是を常に有る事に之れなく候

●問 幕の工合と如何に候や西洋にては矢張最負連々ア幕を贈る杯の事あり候や

●答 幕と皆釣上げ釣下ろす事に候西洋の舞臺は天井甚だ高くして舞臺の幅と割合に廣からせ故に釣上げ釣下ろす方便宜にて曳く方の不便に候尤も曳き幕を用ひざるに必しも舞臺の幅に關する事は候とねど打見たる所の体裁より申すも左様に候又幕と其座附の幕一

張ゆるのまほて他より贈る杯の事之れあり候

●問 然らば役者杯最負なる者と如何にして己れの最負を示し候や

●答 示すにも及べぬ事に候最負あれば屢々其芝居を見物に参るべく候又た強て其を又先方に通じ度と手紙を遣ひすも宜し公衆に觸れ度は新聞に投書して其旨を吹聴するも宜し尤も貴族の子弟が愛顧の女役者を招聘する杯と又た別種の事杯に候倫敦巴里杯にて所作事の終りたる處にて見物より薬玉の如くに圍るめ飾りたる花を即座に其女役者に贈りたるを見し事の折々之れあり候是等が眞に花を持たせたる者とも申すべき歎但し是迎大芝居にての餘り見掛けたる事御坐なく候又男役者の賞ひしを見掛けたる事と御坐なく候

●問 遊來の東京も芝居小屋段に宜敷相成り候新富座千歳座杯と隨分美事なるものに候と

●答 誠に残念乍ら是と比較も割合も掛り申さば候餘りに懸隔方の甚敷候故何よりお話し致さんかと立迷候先づ其方より御尋下さらば之に應じて御答申さべし候

●問 機敷にて矢張ケットでも敷さあり候や

●答 敷物を敷きたりと申すより一切錦(日本にて云ハハ)と以て纏ふたりと申す方適宜なるべく候大抵赤色の極厚き毛氈を以て一切包み廻りし柱も凭欄も椅子も悉皆同様同色あり何處も觸はるもフクとしてシナヤかある事何か手近く諭へて申さば左様く先づ別製の人力車の内張りの如きものと御承知あらば遠徑あるべく候又芝居とてては上等の處にて絨の満幕を垂れたるも之れあり候

●問 平土間之如何候や

●答 機敷の外は皆あ一人腰掛の椅子を平一面に並べたるものは候機敷の方と素より一ト間々々仕切ありて其中に備へある椅子と一個宛何處へなりとも移し動うすと自在に候へ共平土間杯の椅子と一人宛は分別こそ致しあれ匪脚と一聯一申ふて作り付けに候故に平土間お並び居候者其上より眺むるときは小學校の子供等が敷場に坐て居る時の丁合よ似たる者と御會得あさる候

●問 其平土間の椅子と少しと綺麗め候や

●答 少し處にて御座なく異常に綺麗め候蒲團と皆なハチ入り脇掛の皆を小枕付さよて其切地と極厚き毛氈又と絨の類は御座候

●問 日本にて土間の前を低くし後を高くし物体に勾排を着けたるハ見物も便利ある仕組

は候何れ西洋よても斯く致しめるとも存候如何

●答 左様は候西洋よても土間の外、棧敷の區畫の致方よも氣の利きたる事を致居候御承知の如く日本にては棧敷の間の仕切は只だ低き馬堀松を入れたるのみの事候へ共西洋は棧敷悉皆別室の如く隔て了りたる者候故若し日本の通り舞臺と平行線は仕切りて少し後邊は坐はり候もの隔ての壁障へられて馬車の馬同様に己れの對面を一直線に視るよ外何れ神能のぬ事と相ひあるべし故之を避くるため東西兩側の棧敷と皆な舞臺に向ふて斜めは仕切あり候恰も矢の羽が兩側より鐵の方斜め向ひ居候と同様の狀に候是等も初めて見たる私共の目よと異様な覺へたる一個條に候

●問 燈火の工合と如何は候や

●答 燈火の電氣、瓦斯等種々交じへ用ひ候通例小屋の中央に天井より下げある大燈火ありとて數千(諸法の數よとあらざり)の蠟燭形の瓦斯火(瓦斯の火口を蠟燭の形に致したる者)が團々と相聚りて大きく椎實狀に相成り居り其間には球様の電氣燈を交じへ挿さみある工合實色白色の火相映じて陸離、彩を成し明かるき事甚だ明かるければ美しくしき事亦た極く美しく候是の椎實狀の大燈火の建物全体の廣狭よりて無論大小のあると候は任大

を分めて其最も太き處の廣徑二箇以上あり候

●問 舞臺廻りの燈火と如何

●答 尤も妙を覺候は舞臺の前端即ち雨落の處の燈火は候雨落の處を少し斜に置り方内まで切下げて是の窪處に燈火を仰ひけ置くと候故は照るみは十分舞臺を照りわたり乍見物の目よの筐が障とありて直接は燈火の光体を認むるとなし左れば蠟燭に如く見物よ眼花となく又たブリキの蓋をつけたるが如く目ざわりとも相成らぬ事候一せしたる事乍ら氣の利きたるもの候はせや

●問 舞臺の飾付と如何は候や

●答 斯く申しては何か些と繪畫論の領分を踏まむ様候へ共全体繪畫の巧拙の差と無論の事として扱置くも西洋の繪畫の彩色は富み居候ゆへ同じ雲の色を描き候よも崑の彩を點し候にも如何にも眞物を面のわたり見る様候へ候加るは剛の燈火の使ひ方甚だ巧まして假とへば森谷の塙を現出し候とさき前の方には樹交錯の狀を描き樹身、樹葉、樹葉の外をば皆悉切り抜き恰も眞物の如くさせしを飾付け其背後は又た種々木石を掛置きある上は天井より斜に藍色の燈火一條を垂れ下り其の群衆と背後の木石との間の空際を照らす候

恰る太陽の光の鬱茂せる様々として蒼然の色を成せる如く見ゆる春に候又其具の一切上より釣上げるの下より繰下ろすかの二三にて其仕掛も至て整ひ居候故幕の間は相觸る、響丁々として常より人耳を乱るす様の騒動之れなきと亦た快き事候

●問 日本より西洋へ御出の上にて第一は目を駭ろか程目立ち候と何等の事柄に候や  
●答 先づ人事は就て申さば英國杯の世間の行儀一般によく行届き萬端の事一切規則にて律りたる程は作法整なると候右に日本杯と較ぶれば實に際つきて目立ち候程の相違之あり例へば他人は無沙汰見舞をあすが如きも自づから一定の時間ありて至急の用事にあらざれば通例は午後二時半より四時半迄の間に限るとに候左れば故あきに早朝或は夜分或は食事頃人にを訪問ねて先を方煩らとぞ如きとて決して之れなく候又婦人杯の前ふて又た別して遠慮強く少しよても醜なき事穢さき事は渉たる詞杯と士君子の決して用ひざるに候例へば「裸體」と申す詞を出だすも最早既は不作法者の如く見へ口に出すを憚る事候是の一事よて其他と推して知るべし又少し醜なき話及及ばんとそれバ其座ふあ婦人へ聽りぬ真似し又之其話を外事に轉ざるが如き程のとは候又殊に感心なる食事の節杯等と會を相接する位は並ひ居るも辭席の人は飲食せる唇の音の聞へぬ様に似しひの一事是れな

り始めて日本より赴む者とは是の事は氣つかき多くのヒナヤノムシヤノと大なる聲を立て甚だ卑陋野蠻に見ゆるとあり是の一事の最も著るしきにて日本へ歸る後他に招かれ或は同席にて食する内ふても人に因りて二三間隔りても聞ゆべきニゾロノと大ある音をさせ乍汁と燗り其他の物を食べるお同じくヒナヤノムシヤノと犬猫の食ふ加き大ある音を出ども希れあらざるが如く相見候是等飲食の中より著しき野卑の相現すものなり左れば外國人杯と共に會食する時とは是の一事を少しく注意せねば實に彼等不行儀不作法を見下げらる、の恐れあるべし内地雜居も最早遠うらざるとあて外國人との交際も必らも廣く始まるべきとあれば些末のとあが言の序は御話し致し置く事候  
又日本人に極めて多くして西洋よてと餘り見受けざる一事を頻りに懐中より時計を出きて見ると是れなや凡そ他人は招かれ饗宴に赴くと主人は對して其待遇の手厚たため面白ろく思はせ長座を爲すと云ふやうにするが禮儀は適ふ譯なり然るに何か忙がし忙は懷中より時計を出して眺むると甚だ失禮千萬の譯も候とせや定まれる宴會の席杯めて人の前を憚りらば時計を出して公然と眺める者杯と殆ど見掛けざるると候然るも日本よてと上等の士君子の地位を有ちながら斯るを爲すものも稀くと見受るが如し是の時計を所持する

風俗の日本入りしと猶ほ淺きが故に自然是より付ての行儀も定まらねとて考へたる其他英國杯してと士君子の間の談話より下掛りたる醜なき話と云ふものと殆んど其口頭より洩る者ありの皆を慎みて之を避るとは候然かざる日本にてと士君子の間にも不慮慮は故さか下掛りたる醜なき話を衆人廣座の中にて喋々と聲高く述べ立て、愧る色のみき向む往々之れありやう見受け候是等も甚だ目立ち候やう一覺へらる當時は惡疫流行の際なれば別て其邊の話多きやと知らざれども話さず濟むべきとなれば話さぬ方宜し又話すも話し様のあるべきこと存候

又其内行はいざ知らせ外面儀式の上より云ふは西洋よりと士君子婦人の間も於てと娼妓杯と申すとて一切之を口頭に出す者なく之を語るさへも辱なりとする程まである世の中なる日本は大異と異ひ偶々縫箱杯する者の中にも輸出品の内にて華魁と唱ふる者の姿杯を縫ひ出し或は描き出し之を美術中の一つの飾同様とあし置く者ありて西洋の婦人より之を如何なる種類の婦人なるやとの問を受け之を娼妓と答へる國の恥辱にて娼妓の如き者を斯く品物と送掛付け或は縫付けするなり其風俗の紊れ儀式の崩れ居る國なりと見下せらるゝとの愧らしさは遠く之を娼妓と答へると出来せして是は日本古代の然るべき婦人ありと胡麻化しする人もある程のと候

右に中等一と通りの行儀を云ふものにて夫れすらも猶ほ斯くの如し上等社會の人は至りて之尙更らるとは候唯だ其下等社會のものにて随分不行儀不作法をあす者も少くあからざるを乍ら夫れはらと日本に比較する時は異常な割合の少くなきとあて如何ある下賤の者と雖も其仲間の婦人に向む下掛りたる話杯をあすものと殆んどなき程は憚り居候最も西洋連も其行儀の上より緩急の差別ありて其都びたるを云ふに佛國と萬事英國より立ちこへ英國の方之甚だ鄙びて見ゆるとは石左り乍ら又事より因て佛國の方の甚だ鄙びあるとせあり婦人杯の行儀に至りては上等と其模範を佛國より取るとあが中等以下に行儀に至りては却て英國の方嚴重ありとの評判は候又日耳曼に至れば其行儀も少し緩かあて婦人の前にて遠慮するとも英國に比すれば稍や輕き方なりと見ゆ然るも其行儀と云ふこと中々日本に比しあらざる例へば男子に向ふては或は帽を脱がせして禮をなす場合もわれども婦人に向ふて禮をなすも一切必き其帽を脱ぐが如き類は候

英國と他國より比して一層行儀の六ヶ敷處柄にて曾て或人の話にも其國にてと下なる向ては

る先方が女あるが故に便所の所在を問ひかねる心地すと聞きたれ共當初の内こよそ夫れ  
のとあるまじと思居し少しく土地馴るゝは從ひ實は其言の虚あふざるを知り候如何  
よも英國の摸樣にて下女も向てさへ下掛りたる場所の所在を問ひ難く又下女が餘儀なく  
之を返答する場合よも其顔を報らめて致やかま知らせ呉れる程の有様候左に其他の事  
も亦御推量なさるべく候

●問 甚だ卑陋ある事をお尋致す様あれと便所を問ふと下女よさへも遠慮致さねば  
ぬ様ふて之場合よもよりて之随分御困却の事も多うるべく候

●答 致し先づ大抵の自分の機轉にて何處かと探がし出す事候家の内なれば問取建方何  
れも凡そ相先居るがゆゑ方抵見當相付て又た芝居小屋杯にてハ凡そ見當の邊を獨りあて  
往む居れば番附賣やの女杯が先方より氣を利かし殿して指さし致へ呉ル又たステーション  
と宿屋とかあてて左様小長らく彷徨居る暇もなき事多く候ゆゑ其處に居る鐵道の役人又  
と部屋附の小使杯の耳の處へ行き内所にて殿津(セントルメン)と何處なりやと問ふと候  
是と男子の便所には皆を殿津との一語を記したる標札掲げたる故候尤も斯く申して問ひ  
たればとて其問題が既と卑陋なる事柄あるが故到底行儀宜しき方への之れなく候へ共先づ

旅行中の事急中事として相互に其不作法を起せる丈の事候

●問 西洋ふて吉事凶事の時の衣服の襟子と何度候

●答 吉事と婚儀を以て大禮と致候へば先づ婚儀の駿東より御話致すべく候男子の方の昔  
な通例の燕尾服なり女子の方を亦た尋常の禮服なれども是と皆を白さ色の絹を用ゆ是の點  
ハよく日本は似よりたりとも申すべし且つ婚儀の時の女子と必ぞ被を頭より蒙ふり首の周  
邊は長く寛くシホくと垂るゝなり是の被も矢張白さ色の極薄き絹にて紗の如き類のもの  
あり打うつぎたる所にて顔の邊とはりて見ゆる工合甚だ品の宜しきものなり是も亦も善く  
日本の花嫁の縮帽子と相似たるものと云ふべし又た花嫁への必ぞ侍女(フワイドメイド)と  
申すが一名或は數名相添て其式お参かる事なるか是と皆な成る可く其親族中の娘の年頃十  
三四より五六の間なる娉擇びて之お仕立つるが定てあり是も亦た支那諸侯の儀、同姓の  
國の姪嬢を以て花嫁の勝とする申すお相似たる趣あり婚儀の時お限りて花嫁の被をま  
たるのみよて帽子をば冠らる但た橙の花と葉とを装飾し取合したるを髪に挿み置く事  
候尤も是の花、葉と何れも剪採もの候  
●又凶事の時の衣服の先づ帯と黒さ色と申すか悲哀の心お表はそとと相見候見しなれば通

例の燕尾服なれども襟飾も黒き色を用る事なり元來燕尾服の時之白き色の結飾を着けるは  
 一般の定りあるは凶事の時ふて亦た必き之を黒色に致すが定りあり又た女子あれば同じく  
 黒色の禮服を着るとあり其喪を服する間は男子あれば常は彼の絹帽子の胴を黒色の切地  
 へ幅廣く縫ひ置くあり又絹帽子を冠る程のものにあらざりて細紗帽子を着る方の社會なれ  
 ば左有何れか片手の袖の二の腕の處より一寸五分乃至二寸許の黒色の切地を縫ひ付け置くな  
 り是等の切地と矢張紗の襟あるものにて特は喪の時用のために出来居るものあり女子は  
 至りて喪を服する間黒色の外決して他の色易りの裝束を着けるとなし黒色の衣服と平  
 日も善く着るとよて喪の間はあらざれば黒色の衣服と着られきとの定めとあらざれども黒  
 色の衣服はあらざれば喪の間はと着られきと亦た定りたる作法あり又た其夫を喪なへる  
 婦人と必き髪は背は黒色の消さ紗の如き切地と懸け流がせり髪は處より一寸餘程とて  
 て狭め下の一尺許も垂れ居るなり是の髪とウエイル(髮面)とでも譯すべき歎故の女子の面  
 は黒ふる薄絹(すゝめ)とて顔を蔽ふ様は前より垂れ居たる譯のものなりしは世の推移と共に其  
 飾も變じ今の斯く意氣なる姿のものとなりしありと云ふ婦人は限りて必き其帽子は色花  
 の飾を着け何か黒色の切地とて飾り置るものなりと云ふは飾り置るものを一も挿まぬ歎なり

若し夫ある婦人の年長けて老境に入りたる後までも猶は帽子は色花の飾を着ける事な候  
 又喪の事は付西洋の風俗の如くしきは其衣服の色は右の如く厳重とてあり乍ら其喪服  
 を着たる者が無遠慮は芝居寄席杯遊戯の場處に立入るとあり日本おれば喪に居るの衣服杯  
 こそ確かとしたる定りなければ喪の間は凡べて謹慎を旨とし成る可くは戶外に出づることを  
 遠慮するが一般の習をるは西洋にて芝居寄席杯に至り見れば男子女子とも喪服を着たる儘  
 平氣にて機數杯を坐わたりたるが稀ならざるは甚た奇異は覺へらる、事な候

●問 西洋にて下女の有様は如何な候や

●答 倫敦杯に居馴るに従ひ人情の何處も同じきよの思當たる事其甚た多し下女の事杯を  
 即ち其一は候倫敦にて世帯持の婦人杯の話を聞け「倫敦の者を何分は使ひよくし」とて  
 態に近在のものを召寄せて使ふとあり又た年若き下女が蔭にて囁やくを聽け「内の女  
 主人は毎つもお前と年が行うぬから氣が付うぬ」と叱れど「云々、又た年長けたる下女と  
 年若き下女と兩人同居する處にて其年若き方が常は年長けたる方のためは凌ぎ壓へら  
 るゝとて不平絶へず双方の口論の末に年若き方が泣く事を屢とあるあり或は座敷を掃除  
 に来たりする序は棚の上の菓子を一寸撮り食ふ杯申す者も聞くと之れある次第は候

三 下女の仕度、甚だ簡單にて尋常の衣服と衣服あれども、兵上と下と揃ふありと云ふまであり肌、は只た襦袢一枚を着け、其上に更紗様の筒袖、袴を被たるの事なるが、多し冬分杯と寒さる頗る嚴しき、唯だ是れのとみて能く堪へたる者ありと想ふ程、候其立働の間、胸より膝の邊、かけ白きレースの腹掛と膝掛とを繋ぎ合したる様なる一種の蔽を當て居れり、即ち日本の前垂と云ふ處あり、其使杯は出行く折、前垂を脱ぎし、白きレースを巻き付けたる小き帽子を一寸冠ぶるなり、佛國にては下女が細長きレースを以て背鉢巻の形、ふし其結ひ餘りの尾を、は一尺許りもヒラ／＼と下げたる様、些細の事乍ら至て、派出やう、見ゆるあり、日耳曼旅行中、屢々下女の是の仕度をなせるを見たり、日耳曼にて近來佛國の流行風次第、心に浸潤、こむ山なれば、是等を其一ツあるべし、唯だ伯林にて目立ちて見苦しく覺へたる、露頭

の婦人の折々、町中を往來したるを見請るあり、眺めたる所、下女と見え、ね、亦た身分高き婦人とも見へず、只た其邊の中等以下の家の細君の近處、歩行したる者、と見え、れど、何分も倫敦杯にて、見受けんと欲するも、見受ると出来ざる、不行儀ある事共あり、倫敦杯にて、下女に至るまでも、必ず帽子を冠らされ、決て戶外にて、出行か、殊、日曜日、女主人、連れられて、寺院に参詣する時、杯は衣服も、晴着より更、ふ、帽子も、平日のレース巻付の分、とあらせして、通

例のボンチツトを冠る等大、観を更たむる事、候之を總ぶる、通例下女の仕度、家内立働の時、が更紗様の衣服、み例の前垂なり、是の上、冠むれ、彼の白のレース帽子あり、此外、黒色の女服一ト、襲、是之、臺所にて被居る時、もあれど、大抵は、外出の分なり、唯だ下女にて仕度の仰山なる、伊太利、及ぶ、い、から、伊太利、にては、身元ある家の夫婦杯、其幼孩兒を連れて、外出する、と、さ、よ、と、其兒、別段、異常の華美を、装はし、むる、と、能、さ、ざる、が、故、其、代、り、是、兒、を抱、きたる、守女を飾り立て、綾織の絹衣裳、胸のあたり、何の金線杯を、閃、かしたる、が、花、く、し、さ、出立を、な、さ、し、た、る、が、多、く、候、隨、分、一、種、の、風、俗、と、存、候

●問 彼岸の團子、立猪萩餅杯と申す様の事、西洋より之れあり候や

●答 之あり候、十二月廿五日、教祖耶穌の誕生日、にて、クリスマスと稱し、一年中の大祝ひ日あり、是日、より、例、と、ま、て、クリスマス、に、盛物、(フッティング)と、や、す、と、家、に、あ、て、掃、ら、ゆ、る、事、も、候、是の盛物、之、製法、中、より、喧、ま、しく、先、づ、誠、に、其、大、器、を、申、さ、す、第一、乾、葡、萄、一、磅、半、を、切、り、碎、さ、之、み、覆、盆、子、半、磅、を、加、へ、又、た、凝、脂、一、磅、麵、包、を、碎、さ、た、る、粉、一、磅、橙、及、び、レ、モ、ンの皮、一、磅、麵、粉、一、磅、其、他、卵、子、砂、糖、プ、ラ、ン、テ、ー、等、を、調、合、し、之、を、善、く、混、せ、て、長、く、の、間、煮、つ、め、る、あり、之、を、混、せる、に、は、又、た、綠、義、の、ある、事、あ、て、手、づ、う、ら、之、れ、を、混、せ、た、る、もの、一、年、中、仕、合、宜、ろ、し、と、て、家、内



六三

中が皆な寄りて集かりて銘々一度宛之を攪き廻す事に候余等も下女の勧めに遣て一度宛之をクルクルと掻き廻したる仲間あり扱て之を煮つめたる上よて平ある皿の上を圓く頂尖がりたる富士の山形を盛り立て其周邊をブランチデーを注さかけ之を火を點けて卓子の中央に持出る是時卓子を圍みて坐わりたる者共は皆をボラーと叫びて之を喝采するありブランチデーのバナナと燃へる音も皆々の喝采の聲相交りて聞こゆる其響きの裏よ於て卓子に上席せる主人一々之を分ち盛りて同席の人々も預かつ主人の直ぐの隣に坐わりたるもの杯の尙だ青き炎のナヨロと立ち升りたる物を匙よてすくひ食べるあり左れども酒精火をれの火傷杯するると決て之れをし是の盛物と本名ブラムブッシュイングをれとるクリスマスは附物として拵まゆる故にクリスマスブッシュイングと通稱し候是に英國が別して得意と見へ子供杯之是の盛物と樂み待設けると恰も日本の正月餅と同様なり風味一寸備中矢掛の袖餅子に似たる所あり英人之例の大食と申し又殊よ是の盛物を嗜む方あれば昨年のクリスマス杯は倫敦よて或る大家の娘が之を食へ過ぎたるがため頓死せる話あり氣樂ある某新聞は此話を切論して一日の社説を撰めたる事之れあり候

●問 正月をも盛に祝ひ候や

●答 英國よて正月と至て淋しく候右のクリスマスが日本の正月と申す程の賑やのさよて是の祝ひ日よと座敷臺處等所々の壁又の天井は青葉を吊を懸くると猶ほ日本の飾りと云ふが如し平日と各自渡世の業も忙しくして親子兄弟皆を離れぐよ住まへる者も是日おご一家に打寄りて共々一ツ卓子に坐りて夕飯を喫べ或はピアノを弄そび或は歌ふ等甚た打解けて睦み遊ぶ事あり又た親しき間柄に之クリスマス贈物とて種々の品を遣り取りするると日本の歳暮歳玉お等しクリスマスより正月より引續きたる体日よて皆あ平日よ異ありたる日と致しあり殊よ一月一日と別よ「新年の日」と稱して取りわけ大切お致そとあれども前のクリスマスの方主とありて一日の左して賑はふ程のとあさが通例ありクリスマスの日及び「新年の日」おと知人の間同士にてカルタを贈答する禮あや是のカルタよと種々綺麗なる繪を畫かさ又金銀字等あて色々の詩歌又と經文中の語又は名言杯を記しあやて是にクリスマスの前より各小間物店よて賣捌きあれり之おは「樂しきクリスマス」を祝申候「愛たき新年を賀申候」とか書するが通例あるが「或は是を繪と共よ板よて摺りあるもあり」其中よと「樂しきクリスマス」を祝し併て愛たき新年を賀申候」とて双方を一所よしてクリスマスの日よ贈答するも少あから申候是等も新年の餘り珍重さ

七三

れぬ一證と申すべく候

●問 クリストマスの前後は何か別段の芝居を致す由承候如何候や

●答 其のバントマイムの事と存られ候バントマイムの本仕來身振の體あて元方の無言の等の義の語あり左れどもクリストマスの頃より倫敦まで常例として多く相催すバントマイム(仕方芝居)は語義は違がふて皆を喋り立つる事候是の唯た年若き娘又は子供の喜び觀るものにて唯た扮装を華美にし滑稽を旨とし目先さを悦ばははの芝居なり左れば外題も毎年々々大抵定り居てお化物語(フェイリーテール)亞刺比夜話(アラビヤナイト)等子供の常と斷そふ桃太郎、カチノ山の如き類の中より又尤も普通ある話を撰びて之を演するあり左れば筋之最早人の飽さる程承知せる事あれば別に其邊とセリフと細やかにするも及ばず只だく華美と賑やうにして面白かしく致すのみの事候例とへば亞刺比夜話の中の「不思議ランナ」の話を演せば彼のランナは魔王が神通力を以て古來より美人を見せると申そふ托して歴史上有名ある美人を集め女役者一人宛を其美人は打扮せ其時代くの流行に従ひたる種々の飾り方造り方の馬又は車又は乗物等に乗せ又之に其時代の風俗に従がひ色々の仕度の侍女、衛士等を附け一組宛次第は舞臺に練り出し皆を揃

ふたる處まで又た百有餘の踊り子出で、大舞踏始まる等金銀錦繡燦爛て目を奪ふ計り花々しき處が是の芝居の精采候

●問 西洋人の相貌骨格の如何候や各國は就て夫々特有の個條を之れあるべく存候

●答 先づ英國より申さく私共が倫敦に到着の第一は快からず感したるは自分等の身材の矮く事候町中まで行き違がふ人も皆己れ々々二三寸乃至四五寸高さありさるはかく向ふより小さきある子供上りの若者が來たれと是こそ我よりは低かるべしとそれ違ひさまお肩を較べたれば矢張先方は乳までしかあし見わたしたる處先方の人々を惣体は打揃て丈高さが故一寸眺るのみあては左して高さ様も思はず自分と較べ視よ及て始て其異常(余等より謂へば)長大ある事を悟るあり余等と日本あて割合すれと率ろ高さ部分も属する方あれとも倫敦杯あてて中人よりも平胸二寸許低く覺候又其次は如何にも残念あるは先方の人々の血色の實實際際して壯健し氣も亦た綺麗あるとあり飽まで白き底は紅味を持ちて一種の桃色をあせるを通例とし其紅味の勝ちたる方は面より首筋よりけし始を精を塗れるが如く襟元より湯氣もても立ちのせせやと疑くる、計り丈夫相も見ゆるあれば又た白勝ちの方、と長は玉子の蛋白の如くは玲瓏れり余等平日打寄りてと一學問技藝

の及ぶ事ハ勉強して之を學ばゞ到處追付かれぬと謂ふ道理ハあし唯ハ勉強にて能はぬ  
 ハ身材等の事アせめても身材たけよても彼等の上ハあり度ものあらむや相互ハ對坐して  
 話をあそにも彼等ハ常に俯し語り已等は常ハ仰き聽くの体勢をなさねならぬ残念ある次第  
 のものあり或る西洋歸りの人ハ御旅行中何が一番ハ愉快ハ候ひしやと尋ねたるハ私ト身  
 材の低きものハ出逢ふたる時が一番嬉しく候と答へたる由の話を聞き居しが成程尤もある  
 事に覺へらる」と且つ笑ひ且つ嘆したる事屢々候  
 英人の顔立ちハ豐潤にてノンペリと濃厚しき方なり髪の色ハ黄又ハユゲ茶が通例なり眸子  
 の色ハ碧を貫ひて黒をハ賤むと申す傾きあり或る統計家の説ハ英國よてハ碧眼の方次第ハ  
 割合増加し黒眼の方次第に割合減少するの實迹あり是れ男女とも碧眼の者を愛して黒眼の  
 者を疎んするよて其愛せられ説くる、者ハ常ハ増加すると云ふ進化の大法ハ因て斯の差異  
 を生むものありと云へり同し英國中あても蘇蘭の人は身材一層長大く又髪の色も赤チ  
 ヤケテ殆ど棕櫚の毛の如きをあせる者少からず又た瓦爾斯之稍や白勝ちのもの血色のもの  
 多き方あり之を要するも英人の特有の點ハ身材スラリツと高く双の肩ハ有るか無さか迄に  
 撫でゐろしよなり居るの處ハあり候

一葦帯水を隔てたる中なれども佛國ハ參れば相貌骨格共ハ又宛然別物ハ相成候佛國よてハ  
 平均したる所身材左して高からず日本人を少し長大したる位の者ア或は扱んで、高さ  
 む之れあり候へ共其工合スラリツと高さよて異あり何れかと申さこズソズと短格の體  
 の長さ者と申す方あり顔立ちハ英人より少しキニツと引ベまりたる處ありて云はゞ氣の利  
 さたる方あり英人の顔立ちハ其末流れてマヲリとして細アさき至るの髪あり佛人の顔立ハ  
 其末流れてイカツきシカめる險惡の相ハ赴く憂ア先つ是の二國人ハ杯と善く其國柄ハ柄を  
 其顔ハ顯とまたる者と云ふへし一方ハ鈍く濃厚をしくして其内に應揚なる處あり又一方ハ  
 鋭く賢くして一寸氣の利きたる工合杯其顔ハ即ち恰好其國柄ハ柄の寫真あり佛國ハ髪の色  
 色稍や黒き者隨分あり又伊太利よて更に黒色の髪多き様に見受たり伊太利と人の身材杯と  
 先つ佛國と似たり誇たゞなり顔立ち佛國より少し濃厚をしき方と覺ゆ日耳曼と通り掛り、  
 見わたせる所よてハ顔立身材共ハ參差不同よて茲ぞ日耳曼人の特有の點なりと申す處と  
 一寸捉へ難かりし但し肩ハ何れも角立ちて張出たり左れども南部の方ハ大抵ハ人の身材揃  
 ひ居りて英佛の間ハ立つ位のものと覺え北部の方ハ高さ看止くる計り低さハ看下と様  
 なるもの打混し居るの差異ある様あり之を要するに日耳曼人と物體ハ相貌武骨よて英佛の

如くお品よき處稱や乏しき方あるか疑候

婦人の平均したる所にては英國が一番不同なく揃ひ居る様あり佛國の婦人は物体よ甚た愛嬌としとの公論あれとも其顔立の上より謂へば甚た不同多くして英國の如く揃て器量よからど躰の態度杯に至りては概して迥か英國に譲る様あり尤も二國絶頂の美人同士を此らへおて佛國の方婀娜の致を以て勝さるとの評もあれと其既人々の嗜癖も涉れと別論あり又伊太利おて婦人は大理石様の白「パールホワイト」として一種特有の色あり英國杯の如くは底よ紅味を帯ひざる純粹の白色あり其末と寧ろ稍や青味を帯ひる向ふ流る、方あり日耳曼の婦人も種々よて一定の事を品し難し然れども通例に稍や鄙びて見ゆる様も思ひ候

八種の異と云ふ程争これぬものはあく候歐洲よて金と一番上手溜めれば世にそ一番擯斥さる、彼猶太人の若きと一見して其特有の所相分り候其特有の處も他よあらば鼻あり猶太人は物体よ鼻甚太とく又た大抵「乙」の字形の釣鼻なり左れ西洋よて草脚紙の敵役と同様の鼻あり且つ甚た太とさるものを見れば皆之を猶太人と思ふても宜敷程なり是の尤も明白なる個所と見へ猶太人の祖あるモセスを畫きたる繪を看ればモセスをば毎つとも是非

太とさ釣鼻よ畫きあるが通例の定り候

●問 日曜日は休業日の事あれハ町の有様も常異りたる所之れあるへく存候如何

●答 倫敦よて旅人の爲るハ日曜日程ツヨカイのあき日となきあり又た西洋諸國よて倫敦程日曜日を嚴重よ致す處はあきあり倫敦よては日曜日ハ有りとし有らゆる品物仕事も切死よ果てる事候先づ雨日風日の別なく人事よ最も大切あるて人の往來あり其往來よ最も必要なるは市中の汽車あり其汽車も日曜日よは午前は通行を相休み午後よ至りて始て徐々之を開くあり通行を開きたる上よても平日より發着の度數を少くし候又た何時を限りもなく人事よ缺き難きは吉凶存問其他贈答の通信あり其通信も第一肝腎あるハ電報郵便あり其電報郵便け重立ちたる或る個所よを除きたる外日曜日ハは各々局を切りて取扱を相休すみ郵便局の投書函丈け開きあれとも之よ手紙を投し置きたればとて其日は配達となさざるが故唯た其明朝一番の配達よ間よ合ふを樂むのみの事候汽車電報郵便杯一瞬一刻を争ふ緊要のものすら斯る次第あれば以て其有様を推量よへし町家と申と山家、店と申す店、悉皆戸を鎖し錠を止め表は唯た錠前と木戸の外何も見る所なし昔し禰衡が座人を罵りて皆な行く屍、走しる肉也と申したるは一時の狂言ながら倫敦の日曜日は町は都べて生息の

かき空房計りなりとを形容致すへき歟是の日は有らぬる賣物一切休みと相成候が故世帯持の婦人組は皆を其前夕即ち土曜日の晩お臺所物万端の仕入ふ出つる習にて少し賣物店のたき通ア筋の上日曜の晩の賑やかさは平日に倍して雑沓するあり麵包屋、肉屋、八百屋、荒物屋、小間物屋、等日用の品物を鬻ぎ候店々又は平日は大抵午後九時限ア店を仕舞ふが常あるよ土曜日の晩は十二三時の頃までも瓦斯電氣ランプ等の燈火を眼花までも燃しや立て景氣よく取引をなし其前をは夫々相應に身ありを取膳らふる婦人又は之を隨伴へる娘子供亭主或は只この是の景氣ふつれて散歩さする若者共思ひくく隊を成し伍をなし三々五々打連れ立ちて引きも切らず往來する杯一寸田舎の夜祭、東京の緑日といへる様の氣味あり左るよ是れより僅う五六時間を隔て、翌朝とも成れ之町は蕭然として人の往來さへ少く時々戶外に聞こゆるハ行歌して錢を乞ふ食丐、手練よて鳴る樂器を鳴らして物貰ひする盲目、あり左れば日曜日よハ博物館、繪畫館、植物苑、動物苑等平日見物遊覽に供ゆる場所くも皆な閉ちて人を納れず滯留の旅人は往くべき所を觀るへき所もあくと徒らよ無聊を嘆するのみ余等の發足の少し前に上院よて博物館繪畫館等は日曜日あても相開く様致さんとの議可決せるを聞き(未だ實施よと至らざりしかども)日本人仲間皆を打喜びたる程の事を

りしあり是にて其他を推量そへく候

●問 新聞紙も無論休刊致すへく候如何

●答 クリストマスの日にも一月一日よも其他如何ある祝日祭日よも一つも休刊をかき新聞紙あれ共日曜日に之皆を休刊致候

●問 彼地の人と如何あして日曜日を暮らし候や

●答 家お黙坐致す歟朋輩を尋る歟其他ハ寺院お參詣致す歟の事ハ候へ共日曜日よ一番繁昌致すは公園なア平日之朝起さると火點す頃まで市區(シテイ)おある商館商店よ通ひ務めそるよ間なき手代伴頭杯が是日よ一週中の骨休免よ各よ衣紋を飾るふて例の絹帽子や笠やかし細き杖子を挟さみシャツくと公園を往きつ來りつ歩るき居れば下女守女杯又た主家の子供よ附添ふて衣服の垢の引立つにも構ハ洗ひたての眞白き附襟を押し立て、アチヲユナヲと逍遙し、貧家の娘と見へて母の靴を借り來りしと覺しき足よも適はぬ大靴を引掛けて飛び廻り戯れ居るあれと同じく兄弟よや朋輩おや十三四の子供が古びたれども只た破れ裂けぬを珍重し父のマントルを袖長裾長よ着下しフックくし乍ら走り行く杯其他日雇稼の職人仕事師又ハ婦人皆を最寄りの公園お出で、遊ぶ事ハ候尤も是ハ重もよ中等以下

六四

の社會の者共が多く候

●問 日曜日みは終日一軒も店を開く所なく候や

●答 只此一軒あるの煙草屋あり是と平日通り商ひ居候又居酒屋は午後五時まで皆を相開き候料理屋は店々よりて早晩の差のあれども午後より夕方の間にハ皆を相開き候是と寺院に參詣する人々の晝飯は煖かある食事をあして庵の火を消し參詣は出行くの大抵の習なる故參詣の歸りよ是から内で冷飯を食べるも旨くあしとの心持より料理屋は皆まで夕飯致す者も稀れあらざれ之れを當込む都合もあての事候

●問 他の國よて日曜日の有様は如何候や

●答 巴里にて重立ちたる大家大店の倫敦同様ハ商ひを相休め共其外の中等以下の店に至りてハ營業致し居るもの甚多し又日耳曼にて私共の見たる所よて朝の間之店を開き午後より相休む様相見へ候左で乍ら何れも倫敦程申中一休思ひ揃ふて嚴重ハ休業する處となき様覺へ候伯林よて英人と同寓せる人の話ハ日曜日よて休業日の事あれ皆々打討りて骨牌遊びをなせども英人のみと決して之は交じらす此方より「骨牌を弄せばせや」と云へて必ぞ「今日の否」と答ふ「何故」と問へて又必ず「日曜日あり」と返辭する由物語りて笑居

れり如何も英人之自國よて日曜日は骨牌遊びをさへななきぬが習なれば例の自ら重んじ自から敬する性質より外國に至りても猶ほ獨り其習を守りて之を易へぬと思ひれたり米國ハ渡りし時紐育よて日曜日ハ邂逅しが店の矢張大抵悉皆閉ち居たる様見受けしが倫敦の如くハ木戸を仰し切らず賣物の矢張飾り付並べ立てたる儘ハ置てガラス障子より見へ透く様をし居たるが多かりし故ハ同しく一休ハ休業せるとて休業せる乍ら店の有様丈と平日ハ異ならず從て町も倫敦程俄かハ淋しくありて見ゆると申す事ありし様覺へ候尤も人の往來ハ均しく平日より減して相見候

●問 西洋諸國よてハ碧眼を貴ぶとのことを承りしが果して立派ハ見ゆる者に候や

●答 如何も日本よて碧眼の西洋人を見れば左程立派とも思てれぬ様ハ見ゆれども彼地みて見る時之其方ハ團扇を揚る心地致すと候東洋人の面色少し黒みたるが故ハ毛髪も黒く眼睛も黒く茶色ある方自らの世間の好みハ適するところなきが洋人は白く赤らげたる面色あるが故ハ之ハ黄金色の茶の毛を添ふ輕淡なる相貌ハ一雙の碧眼を點する時之實ハ稱すべき色の取合せとあることよて最初余輩の目ハ左程も思てざりしが少しハ土地馴るよ從ハ成程斯る顔色と斯る毛髪の色との間ハ斯る色の眼睛こそ色の取合せ佳きものと氣付

七四

六四

の社會の者共が多く候

●問 日曜日おは終日一軒の店を開く所なく候や

●答 只た一軒あるの煙草屋あり是と平日通り商ひ居候又居酒屋は午後五時まで皆を相開き候料理屋は店々よりて早晩の差のあれとも午後より夕方の間にの皆を相開き候是と寺院に参詣する人々の晝飯は煖かある食事をあして庵の火を消し参詣は出行くが大抵の習なる故参詣の歸りよ是か内冷飯を食べるも旨くあしとの心持より料理屋は皆まで夕飯致す者も稀れからされこれ之れを當込む都合もあてての事候

●問 他の國よて日曜日の有様は如何候や

●答 巴里にてと重立ちたる大家大店の倫敦同様商ひを相休め共其外中等以下の店に至りての營業致し居るもの甚多し又た日耳曼にてと私共の見たる所よて朝の間と店を開き午後より相休む様相見へ候左で乍ら何れも倫敦程町中一体思ひ揃ふて嚴重に休業する處となき様覺へ候伯林よて英人と同寓せる人の話み日曜日よと休業日の事をあれと皆々打語りて骨牌遊びをなせども英人のみと決して之を交じらす此方より「骨牌を弄せばせや」と云へて必き「今日の否」と答ふ「何故」と問へて又必す「日曜日あり」と返辭する由物語りて笑居

れり如何も英人の自國よて日曜日は骨牌遊びをなさぬが習なれば例の自くら重んじ自から敬する性質よりと外國に至りても猶は獨り其習を守りて之を易へぬと思ひれたり米國も渡りし時紐育よて日曜日は邂逅しが店の矢張大抵悉皆閉ち居たる様見受けしが倫敦の如くは木戸を備し切らず賣物の矢張飾り付並べ立てたる儘に置たてガラス障子より見へ透く様あり居たるが多かりし故に同しく一体に休業せるとと休業せる乍ら店の有様丈と平日は異ならず從て町も倫敦程俄か淋しくありて見ゆると申す事ありし様覺へ候尤も人の往來と均しく平日より減して相見候

●問 西洋諸國よての碧眼を貴ぶとのことを承りしが果して立派に見ゆる者に候や

●答 如何も日本よて碧眼の西洋人を見れば左程立派とも思これぬ様に見ゆれども彼地みて見る時之其方は團扇を掲る心地致すと候東洋人の面色少し黒みたるが故に毛髪も黒く眼睛も黒く茶色ある方自のら世間の好みも適すとあるべきが洋人は白く赤らげたる面色あるが故に之は黄金色の茶の毛を添ふ輕淡なる相貌は一双の碧眼を點する時之實稱すべき色の取合せとあるとよて最初余輩の目よは左程よも思とさざししが少しへ土地馴るよ從ひ成程斯る顔色と斯る毛髪の色との間ふて斯る色の眼睛こそ色の取合せ佳きものと氣付

七四

き候程のとも候右と専ら英國を申すことにて歐洲全躰の上より申せし隨分國々よて少々好  
 みよも異同あるべく又同し洋人の内よても人に因て好む所と同しからざるものあり例せば  
 婦人の相を記載するよと青黒の毛髪、大理石様の白の顔色、漆の如き眼暗、を痛く賞讃せる  
 ものもあて又薔薇の如き淡白輕紅の顔色、黃碧の二色を合したる眼睛を取合とざるを賞讃  
 する者もあり然れど人とは因て其好みも一樣よと勿論行のぬとながら先づ英國杯よてと碧  
 眼あして淡紅薔薇の顔色を賞するよと普通よ之あり候先づ大躰の處より云と、小女及び芝居  
 杯よては黒色の毛髪漆眼の婦人と通例其性活潑よして其弊と猛惡ある者の様よ人相を描く  
 多し又柔和よして俯け深き婦人の相を描くよと多く濃茶色と毛髪と、灰碧の眼睛とを用ふ  
 ると通例なり又芝居にて男子の惡人は動もそれの黒髪の者多く輕茶色の者少よし是等と東  
 洋人ある余等の常よ甚だ不平と思ひて打笑ひたるの一事ありき又輕茶色の人種の世界よて  
 の黒髪の者出る時之何か性質活潑猛烈あるが如き様よ見ゆるは是も亦一奇と云ふべし昔し  
 の諺よも一ツ眼の人種のみ棲める島ありとて其人種を捕へたり見世物あきさんとて日本人  
 も其島に出掛けしよ一ツ眼の人種等の大に怪みて世よは二ツの人もある者か我等見世物  
 よして呉れんと之を捕へて興行したりと云へり如何よも顔色毛髪眼睛の様よの色のの中に

孰れか好しとも惡しとも云ふも多數と少數との相違もあるべし東洋人の中よ一二の西洋人  
 を交めれば甚だ異様見へ又西洋人の中よ一二の東洋人を交めれば變躰よ見ゆるも同様のと  
 なるべきか是れ等の東西の異同は左して是非する所あけれとも唯だ男女よ限らざ日本人の  
 身丈が常よ西洋人よ劣るよ如何よも残念あること候

●問 西洋の婦人の毛髪巻き縮れ居る者多き様よ見ゆ右と自然のものよや

●答 英國を以て申さし婦人の毛髪は決して天然よ甚だしく巻き縮れたる者多しとの見へ  
 ざるなり尤も東洋人に比すれば彼地の人の毛髪は細く緻やかにして多く生へ東洋人の毛髪  
 は同去面積に數少うして太き毛髪生するか故よ彼地の人の毛髪は長くあるふ從て少しく浪  
 の如く糾れ縮れる傾きと之あるとあり右は大体を申すものよて問よて甚だしく巻き縮れた  
 るものもあて西洋人の目よは穩かよ大形よ巻き縮れたるは一種の飾りとして之を賞美する  
 となり其證と希臘羅馬の古蹟よ傳くるものより今日よ至るまでの彫刻の諸像を見るへし男  
 女共よ大佛の如くナリよと小さく渦まきて巻き縮れたるを好むよはあて皆あ大形よ巻  
 き縮れたるを好むとあり英國の女子も通例年若き人は日本の束髪束髪の形の如く其前髪を切  
 下る者あるが額際を飾らんとて是の切り下げたる前髪を大形よ巻き縮らしめてフサよと



盡くし置くあり左れと天然の儘にて通例斯く巻き縮れ居る者なきか故に能く之を巻き縮ましむるは盡力するところあり之を爲すに二様の仕方あり其一は鐵の箸の缺の如き張り居る物を火めて炙り此温鐵を以て好む程は毛髪をクルクルと巻き縮め暫くする後毛は其儘は縮め居るとなり是れ最も簡易なる法にて髪屋の店頭は必ず此道具を賣り居るとを以て其用ひの廣さを知るべし去りながら温鐵を用ふれば毛を傷むるとして他の一種の仕方を用ふる店あり亦以て東西共婦人之其毛髪を大切にするを知るは足るべし他の仕方と同一種の紙を用ふるるとして此紙に毛を添へもちて一と撮つ、糾をかけ數時間縛り置くとあり然る後之を解き紙を捨去れと髪を其儘縮れ居るとあり中等以上の婦人は多く之を用ふる由は候左りながら右同様共一度巻き縮むれこととて五日も十日も永く保つべきは非らず大低と隔日或は二三日其髪質の剛柔次第にて各適宜之をあすとあり左れは天然の儘にて格好能く縮れ居るものと先つ少き方と云て可あるとみ候

●問 公園の有様は如何に候や倫敦には公園の數甚た多き由承候が如何

●答 御尋の如く倫敦に到着の始めは至る所として公園を見ざるべき様覺へ甚た珍らしく感ずる事候彼の名高き「ハイダーパーク」を首めとし「クリンパーパーク」「シントセーム

スパトック」「リセントパーク」「フェンスベリーパーク」等「某パーク」「某パーク」と申す者甚多し「パーク」と即ち公園の謂あり其の他「某キヤヴェンツェン」等、廣小路、隙地杯の名を以て一二丁乃至四五丁四方を圍ひ其中樹木を懸へ腰掛を排べ一寸八の休息所とある様ありある者亦た極て夥しく候「ハイダーパーク」は「南ケンシントン苑」と相續き唯た間ふ一つの湖水あるのみとして別な仕切もなれ事ありは名に二ツありたれども實に一同様あり故に是れ周圍幾里と申す程廣く候廣さにて其次は位する「リセントパーク」にては外邊を一ト廻りせば凡そ二里許之れあり日本より参りたる目も如何にして之故郷自慢の心持勝ちて容易に彼地の山川の優處の見むぬがちあると自分乍可笑しき程の事多し現は先般歸朝の時までテムズ河にせまライン河にせよ處よりて廣狭はあれと概たる所我が隅田川淀川位の者ありと固く信し我れも思へば人よも語り居しか歸朝の上始て兩國橋を渡りし時と實に其狭きと案外しモソツトと廣さ等ありしかと自から感ふたる計ありし是れ一つに彼地の家屋橋梁杯の都へて大形あるが故物同士の比較より廣さ河も割合は狭く見ゆる事あるへさか又た一ツと心底は日本貴しと思込居るが其原因あるべし左れ之余於て「ハイダーパーク」に往きし時生憎深き日あて十分眼光の透かぬとも透かぬありしが

是日此谷の練兵場を二つ合せたる位めあらんと云て同伴せる日本人に絶倒されたることあり尤も斯る類の負けぬ氣の何國の人も有り内と見へ倫敦の寓處みて一日夕飯の時主婦が此間巴里より歸りしと云ふ英人に向ひ「如何です巴里は賑綺麗も有り廣くもあるでせう」と話しかけたるは彼の英人は澄ましたる顔色みて「左様、丁度、リセントパーク位あるでせう」と挨拶したるは同じ卓子に坐り居たる余等と殆ど噴飯さんとしたりし是れ英人が常は倫敦の大あると誇り巴里を華美あれどを小なりと申し居る平生の口癖も過ぎざれば共亦た以て「リセントパーク」の廣さを併せ知る可く候

倫敦めて市區内と稱ゆる中央の町筋めては往來せる人と皆を躰を斜めし頃は足より二三寸先きよ行き居るが如き姿めて早く云は、趨り走り居ると申すも可あらん其中の茫然とイみて店の品物を眺め居る者又左も要事無氣フヤくと致し居る者等も無論少からぬ事あるが兎も角に車輪の響馬蹄の音人足の窅然たる相混して絶ゆる間もあく喧しき中なれと實は要事もあくして是の間を彷徨てはかられぬあり故も身も定れる仕事あさ人、仕事の閑を得たる人、又の子供、子供の守る者等の爲は何う往來の繁からぬ少し油断すれば直ちよ人ふ衝當る杯の心配あさ逍遙處、休息所、の必ず欲しき者あす右の「パーク」「ソルカ

「ス」ギツンデシニ」等とこのためよ出來たる者なり又た常に塵埃のためよ撲たる、眼の時々緑色のものを見て其疲を展ふる所あければ叶のぬが理窟よもあり人情よもあれと折々公園あり隙地ありよ往きて眸を放ち樹木の鬱蒼たるを眺むる事と眼の方より云ふも自然必要あり左れば公園類の設けば町筋と極て騒々しく緑色のもの逆は幾と希れある倫敦の如き所よて益々其必要あるものなり日本よあては上野よ往くも増上寺よ往くも幾分快く感する事は感する乍ら左程打て變りて快よしと迄の思とす之を倫敦めて偶々公園よ這入りたる時の心持よ此すれば甚たしき相違あるを覺ふあり公園よと貴賤男女打混して這入るか故彼の邊よは輕車肥馬よ駕して道路を驅り居る者有る此の邊にて手空きの日雇男が樹下よ臥して晝寝せるもあり或の小舟よ乗り一手づつり櫂を鼓乍ら湖水よ泛べる年若き男もあれん或と球を投げ合て遊を走しる子供あり其趣色よ様々あり例のシーズン「期節」と稱し夫々の身分よ應し各種の交際交遊の會を催して相往來し歡娛む一年中一番陽氣の期節なる春夏の頃も「ハイドパーク」の馬車道は午後四時比より身分元の高き婦人の馬車よて打續くなり各自思ひくお着飾りて茲に來たりて園内を馳回りて遊ぶとあり尤も園内よの抱への馬外車の辻馬車の入ることを許さすとの制なれと荷めふる公園の内を驅居りける者なれば男女

を問へず相應の身分なることを知るへし故は倫敦の社會にありては先づ公園の内を馬車に乗  
乗廻はす以上に達らねば餘り面白からぬものと存せられ候

●問 乗物の重もは汽車馬車の二種なる趣と承知致居候日本にて一寸人力車にて出掛ると  
申す場合は如何なる振合お致候や

●答 御承知の如く倫敦にては市中の汽車の仕組善く行届き大抵の處は是にて便宜相足る  
あり先づ地上を走る尋常の仕組の鐵道と又た其及こざる所を補なふための地下鐵道との二  
ツあり是等の鐵道と固より市中の往來のため出來たるものなれ概ね毎十丁内外の處に  
スタンションありて上り下り自在あり尤も是の市中鐵道の粘て出來掛けたるは今より幾か  
四十年許前の事にて夫より次第は支分れ長延び遂は目下の如く盛なるものとなりし者  
の由殊は地下鐵道の方之別して新らしく其預圖の計畫丈の線路を布き了りたるは只た昨春  
頃の話なり市中鐵道の粘て出來掛りし時の乗客も尙だ不馴れの事なれば善く間違失錯多か  
りし趣にて余等の知れる或る老婦人の物語は是の老婦人が花嫁の頃が恰も市中鐵道の出來  
初めなりしが或る時夕飯會を催さんとて前以て友達お案内状杯出し置き扱て其日の午後  
至り一寸膳後の菓物を整へ來らんとて新夫婦打つれて菓物市まで出掛けたり往復共汽車の

事おれば手間の取らじとの積にて左して時の餘裕も見計らひ立いでしが如何にしけん返  
り線路を乗りちうへ途方もなき向お走せ去りたり心付て其邊のスタンションお下り又た  
後戻りして更は乗替る杯家お歸りし時は既お二時間もおく座敷は這入りければ客人は皆  
面を並べて只た欠びせぬ計の時なりしと、今日の仕組萬端十分整頓して便宜此上なく且  
車室も上中下の別ありて左して身分賤しき者共と同坐せねばあらぬ氣遣もあけれ共大抵の  
人迄多く之に乗るなり彼が「銀行休業日」杯と申す祝ひ日よは下等社會の者共が公園等よ  
遊びに往きたる復りがけは落ちつとふ時杯は多勢の群衆の事おれば下等中等共は彌が上お  
押詰まり其溢れたる者共が發車のマギワは突然ドカ／＼と上等室お推込來るとあり鐵道役  
人の制統も届かばこそ其儘スタンション一二個處をば通り過し事も多し故は斯る類の日よ  
少しも分を構ふものの中人よても先づ用心して乗らぬあり兎も角よ上下推なべて多く乗  
る市中汽車なるへく存せられ候此より上よ參れは辻馬車此より下よ參れば鐵道馬車乗合  
馬車と存候是等の諸馬車の振合と更たためて詳細を相述申すへく候

●問 當節西洋諸國の男女の髪の流れの如何は候や

●答 中以下一般の風を申せは先づ五分刈七分刈位の所お候右に英國のみならず日印曼亞

米利加杯も通で掛り見たる所よては同様相見へ候唯佛國よては左様甚たしく短く  
あらざりし様相見へ候洋人之其頭顱大あるが故み斯く短く頭髪を剃るも甚た格好よけれ  
とて後頭の小なる人種の東洋人う之は倣ふて短く剃る時其頭誠小小さく見へ甚た不格好  
のと多く候

又頭髪を巻き縮ましむるは獨り婦人のみならず男子よても佛國杯は隨分之を致すもの  
多し故に巴里杯よて大抵の髪床お至り之を注文すれば必らず丁寧は巻き縮まし呉る、とあ  
り物は試めしおければとて余等も一兩度試したることありしが如何よと善く巻き縮まりて  
出来るなり唯た茲は必要の用心は髪を洗さる一事あり若し巻き縮ませて歸りたる後迂濶  
と水にて洗ふと杯ある時は直ち故の如く眞直ありて仕舞ふ若し之を試みんと欲する人  
の之を洗とされは兩三日間保つあり英國の髪床よても相應の家ならんは之を注文すれ  
ば直ちお需めし應して巻き縮ませ呉る、れども大抵は其手際甚た悪しき様と思れたり右  
之實驗の説よて間違之おささとも候

●問 男子の口髭の工合と如何様あるもの多く之あり候や

●答 是も英國と佛國にて少しの違ひ之あり當時佛國よて年若き人の中おは鼻下の髭を

左右「八」の字よ分け又下唇の際よりぱつりと「▽」形は殘して其狀恰も「八」の字の下に一  
點を加へたるが如くし他の鬚總髭の髭を剃り居る者多し右に定めて同國が本家なるとなる  
べし英國よては此風餘り行これ唯た時として之をなし居る者を見るときは總選舉其他有  
名の人の集會演説等よ至り見れば然るべき身元の人には斯の如き風を爲し居る者は幾んど  
之おささや又中以下の輩の群集する繁華の場所よて注意するも此風の人と甚たしく候英國  
よて年若き人と通例鼻の下を「八」字髭とするのみみて頰の毛は剃りたるを通例とす老  
人は至れば頰の毛をも併せて穩おしく一跡に延し「八」字髭のみおささ、る人通例あり去  
り乍ら是も佛國よ至れり相違ありて老人の中よも「八」字髭のその人多く候

又佛國よては一種の髪付を用ひて髭と行儀よく堅の髭先をばぴんと反ね居らまむる者も  
鮮ならず英國の髪床よても時として余等の髭、髪付を付けんを欲せし者あり左れ之英  
國よても之を用ふる者もあると見へたり唯全髭の處英國の髭の形「八」字髭よても稍や  
穩おしき方と云ふべく候

又英國にては男女共に顔に刀剃を當てさると見へたり（但し男子の「八」字髭のある者類  
髭を剃るの之格別其の以上の部分をは少しも剃らざると見ゆ）故に近寄て顔を眺めれば

濃かある生毛様のもの一面生へたり男子は格別あれども女子杯は少し不相應しからぬ  
様に思はる去り乍ら彼地代者之此を以て一種の飾りとあし居るやも知れ唯困却するの余  
等の如き東洋人は願より頬へかけ黒き毛所々生へ顔際眉毛の間より見苦しき生毛の長ゆ  
ることあるが英、佛、孰れの髪床より赴くも之を剃り呉れたるとあし又他の日本人杯も同様と  
見へ出會ふて其頭を眺むれば生毛の蒙茸と長へ居るが通例ふて時として話し合ひ笑ふと  
も度々候

斯く生毛を飾り居ると想へば甚だ異様しく聞ゆれども何とも云へぬ譯なり其仔細は兩三年  
前佛國ぐりの流行よて英國の婦人杯も髪を上に乗ねて結び上ると流行し居りしと同じ髪を  
束ね上るとあれば襟際より顔際へ掛けてはつれ毛おくれ毛おき迄お掻き上げて之を束ねる  
方サツパリとまて東洋人の目よと躰よく見ゆるとあるお彼地の人は故さらし襟及び耳の邊  
の毛を一線通り束ね残り顔及首筋と頭との界よと短かさばうつとしたるはつれ毛おくれ毛  
を澤山置て縁を取るとあり是て一切の毛を悉皆束ね上る時と坊主襟の如く髪と他の肉面と  
の間餘り見盛ちた故お斯く態々短かく毛を切りて顔及首筋と髪との界よ短かくふやりとし  
たる毛を置き縁を取らしむるとあり是等の日本杯よてて決まて飾りよと思はざるべく却て

見若し躰なるが彼地よてて則ち飾りよとあるの趣あり是も亦我風俗を以て彼の風俗を是非  
し難き一事あり兎も角よも顔の上部の生毛よば一切其儘にして少しも剃らざ毛深き人お  
至りてて双の眉相連なりて幾と弦おき弓幹を仰け横たへたるが如くよ相成居る杯の實よ不  
思議お候

● 問 鐵道馬車乗合馬車の趣て如何よ候や

● 答 鐵道馬車之現よ我邦よ行これ居るものと其振合左して異ありたる所も之おく候佛國  
おてて車中の腰掛一人宛よ仕切ありて定りたる人員の外は腰掛る事相成らざるものもあれ  
ども英國の方て通例一人宛の仕切おき故乗客の多き時て随分盛ばと合て詰込まる、事お少  
からず亦た英國おては乗車の切符を呉る、とき例の小さき圓さを穴斷り抜く鉄よ仕掛あり  
て一ツ斷る毎よザーンと云ふ音するおかりかねて鐵道馬車會社の規則として乗客の此のチー  
ンの音を聽きたる上おらでは其切符を受取り吳間敷との事あり則ち車掌が一枚の切符を再  
用する弊を防きたる一法と見お斯くして斷り抜きたる穴の部分よ當る小さき圓さ切符の紙  
片とボシリと抜けたる儘鉄の中は殘る様仕掛あり跡よて此の紙片をさへ勘定すれ切符幾  
枚を賣りたりとの事は明白お相分る仕組あり是も亦た切符の賣高を偽るるとの得おらぬ様

よしたる者なるへし乗合馬車の鐵道馬車より幾分か品格を遜づるやの氣味はあれど我邦よ  
て二者の間を巡庭ある程はあらぬ様あり（我邦よて圓太郎馬車と稱する種類の彼地よな  
きは無論に候）乗合馬車の第一は我邦に異なるは皆な天井の止よ又一層の腰掛ありて此よ  
も客を乗する事なり明治七八年の頃と覺ゆ銀座より淺草の間を往來する二階馬車あるもの  
ありしが其動もすれば怪我失錯の多きよより出來る間もあく差止められし事ありき即ち此  
の二階馬車こそ西洋諸國よて多く見受る乗合馬車の典型を摸たる者なりしあらめ乗合馬車  
は皆夫々白、青、黄、赤、茶、褐等の色分けありて白の車と何處の間を往復する者青の車と何處  
の向よ去來する者等線路よ從て色を殊よせり左れば乗客と近寄りて何處へ行くとの標札を  
看るよ先さだちて先づ其色を遠見して大体を識別る便宜あり又其賃錢の受取方の様々よて  
鐵道馬車の如く何處行との區域を誌したる切符を渡すもあれど此の切符も鐵道の分の如く  
堅紙質のものよはあらずして薄きペロくしたる一葉紙なり缺よて穴を斷り抜く造作もあ  
りけれの只た幾千枚となく長く續けるを巻物の様に卷きある内より一枚分宛裂き取りて賃錢  
引替よ渡す丈なり又其中よの切符をば一切渡さぬ仕組の車をあり此の仕組よれば客が乗  
込よとさ何處迄との行先を話せの車掌の其區域に從ひ二錢分一人とか四錢分一人とか覽書

の紙よ記し置き其客の下りる時定めの賃錢を受取るあり此の仕組と賃錢の受取り渡しお證  
據物あり故其手違を避るため乗客よ必也下車の時あらては賃錢を拂呉れ間敷との會社の口  
上が車中に掲げあり又た車よよりては只た繁華の場所若干の間のみを往來せるものあり是  
れは一寸乗るも端から端よ行くも都て賃錢の一片あり左れ此の車よは別よ賃錢受取方の  
人を置かす只た車中の一方よ一個の錢箱を備付け箱の上よ小き穴を穿けあり客よ乗込  
ぬる時之よ一片宛抛り込ひ事をり左すれ此箱の一方の御者よ面せる邊はガラス張となり  
居るか故御者の目よて今ま幾人乗込たり幾片抛り込たよとの事相分る仕掛よ候  
鐵道馬車乗合馬車ともは物体の大きき我邦の分よ比すれと過うよ大きき亦其綺麗ある事も  
過お綺麗よ候左れと馬車よ就て一番目立つと其馬の異常よ魁偉ある事よ候亞刺比馬と申す  
分は大ききあるの大ききある乍ら品よく優形ある方よて銘々乗の馬車を駕す時の飾り馬にこそ多  
く之を用れとも鐵道馬車乗合馬車又は荷車等よ使ふと又た別よ一種の大馬ある事よ候丈の  
高さ事は例の亞刺比馬よ過るとも及ばさるとあかるべし其脊の一番抵き所よても通例余等  
の腦蓋と相齊しく蹄杯と宛然益を覆せたるか如し左れと其力も從て強健くして我邦の馬車  
を倍にせる重量のあるべく想はる、と只た二匹立よて牽き居れや且つ同しく牽く乍らと我

邦の馬の如く動みすれば蹠跟しつ、首低れもて喘きあがり行くに違ひ馬の勇さたるを形容せる彼の「躍る」とか「怒る」とか云へる語も適し昂然としてトノノと行く様あり概したる所日本馬の西洋よて稱する駒位の大ききしりなき様想のる、なり西洋の諺に「其國の貧富を知らんと欲せし先づ其馬の肥瘠を見よ」と云ふとあり西洋人杯が日本よ來りて始て日本馬を見れば果て如何の感興すべし乎残念ある次第あり去乍ら是は種(たね)の選ひ方蓄養法一つよとるものにて歐洲の馬よて昔より斯く魁偉強健ものありしが中世の頃武邊盛(ぶへん)に行はれて戦争とか決闘とくさる云へは武士の皆を自身めて歩行のならぬ程の重き(おも)甲冑(かぶと)を着用し之(これ)に應じたる重き械仗(きやく)を提げて馬(うま)に跨がるにあらば尋常の(じんじょう)の馬(うま)と求むるより種(たね)も選(えら)べられて物の用(もち)よ爲(な)りて一世の人悉く魁偉ある馬を強健(きやうけん)き馬と求むるより種(たね)も選(えら)べられて蓄養法も工夫し此時より歐洲の馬世界一紀元を成して進化の道を開きある由に聞及候左れと日本の馬よて現時の小弱なるを唯だ嘆息して己むべきものよと之れなくと存候

●問 日本(にっぽん)の寄席(よせ)の類(るい)之(これ)なく候や

●答 英國(えいこく)よて音樂場(おんがくじやう)「ミュージック・ホール」と申すが日本(にっぽん)の寄席(よせ)善(よ)く似(に)あるものと存せられ候音樂場は大なるものあり小なるものあり極めて華麗(わづら)なるものあり又左程(ひだりほど)よ参(まゐ)らぬものありて

一様よて行のされとも其演(はな)する所(ところ)之(これ)躍(おど)り所作(しやく)事(こと)歌(うた)茶番(ちやばん)手品(てひん)輕業(けいごう)等(らう)よて何(なに)を一色(いっしき)よ演(はな)するといふ事(こと)をも先(ま)づ種(たね)々の藝(げい)を入(い)り代(か)り立(た)ち代(か)りて一(ひと)切(き)り宛(あ)務(む)める事(こと)候(まは)り又(また)遊(あそ)び人を常(じょう)よ次(つぎ)きくよ廻(まわ)りて務(む)むるものと見(み)へ甲(が)の寄席(よせ)にて曾(まづ)て見た(みた)まじ遊(あそ)び人を復(かへ)た乙(お)の寄席(よせ)にて見る杯(こ)の事(こと)屢(しばしば)々(々)候(まは)り

●問 落(おち)し話(はなし)と申(まを)す類(るい)も出(で)て候(まは)りや

●答 純粹(じゆんじゆ)の日本(にっぽん)の落(おち)し話(はなし)の如(ごと)きものは之(これ)なき様(よう)候(まは)り其(その)時(とき)々(々)妙(たぎ)術(じゆつ)演(はな)説(せつ)をなすものも現(あら)われ出(で)候(まは)り是(こゝ)の滑稽(こわ)演(はな)説(せつ)者(しや)と顔(かほ)をば黒(くろ)黒(くろ)塗(ぬ)り其他(か)の様(よう)子(こ)も都(みな)べて黒(くろ)人(にん)に擬(に)ねて打(う)ち掛(か)かるが多(おほ)く候(まは)り

●問 手品(てひん)輕業(けいごう)等(らう)と別(わか)れ異(ちが)はりし所(ところ)も之(これ)なく候(まは)りや

●答 先(ま)づ似(に)たり寄(よ)たりと申(まを)さるものよと候(まは)りとも手(て)際(ぎわ)の鮮(あざ)やかあるとは彼(かの)地(ち)の方(かた)違(ちが)ひ打ち優(まさ)りたるやと覺(おぼ)ふ誠(まこと)みに其(その)一(ひと)例(れい)を申(まを)せり一寸(いちゆん)したる演(はな)説(せつ)も手品(てひん)遣(はな)つて右(みぎ)の手(て)よ一(ひと)尺(しゃく)立方(りつぱう)位(い)の小(こ)鳥(とり)の籠(かご)を提(た)げてシヅらめと舞臺(まいたい)の前(まへ)よ出(で)て一(ひと)通(と)りの口(くち)上(じやう)を述(のたま)へて又(また)舞臺(まいたい)より下(した)で見(み)物(もの)の央(なかつ)邊(へ)進(ま)りて己(おの)れの身(み)體(たい)をあらため籠(かご)を調(た)ぶる事(こと)杯(こ)ありたる末(すえ)彼(かの)小(こ)鳥(とり)籠(かご)を左(ひだり)の手(て)よ載(の)せ右(みぎ)の手(て)よ籠(かご)の上(うへ)を提(た)げたる儘(まま)見(み)物(もの)のマツタツ中(ちゆう)お屹(き)立(た)して忽(たち)ちヤツト叫(こゑ)ぶと

思へて如何よしけん彼の籠て今まで上下飛翔居たる小鳥を籠めたるま、雲とものつかせ煙と  
 をつうそ何處か遊さしの影だも留めせ是時手品遣の前後左右を悉く見物よしして頭上は照れ  
 るは赫灼たる電氣燈瓦斯燈のみ又た今ま一例を申さハ舞臺の中央は一枚の新聞紙を展べ布  
 さ其上は一脚の椅子を置き此の椅子は年頃十六七歳の娘を腰掛けさせ娘の頭より紫緞子の  
 大袂を蒙ふせて全身覆ふべくまなく蔽ひ了りて斯くの如く蔽ひ了りたるどころか一す口  
 上を述べ彼の椅子のそばは近かつく是時紫の袂の娘の全身を其形ま、一單に居れば娘が少  
 し小ゆるぎするまで所の波だつ工合めて明白に分かる斯くて手品遣は其傍に近づきて其左  
 肩の袂は立ち姑く呼吸を計りて彼の娘の頭より手をうけつや、ツト叫ぶや電光石火、袂も娘  
 も消へ亡せて残るハ例の新聞紙を踏みて不ぬる一脚の椅子のみあて是等は眞に有りふれた  
 る手品めて奇にもあらねと妙に思ふけれど同じ事あかづ之を日本の繩拔杯に比すれば品よ  
 く手綺麗お覺ゆる事候尤も其中はと鳩杯の小鳥を使ふて車を曳かせ字を讀ます等日本の  
 山雀使ひと其拙を同ふるもあれと兎も角は器械仕掛の巧みある丈て手品は色々の巧も出  
 來ると存せられ候又た輕業も其身体のユナシ熟練は日本を左して甲乙もあらぬや相見  
 へ候共其道具立ての宜さため自然見優りする心地あるを免れず尤も身体の圓さよ就て申す

も日本の輕業師は何となく自分も不安心氣なる面色危ぶみ苦勞する氣ある態度をみすと多  
 く見物をして驚めすれと一種の快からぬ感を作さしむると少からざるは彼地の輕業師は常  
 顔を怡らけ坦然として左も平氣そうある風をなし居ると大に看よき心地致候

● 問 辻馬車の趣の如何候や

● 答 英國辻馬車の立派あるて初游の余等も之甚た目も留りて愛へたる事候辻馬車ふと  
 二様あり一と四輪附の者よて我邦の勅任官杯の多く用る箱馬車と同様なり前後相對すれば  
 四人と坐わると出來る様あり居るもあれば又た通例の正面は一人か又て二人双坐と申すを  
 常とし二人以上とあるとき其以上の人が馬と背合せせ坐わるべき方の腰掛に常には上も  
 疊のけてあり入用の時あらでハ其柵を仰ろさ、る様せるもあり第二と二輪附の者にてハン  
 ツムと稱する一種異体の形なり是には御者の座が尋常の馬車の如く前面駕馬の後邊よとあ  
 らせして人の乘坐する箱の背邊あり箱の背邊の上部は瘤に似たる小さき四角ある枠つき  
 居り御者も茲も車の天井と已れの膺と平行せるくらゐの位置をめて腰掛居るあり左れハ手  
 綱ハ馬の轡より御客の手よて恰も乗居の頭上を越して通じ居れり箱の入口も尋常の如く横  
 側よりつき居らせして前面は開き戸あり其開き戸ハ乗客の膝頭より少し高さ位の半扉よて



乗客の乳以上の開けのちまなり故に座のり乍らよして前面を見らんと出来るあり尤も四輪はの方ありとて前面に當る處の上部をガラス窓のみなるが故必しも眸を放つとのあらぬよのあらぬとも一段高くありたる御者の座杯の蔭ありて随分鬱陶しと云へり鬱陶し故に此點丈を申さばハンソムの方大に騎目の快ありとすべし要するよハンソム形の一吋輕便あからみ零式に属する方にて辻待の分の外、抱への馬車杯よ見受けるとなき様なり元來此の形と昔し英國のハンソムと云へる男創めて之を工夫し出したるより即ち其人名を冒せて斯くの呼ぶ位にて英國が本家あり左れと倫敦にて尤も多く此の形を見る事候

巴里と流石に華奢都だけありて辻馬車までも夏冬よよりて其差あり冬分は箱馬車を用る處を夏時よこ重もよ母衣馬車に易ゆるあり母衣馬車と御承知の如く後邊より母衣立ちかゝり居り前半と打開き其状恰も扉がさ籠の如きあり之は年若き婦人杯流行を競ひし盛衰をこらしして端坐し彼のシヤンゼリーセの廣き大通りを馳騁すさまは一段の觀物あり巴里にては公園の規則倫敦と異がひ辻馬車をも勝手よ其内よ乗入る、と出来るが故空暖かき氣節とあれ之夕方よりと抱馬車辻馬車相混して老少男女を打載せつ、彼のアドブローヤの公園に趨ひくものシンゼリーらの大通りより絡繰きて引も絶らき有名なる凱旋門と恰も此の道筋

の欄に當りて巍かく立ち居るが故 試に凱旋門上よ攀登りて（門の高さは直立一百五十二英尺零は我う三十間許りあり）屹と向を見わたせと幾百とあり許多の馬車は相駢びて五行とあり各行又た首尾相接して陸續と公園の入口を指して進み行く有様と恰も糖塊を鼻さして聚まて來る蟻の群を視るか如きあり他處よて之餘り看難き景色と存候

伯林にて一寸異様よ覺へたるは母衣馬車に上下のニマ通りありて下の方の物體よ武骨よて綺麗あらせ又た其品位を分つた是よや前面の窓ガラス（前後の母衣を合せたるるとき窓とあり疊みたるるときと御者と客座との界板となる）上等の方は色無し下等の方色付とあり居りし事候

日耳曼旅行中フロンツァーホート（南部日耳曼中第一繁昌の商賣地）の近在にて牛よ荷車を牽かせる者を段と見受けたり其牛の使ひ方と日本の如く鼻孔よ「ハナグリ」を貫せる所の法よと異あてて單あ双角の根を約ばり其綱を執りて操縦をなすあり大抵の二頭立ちあせるが多かりしが一本の棒を横たへて之よ二頭の角の根を結び付け以て按控の事をなせり又た此の邊の田舎よ這入りしよ或る處にて犬に車を牽かせるを見受たり是と往々ある事の由よて後ち伯林の町中にて幾度か之を見撃たり犬の事あれと固より大ききある車を得牽く等も

あし只た小さき車は小き物を載せて牽き行く其傍らには必は又た一人附添ふて行くあり日本にて云く、丁稚小僧が袱包を之に牽せて用達しよ出掛ると申す位の處なり何分馬を勿論牛よせよ犬よせよ身軀魁偉して強健く能く色々の働さよ堪へるとの出来るを羨むべき事と存候

●問 御話しに音樂場の建物の如何に候や

●答 早く云ひ、劇場を小さく致したるが如く仍復正面は舞臺ありて其の兩端より半月形は輪づくりて見物の席あり劇場と異ひ候の劇場の如くは棧敷幾段もく重なり居らす尤も其場の大小よりて色々不同もある事ながら先づ棧敷二三層しかあさか通例は候劇場の壯麗あるを申すまでもなき事あれ共是の寄席なる音樂場よりも少し場處柄に至れど其華奢なる事初遊の者の目を聳かそとなり一寸致しゆる事ながら場中は廊下を致せ階級を致せ一切厚きフックしゆる敷物を布きありて如何は下品ある靴を穿きて這入る者も決して歩行くにつれてキウ〜ギシ〜と音の發する心配を物事不案内なる時の妙なる間違も起り勝ちあるものにて明治の初年洋服の流行はじめ頃には如何に誤りけん靴を歩行くにつれて音の發するを善しと致し鳴草杯と稱し鯨と一種の革を底に嵌めて造る音を發さんと勉め

あるものあり現時は固より斯る事なけれと誠は顛倒したる話にて彼地の作法にては靴の音の致すの甚だ好まぬ所あり佛人の物語と覺ふ一言で日本は遊びしは最初本船をりハシタよ移りて陸に近づきたる時日本ある國を始て目撃る、共第一は奇異不思議な感したるに岸上を往來致し居る男女が都べて歩行くにつれ其の脚底にて一種の音樂を奏しながら徘徊せる一事ありき」との話あり成程靴にてさへ其音が發つて上品の禮とせざる風俗の中より來りて彼の立派なる婦人土君子の遠慮もあく駒下駄足駄の類をカラ〜コロ〜と曳き鳴かし往來するを見あて驚きたるも無理ありぬ事と存候

音樂場の類何れの國よも之れあるとあれとも右に重みに英國を申したるものあり又倫敦水族館(アクワリヤム)と云ひ聞こへたる人寄せ場あり是を元と人面の通り水族を養ひ貯へて公衆を觀する所ありて水族館と稱するに他の博物館、展書、等の諸館同様各國の都會にも固より多く之れある事あるが倫敦の分を獨り其趣を異にし其建物も至て廣大あれど其振台も宛然別にて肝腎の水族を唯た斯の廣大ある建物の内邊の一方の壁際を一通り陳べあるのよもて其の中央を豁然と打開きたる大廣庭あり其正面の中央は一舞臺を構へて仍復音樂場同様種々の藝を演し居れり是の藝を水族館の附物としありて別段は棧敷を取らぬあり

らざるより外立ち見の人々の勝手あり其他時、隨ひ是の庭内を借りて色々様々の觀世物を興行するものあり恰も舊の淺草奥山と云へる趣、似たり之ふ加ふる種々の賣物店、茶店、酒店、料理店、其中に羅列し夜分の賑かさと言ふん方、あし水族館、毎夜點す瓦斯の火口無慮一十萬筋と云へり左もあるべし館内は一而、燈籠の如く燈やさわたれり然れども是の水族館、之如く人寄せ場とあや居る、從て身元宜しからの職業の婦人、杯も多く此ふ入込み立交り居るが故、少しく体面を構ふ士君子ありて、水族館、繁く出入する杯との事は餘り申すを盡すべし方、候

○問 音楽場、限らず都へて劇場等、て演ずる舞、所作、事の物の如何なる模様、候や

○答 凡べて躍の手振、一寸見物、たたる所にて、簡易にて變化の少き者や、存候日本の流義より云は、躍の手、唱歌の趣味を代表するもの、あて眠ると申す歌意の時、眩を曲げ、數へると申す歌意の時、指を僕あふる杯、都て歌意、應じて一切の態度を定むとある、西洋の躍は、更ふ斯様あるとなし、兩三年前日本、遊ひて、躍る好遇を受けたりと云ふ、英國人某が著こせる紀行、種々日本の風俗を嘲り記せる中、新富座、て、實の芝居を見居し、彼の古市の躍の處、至り其の躍の手の異様、て變化なき旨を説き居たれど、日本人の目に、西洋の躍は、隨分異様、

て變化なく見ゆるなり、左れと斯る議論、之置き、西洋の躍の日本と異あると、躍の地と稱すへき、歌を唱ふとあさ、と從て其手、意味を代表するとあさと、是れあり、先づ一寸尋常の振台を、舞て茲、云て、多勢の躍子が五人十人乃至二十人、三十人宛、各々對の衣裳を着け、幾組とむく、(組數人數の多少、と其掛りの大小、よりて勿論、其差あり) 次ぎ、く、現れ出で、一ト組、宛手を揃へて、躍、後、よ、二組、三組と、諸組、打混して、躍る、其間、く、を計りて、他の躍子、共を、周邊、片寄せ、首魁、とも云ふへき、一人が例の、腰袋の如き、輕羅の、裳、を着け、獨り舞臺の中央に出で、躍る、是の一人、躍と組、躍と、か入れ違ひ、く、躍、た、る、末舞臺、總躍、とな、て、終る、なり、扱て、其、躍の手、と、單、手、を、廻り、し、腰、を、捻、ねり、足、を、振り、て、走り、回、る、よ、過、さ、す、して、何の、意味、も、あ、し、唯、た、其、賞、玩、す、へ、き、點、と、身、體、輕、捷、にて、手足、活、潑、毫、も、重、む、た、氣、ある、所、あ、く、一人、躍、りの、巧、なる、に、至、て、之、身、體、飄、忽、として、空、を、歩、そ、る、か、と、想、は、る、計、り、あり、組、の、躍、方、は、別、ま、て、簡、易、て、唯、も、其、多、勢、が、齊、しく、揃、ひ、の、手、よ、て、躍、る、と、申、す、所、よ、文章、の、存、する、と、なり、凡、そ、何、でも、なき、手、振、にて、多、勢、齊、しく、揃、ふ、て、之、を、演、ず、る、と、き、は、其、間、よ、自然、の、風、致、を、生、ず、る、と、人類、眼、世界、天然、の、規則、に、候、又、今、一、つ、の、異、所、を、申、さ、し、日本、の、躍、之、被、の、多、錢、舞、買、長、袖、善、舞、の、諺、の、如、く、衣裳、の、ヒ、ラ、く、ッ、ロ、く、した、る、あ、因、て、其、態度、を、取、れ、とも、西洋、の方、て、衣裳、と、其、彩色、を、な、は、の、み、よ、て、態度、の、重

も、其の四肢のユナシに因て其趣を取る様あり左れて西洋の羅子は手と手、足は足と其趣を露し衣裳を重る用いて緩衝潤袖と着けぬ事候

問 西洋の家屋の有様如何

答 家屋の建築法と實に種々の制あるか上其國々因て又種々の區別あり去り乍先つ其物質だけは何處も同様にて第一は石室あり第二は煉瓦室なり然る處石のみを以て築きたる家屋ハナカク稀なるものにて先づ古代より傳はれる城壁の或は有名なる王公貴人の舊來よりの住居か杯の外は通例の家々と思ひも奇くぬと云ふ是は其物質の堅牢あることを無論貴ぶと云ふが實に其入用堪へる事人造の煉瓦にて積み上げる方其費輕さか故あり左れて純粹の石のまゝにて建てたる家は寺院や城廓か古代の遺物ある公共の建築物か此外に之見へさるとあり尤も英、佛、曼等の重なる場處へ登へ立てる建物の中は總て石を以て積みたるか如きものあれども多くの唯其前面のみを化粧したる迄にて左右後面及び家の中心迄悉く石を用ひぬるは決して之なし先づ通例の皆を煉瓦にて積み上げ所は石を以て化粧となすは過ぎすと云て可あり又煉瓦も二様あり其形ちと総て日本の煉瓦と大同小異乍ら銀座杯は用ひたる如き赤色のものあり又黄なる土色を以し居るものあり此二種の

内一方は火に強く一方は水に強しとのを聞きしが左様ある區別あると云ふは其趣の黄也ある方の赤き方より全躰堅き様を見受けたり此等の煉瓦を用ひて其間をセメントを塗り詰め家屋を組み立るとなるが田舎の村落の家々の中より家根組み及び二階の椽桁杯は都て木を用ひ居たるもの多し然れども都府にて重なる商店の家杯を建築するを立寄て見ると椽桁杯の皆を鐵を用ひ太抵の木を用ふる場所ハ鐵にて之を辨し居れり又亞米利加にては相應ある場所の普請を立寄て見たりしは是も椽桁其他は成るべく皆を鐵を用ひて木を用ふるもの少かり然れば歐洲の家屋の後來の運命ハ土、石、鐵三者より成立ち木材と僅うよ之を助けるだけのものと成行くあるべし

又建築法の論と姑く置き尋常住居家の勝手向の有様を述べん此等も英、佛、曼、伊等國々に因て多少其趣を異し居れり其一例を擧ぐれば巴里、伯林、等にては廣大にして高さ家多し故に家を借る者の其一階を借るとして例せば一階は甲某が住へば二階は乙某の家族が住居し又三階ハ丙某の家族が住居すると云ふの有様も大なる家を横に幾段も切り多数の家族が其一階を軒の家として借り込むとなり又家主も其爲め工夫して建築せると云れば一階を借り受る時と客間、勝手、臺所、書室、等夫々を備はり居るとあり

四七

早く云へば日本風の平家を五箇も六箇も積重ねて其一層を貸家とす。が加し故に此大なる家の隅より頂上は達する。椀子段は恰も裏長家の小路の如く五六軒の家族が共同之を用ふる。と云ふ有様あり。此仕組の専ら巴里、伯林、羅馬杯に行くる、あり。然るに英國之又其体を異にし大なる家を堅く幾戸も仕切りて之を貸すの趣向なり。故に例せし三間間口一軒を借り込む時。其一階二階三階とも渾て甲の一家族に屬し又其合壁の次の三間間口この一家族に屬すると云ふ仕組なり。左れば通例英國の下宿屋杯は一階より三階四階迄皆一の家族に屬し居れり。

右の有様ある。故倫敦の貸家下宿屋に餘り大ならず又高からざるは巴里伯林等の貸家下宿屋に甚だ高く又甚だ大あるとあり。倫敦杯の下宿屋は一階二階三階と人を容る、は巴里、伯林、なれば一ト間二ト間と横は並ひて客を容る、譯なり尤も巴里伯林よても場所は因てハ倫敦の如く横は仕切て住居する様は拵へたる家あり又倫敦とては場所を依てハ幾階にも家を貸す如く拵へたる建築もあり。然れば一様に之申し難けれども先づ重なる風俗は斯様ある相違あると候。

今倫敦の一家は在ての間取を略説すべし尤も上等の生活に至れば家も宏大にして其間取

五七

も多く一様に云へぬとなり。然れハ此等をして蓋して世間普通中等以下の勝手向の間取を述べん。往來の道と天井と齊しき云々、地底の一と間あり又往來と幾んど並ひたる一と間あり又其上は一階あり二階三階ありと云ふを通例とす。諸其家先づ日本よて見る所の西洋家の如く所は四角ある窓ありて其家の入口より三四尺幅の開き戸あるを通例とす。總て西洋の家は煉瓦よて三階四階五階と積み建つるか故に其重み強く餘程土臺を固めされば忽ち壁はヒビの割目を生ずる。故に地盤の堅さを擇み地形を固むると大切あり。左れば餘程深く地盤迄掘り付けて然る後石、土、杯にて敲き固め土臺を拵へるとなり。然るに故に最も低き一と間の前記せる如く幾んど天井と往來の道と相齊しき程あれば此處は光線取りの途をつけされば甚だ闇さ。嫌み見ゆ。此最低の一と間の床より往來の道は向て斜め土を掘り落し堤塘の形ををし町外れの繁華なき場所よて。此處は菓木杯を植へ置くとなり。故に光線の相應は此よ取らる、なり。之をば假り下た間と名づくべし。臺所、物洗場、一寸したる物置、勝手、よ使ふ部屋と則ち此下た間の内よあるなり。又此上の間は則ち往來の道と其床と等しき。然らされて往來の道よ四五段高く昇る程の小高き位は床を据へたるものよて來客杯は往來より一二段石段を上りて此間の入口の戸を敲くとなり。通例表向き



らんと想像する程の事なり

又此石盤瓦も國々由て其形種事の相違あり佛國などの相應なる建築にて一尺ばかりの鱗形お切りたる者を恰も鱗の如く重ね上げて疊みたる屋根もあり又曼國のライン河の上流に沿ふたる都府及びフランクフオー・近傍の田舎に至れば此鱗形の石片の大き僅々三四寸にて而かも其丸さ形は種々の不規則ある者を鱗の如く重ねて屋根をきたたるもの多し又家お因りてハ其屋根のミからミ前面側面の壁をハ一體に此石片にて重ねたる者あり其狀と恰も日本にて板疊を用ふる場所ハ板の換りハ此石片を以て聖地ハ重ねつけたる者なり然れば日本の家などハ此瓦すれば屋根と云ハ家の前面側面と云ハ此石片の重量丈幾許か餘分の重量を擔ひ居るとなりと見ハ斯く石片を以て屋根のみならず四面まで掩むたる事なれば日本おどの如く大ある地震ある日ハ必キ其度毎ハ多少の損處あるとならんと思はる、あア扱て斯々一面ハ石片を以て之を掩ふたるが故ハ速くより眺むれば恰も猶は灰色のセメントを以て書きたるが如く見ゆるとあり

又其燒瓦を見るハ不手際にてふさ方の不規則ある事甚だ日本ハ劣れり日本の事物を西洋諸國ハ比較すれば何事も何物も唯だ我れの劣れるを見るのみにて残念ハ覺ゆる事多きハ只

燒瓦の一事お於ては日本の方大ハ優れるが如し第一先つ瓦の形の正しき事も彼地は者ハ日本の方大ハ優れずして甚だ鹿組なり又其色合も素燒の如く赤色を斑ハ帯びて日本の如く定てたる色おし左れば色と云ハ形と云ハ是の二點ハかけてハ日本の方甚だ立優りたる者あり斯かる鹿組の瓦を以て書きたる事あれば彼地の屋根ハ赤色ハ見へ又日本の如く一行ハハ然と條目正しく並び居ら左折右曲て見ゆるあり万事何事も正しきを好む國柄にありて何故に獨り屋根瓦の一事のみ此の如く見苦しきやと考ふるハ蓋し彼地の家屋ハ總体ハ高くして往來人の目みハ只三四階の軒端を見るのみて其屋根と近く見ると能ハず只遠方より之ハ眺るとの出来るまであり左れば通例市街の家ハ尙更の事少し高さ家おらんには屋根と先づ其家の化粧の中ハ入らぬと云ハの有様あり然るが故ハ自然と其瓦などに注意すると薄さものと見ゆ（左り乍ら公會の家屋或ハ寺院其他有名ある建築の如きハ屋根より土臺に至るまで念ハ念ハ入る、事あるが故ハ其屋根も亦尋常の赤瓦などをば用るを頗る注意する事なれハ此類の建築は取除けての論と知るべし）然るハ日本の家は甚だ低くして皆其屋根を望み見らる、が故ハ屋根及び瓦おハ其家の裝飾の部類ハ加へる事あれば自然と屋根瓦も心を用る如く西洋諸國ハ優るハ至りし事あるハ尋常の家屋の瓦ハ日本の方が遙

かゝ西洋家屋の煉瓦は優り居ると云余等の保證する所あり

近來日本は行はる、亞米利加瓦とか云へる一種の瓦あり右は歐洲諸國よては餘り見懸けざる様に覺ゆ唯亞米利加に於ては處々よて見受けたり然れば此見の型之近來の發明にて亞米利加より始まざしものにあらざるかと思はる然れども余等の耳目の及はざる所は西洋諸國の中よても稀みて之を用ふる者あるやも知れず

●問 道路の有様は如何

●答 西洋の道路の概して四種ありと云ふも可なり先づ第一は日本の銀座通や杯の如く通例赤土煉のもの、其儘固りたるものあり又第二に石疊あり其仕方日本よて眞石と稱ふる堅き石を煉瓦の如く割りたるもの（勿論四面共煉瓦の如くスベ〜と磨きたるものよ非を形ちは煉瓦の通り乍ら其面は粗らくして所々よ少々つゝの高低ありと知るべし）を以て銀座の人道を煉瓦にて疊みし同様一面よ敷き詰めたるものあり此石疊道の舊來より諸國は行はれ來りしものよて少し都府らしき處よ至れば其町々の如何は道幅を狭くも必ず石疊あらざるはあま此方法がれの雨水の爲め通例の土道の如く所々を洗ひ流されて高低を現へず如き患もなく萬端都合好く丈夫至極のものあれども余等の如き旅行者杯の爲めよ

と甚た好ましくらぬ道あり如何とあれ馬車杯よて此上を通行すれば其ガタ〜と揺れて頭腦よ響くと實に甚たし銀座通りの如き土道を車よて驅ると此石道を驅るとは實に乗客よハ非常なる苦樂の差あり此道を乘り行くときは辻馬車よても其揺れ甚だしきとあれば況してや乗合馬車杯よて斯る道を通行する時之痛痛を惹き起すかと覺ゆる程よ動揺し且其ガタ〜と軋る音も亦た甚た不愉快千萬あり此一事ハ蓋し日本の車よは未だ曾て經驗ありざるものあるべし又第三よは煉瓦の形ちの如くせる木の木口を道一杯よ敷き詰めたる物よて木道と云ふべきをせあり木道の普請杯をあすを立寄て見るに其方法ハ先づ初め道の地盤を敲き固然る後よ煉瓦形の木の木口をヒシと敷き詰め其間よ何か流し込みて空隙を防ぎ然る後よ極細かある泥を薄く敷く散しあるが如し然れども諸車か其の上を軋るが故よ此木口よ自らは現れ居る場所も多し又此木口よ悉く質をナヤンを塗りある故に往來を始むる前よ此道の色は黒く見へ居れり此木道は廿年來諸國にて造り始めたるものよて追々よ用ひらるゝ有様あり其第四よ日本よてタ、キと唱ふる如き種類の道よて一種のセメントよて道一杯を塗り詰めるとあるが又燥く迄よは時間と費やして此間よハ雨天もありて道を損ふの懼れあれハ甚た此道之難澁の如く思ひたるに其修復を爲し居るを見れば大なる變器よて其道の上を燥らせ



居るとなり熨器の形ちと恰も彼の御影石の圓さ道ナラシ機械の如く鏡にて圓く出來居る其中火を入れありと見へて此圓厨器を徐々と一方より當れてセンソンの道の漸々も燥固まる事なり左れば初め余等が難澁あるものあべしと思ひしは甚だ迂濶ありしを悟りたり此第四ノ擧げたマ、キ道は諸種の中めて蓋し第一等のものあるべし大道をマ、キ道と云ふれば徒歩するにも心地好く又如何なる種類の車もあれ其道を驅る時ガタ／＼と音もせされも些うの動揺もあく車の澄まらぬりて進むことあり

右四種の中めて英、佛、曼、伊、米の諸國に最も多き石道あり其次の木道ありマ、キ道は最も少きものあり之を用ふるに先づ佛都巴里の目貫さとも云ふべきブルバードの諸街ぐらいのとなり又英國にては中央市區(シチー)と唱ふる部分)に限るとよて適宜木道マ、キ道も改め居れども尙ほ未だ十分よ之を用ふるに至らば又石道の所を佛よても英にては漸々と木道も改まり行くの傾きあり然れど西洋道路の後來の運命を豫言すれば今日石道の所以木道も變し木道は又た次第マ、キ道に變じ行くべきなり

又英佛の重なる都府の中めて通例の場所の皆を馬車道と人道との二つに分かち中央の廣き所は馬車道にて兩側の狹き所は人道あると我銀坐通りと同様なり此人道は巴里の中央にては専らマ、キ道とあしめり倫敦よても同様よて重なる場所の人道は卒ねマ、キ道あり又中央より少しく隔りたる町々の人道は英國にては人造石を以て疊みあり此人造石とは粘土を集れ人造の石を拵へたるものよて其幅さの通例三尺四尺位のもの多し倫敦杯よては場末の町々迄も人道も皆之を用ふるとなり此石は人造乍ら意外堅きものあり一寸碎けべくも見へぬ程のものなり去り乍ら人の出入の繁き所を靴よて踏み踏らされ居る所も多し之を以て考ふれば日本よて炭石と唱ふる程の堅さの決して之をさきものあり又見たる所は通例日本で砥石色と名付る黄茶色ををし居れり右に英國に限る事よや巴里杯の町々人道は餘り之を見受けざる様も覺ゆ日本杯よても銀座の人道をマ、キ道よとすとも出来難くんば此人造石を造りて用ひたらると便利あるへしと思へる

伊、佛、曼杯の小都府を旅行し終日瀛車よて揺られたる上停車場に到着し疲れたる身軀を以て宿屋の手馬車よ乗せられ行くに當り前述せる石道の上をガタ／＼と揺られ行くの一事と旅行者の爲なる難澁なる一事ありしあり大陸の古き小都府の別して此石道多く車よて之を乗り行くよは實に難澁至極せり

●問 通例の家屋よて家の規模及び窓の有様と日本の西洋家或は横濱神戸あどの居留地の

西洋館と左までの相違なきや

●答 横濱神戸の西洋館など、差したる相違はなけれども、稍や其趣きの異なる箇條なきや  
 むわらば先づ倫敦などの中以下の家の有様を謂へば、奥行五六間を通例とし、間口之十間迄の  
 者を一ト棟とし、此一ト棟を三四間間口は仕切りて一軒の住居とす、事あれば三四軒を合し  
 て一棟の家とあり居るあり、扱家の四面を総て煉瓦の上をセメントの壁にて塗り、色之其儘セ  
 メントの灰色の者多し、而して前述せる如く通例三四階或之五六階までありて、其一階毎に居  
 留地西洋館の窓の如く細長き角なる窓を二つばかり宛あけあるを常とす、最も間口の廣狭に  
 由て或は大なる窓一をあけたる者あり、又小さき窓三ツを設けたる者あり

往來より一段低き下間之夜中杯之不用心あるが故に、窓は外は鐵格子を設けあるか、又之雨戸  
 を閉つて様よあし、ある者も、鬱うらむ又往來と等まき平間の窓も往來より近く、まて不用心ある  
 が故に、家は因て之扇の雨戸を閉る様よあしたるもあり、然れども一階二階三階四階に至ては  
 大抵雨戸を用ゐぬが通例あり、右の家甚だ高く、まて盜難も亦少なきが故あるへし、而して右の  
 窓々はガラスの戸を嵌めたり、是れも倫敦は通例窓一面の大ガラスを用ふるあり、又其厚  
 さも日本にて用ふる尋常のガラスの三四倍もあるべしと思ふ程、厚し日本には厚ガラス少

あきが故にガラスと聞けば、毎も脆き者の様よ、若れは通常ロンドンの家の窓などは用ひある  
 者の實は厚くして丈夫なることあり、又近來建築せる住居家と大概窓の戸を上下二枚分ち外  
 面より之を見れば、窓の其中位に一の字の仕切あり、下下のガラス戸を上あぐるや、又之上  
 のガラスを下あぐるすかのまあす様よ、工夫せり、故に窓のガラス戸全部を一時開くと、出  
 來がたき者あり

●問 往來の人より、家内を見徹され、或は日光の室内に差込を防ぐ等には、雨戸なくして不都  
 合の如く思はる、又雨戸ありとも、此を閉ひれば、室内甚だ暗くあるの恐れあり、其邊之如何

●答 外面より見徹されぬ爲め、あて窓飾は室内に薄紗の如き者、「非常なる高價なるあり、又  
 粗末にして非常なる廉あるもあり」を設けありて、此薄紗布を垂ると、その外鏡より見徹さる、  
 恐れもなく、明光も十分に取る、事なり、又夜分あて家内の者の寐床に入る時、或は日光の差込  
 を防がんとする時は、ブラインドと名くる木簾を下ろすと、ななり、此木簾之通例窓の内都に設け  
 ある者にて、幅三四寸と、幾し薄板を幾枚も綴りて、簾の如く拵へたる者あり、是を巻上げると  
 さして、疊まりて四五寸ばかりは、縮まり、是を下ぐれば、窓一面を塞ぐ様にあり居り、而して此の  
 薄板の木簾は、羽重取となりて、下よも向ひしめられ、上よも向ひしめられ、隨意に其の重なり方

を變する様も出來居れり横濱の停車場杯で先年之を用ゐりしを見掛けたり此木簾は雜作も亦く出來る者にて甚だ便利なる工夫なり倫敦の住居家にては通例何れも之を用ゐる事多し然れども又此木簾の外に唯厚き布を垂れて窓の日光を防欄ふ爲たる者も少あからざる之濃赤色又濃綠色杯の布を以て之を造り紐にて之を巻き上げ或は引下げ、様も亦すと通例あり前記せる木窓と如何に手際に拵へるも十分ならぬ譯ふや廣大ある建築美事ある住居家とて此布窓を用ゐる者の方稍や多きが如し厚ければ爰に配載すべし中人の通例の座敷も皆實際は一種の窓飾の長幕ありて綾織の切布を以て之を造るは是の長幕は實際之を開閉に用ゐる事は至て少あり通例と單ふ其室内の趣を添ゆるが爲先とするものあり其形之先づ窓の中央より右より一つ左より一つを以て窓の上より下まで掩ふ様もあり之を右と左の左右より絞らば種々窓飾りを其絞る所の紐もつけあり是は通例の部屋にて無くてもからぬ飾にて室内大切ある一部分とあり居る事あり

又窓ガラスも少し宛其趣きを異にする事あり佛國の都府に至て見れば其窓ガラスも多く兩方より開く様もなしたる開戸ありて英國の如くは上より下まで下より上まで開くかの外は前面より開く事の出來ざる様あり居る者も甚だ稀あるやうに見受けたり而して又佛國にては通例其ガラス戸を三三四の格子にて仕切り其一格毎に別々の一枚ガラスを嵌め四五枚のガラスを以て一枚の戸となしある者多く英國に如く一面の厚ガラスを以て一枚の窓となせるも稀ある様も覺ゆれ此兩國の風俗の同しからざる者あり而して又全体は英國の方は不細工ある程其ガラス厚く佛國の方で稍や薄き方より見へたり又伯林の如きは通例の住居家でガラス窓は佛國と其趣を同らし開戸の方少ながら又一種の便利なる通例其窓の上段を蒲鉾形に操割て此處より一尺内外の處より一仕切をなし此仕切より下を例のガラス戸の左右開きとなり居れり而して是の左右開きの上即ち其蒲鉾形と仕切との間に亦たガラス戸の小開きを設けありて戸下なる大ガラス窓の開閉は關せ此上段の蒲鉾形の處を開閉し得る様も工夫しあり故に若し風の入り過ると覺ゆる時と下なる大ガラス戸を閉め其上ある一尺内外の小開きを開いて少しく空氣を通ずる事も自由なるべし此等と英國も亦餘り多く見掛けざる工夫も至極都合宜しき譯なり

左りながら英國とて少し田舎に往た親ればガラス戸の厚みも随分薄き者多からず先づ都會の尋常の住居家の上に就て斯く圖々を比較したる事なり一寸者へればガラスは破れ易く往來は窓々が立並び居るとなれば瓦礫をどを擲ちて容易に傷けられべき譯なるも斯く惡戯

往來は窓々が立並び居るとなれば瓦礫をどを擲ちて容易に傷けられべき譯なるも斯く惡戯

をあす者なきの感心の國柄ありと思ひ居りしよしく倫敦の場末の市街に至り見れば其空  
屋に限りて窓のガラスを散々破れ居る者多し蓋し惡戯の子供が人の在らざるを窺ひ喜ん  
で瓦礫を擲ち之を破る者なりと見ゆ家に因れば其ガラス窓の一階より三階に至る迄美事  
打破られたる者多し然れば随分惡戯兒童の多き何處も同様の事なるべし

●問 西洋家は其壁も厚く扉も堅固にして締りよしとの事なるが若し他人の宅を訪ふ時  
於て取次を請ふは鈴もても鳴らす様を仕掛あり居るや如何日本の如く頼むと云ふも不  
似合あるべし

●答 如何にも鈴を鳴らす様をあし居る家もあり先づ英國の事を以て申さば同國人何事  
も不便利なき以上の古風を存するを好む者もや茲に一種の工合あり先づ中以下の通例の家  
よ其入口の扉の前面に丁度手の届くべき高さの處に手ごろなる相應の引出しの環の如き  
金屬垂下（金垂下）居れり英國にては之を戸敲「ドアーノック」（ドアーノック）と名く來訪する人は先き此の環を  
ガタ／＼と鳴らして戸を敲くとなり然るとたゞ取次人出で来るを通例とす又此戸敲き方  
よて此と電信とか郵便とか是と來客とか區別自然にだし居れり其譜調を謂へて先づ電信を  
らはカナと高く一と聲敲くとあり又郵便をばカン／＼と敲たく聲なり又た通例の來客を

らはカ／＼とカ／＼と初先を刻んで後み大きく一二遍敲くとなり右と甚だ便利あり區別よて何  
時の頃より斯る事の生せしむや先づ電信あれば下婢も急いで之を取りよ飛び出すべく又郵  
便あれば左聲急ぐも及ばず又來客あれば取次人も餘り見苦るしき姿よて出でせ一寸前  
垂よて手あても拭き取次よ出るの便利あり右の敲き方の規則に他の譜調より曾て是をさ様  
よ存せられ英國に限る様も見ゆ先づ何れの家も通例と右の戸敲の外に客入口の横の處に鈴  
紐あり臺處向の小商人の來る時よ之を曳き鳴すとす例せば石炭屋青物屋牛肉屋杯が毎  
朝用を聞きよ來るときも毎も此曳鈴を曳き知らする事なり

右の曳鈴は近來よては稀に電氣仕掛を用ゐる者もあれども先づ通例は鉄線（鉄線）を延き其先よ能  
く鳴る鈴を付けあるを通例とす斯る曳鈴の便利もある者を英人が古風な戸の前よ戸敲き環  
を付けるも畢竟に不便利を感せざる限りて從來の古風を其儘に存するの氣象を察するよ  
足れり又右の戸敲き環と素と外より戸を開閉する時は把手よ用ゐたる者を戸敲きよも兼帶  
し居りしか次第よ世と共に推移りて今こ戸敲きとのみ變じて外面より戸を開閉する爲の把  
手と別よ生じたるあるべし初めて英國よ遊びし人よ其當座右の戸敲の譜調を知らずして甚  
だ困却すると有あり何よとあれば其曳鈴之家に因れば鳥渡目立たざる處よ在りて之を見出

すと難く左ればとて外面より頼むと聲をかける譯も行かさればなり

佛、曼、伊等の國々よては前記せる如く戸は戸蔽の環あるは殆んど見當らざる程の事よて此等の諸國よては通例曳鈴の設ありて之を曳き鳴らして取次を頼む事あり又前記せる如く英國にては軒く往來よ向つて入口を所持し居るか故に差支無れども大陸の諸國にては一階一階を一家族よて取切り居るとなれば先づ其家よ至れば諸家族の共同よ用ふる一の大門ありて往來よ面し居るとなり然れば先づ此大門を開け貫ひて然る後一階あり二階あり其訪とんと欲する所の家族の入口を又音のふことあり右の大門を開閉するよは一々門番が出で來るの勞を除き來客か門前よて取次を頼む曳鈴を引く時ハ奥ある門番處よて人を出で來らずして言く門の戸を開閉する様に仕掛なしあり然れば外面より鈴を引き取次を頼めば人の無きよ其戸は自からバツマリと開くとあり

●問 日本よて居酒屋と唱ふる如き酒店様のものも彼の地よは之あるや

●答 然り先づ倫敦を以て申さば丁度日本の居酒屋とも云ふべき場合に當る酒店澤山あり彼の地よてハ「バー」と唱ふるとあり先づ酒店よ至ると假定め其往來よ面したる店の一面を渾てガラス張りにて外より見透されざる様、艶消しガラス杯を人の丈の高さ位の所を用ひあり窓の上よハ葡萄酒ビア、ホイスキー杯の如き酒の名を二つ二つ横長く窓よ張り付あり障戸を開いて内部に入れば酒賣りの手代と客との間よ机の如き什切りありて此の仕切りの卓子こ丁度腰胸の間位の高さあり此卓子の上よは七八寸一尺計りの小き欄干のギボヤの如き棒並ひ立てり手代と客の需めも應し此の棒を抑れば卓子の内部よて夫れくの酒出る様よあしありて酒を盃よ盛り卓子の上よ載せ客よ興ふ然る時は客と通例立飲ををしし出行くとあり故に酒店よ至るとも徳利の如き物もかく又樽の如き物も見へき唯仕切りをさせる狭き卓子の上よ短き棒の並立つるのみあり故よ甚だ手綺麗よ見ゆなり其酒の種類程卓子の上の棒の立並び居る譯ありバーと唱ふる居酒屋よては通例立飲みをあすとあるか又間には粗末ある椅子を列べあるものあり夫れすらもメンナと唱ふる造り付けの長き椅子多し一箇つ、別よ椅子を置くものは甚だ稀なり又酒屋の内よパブリックとフイヤーとの二よ別ちたるもありフイヤーとて少し体良き客の入込みの立飲を厭ふ人よの道入る所にて鳥渡仕切りありて別構へををし又パブリックと云つる方と則ち手代の見る所よて立飲みをあする所を指すとなり

英國倫敦よて此居酒屋の夥しさと實よ非常よて少し中央繁華の盛場より隔たれば到る所の

二九

町角の大なる店と通例酒屋をさざるもの稀あり人目立つ便利を計りしよや不思議は酒屋は町角の角ありとなり借一杯立飲みをなすも勝手あるとかれと鳥渡氣注けをささんとする者直く立寄り一杯飲んで出来るとも自由なり去り乍ら先つ通例の酒屋は身元ある人余り立寄りさる方めて少し場末の町よ至れば中等以下の貧民の集會所は酒屋たるの有様にて甚だしきよ至ての男女打交り土曜日の夜杯にて押し合ふ程は此居酒屋は繁昌せざるものあり大酔の上クマを巻く嗶アもあり買物を片手お提げ乍ら眞赤ある顔色にて出来る娘もあり下等の人民よ至て此酒屋を以て己れ等の俱樂部ハウスとし集會所とし愉快を買ふの場所とあり居る如く見ゆ

右の酒屋にて「ビール」葡萄酒と勿論「ポランドー」「ビスキー」等渾べての酒類を賣が上よ又た「ラムムチ」「シンク」「ピア」等をも併せて賣るもの多し故に夏分市中を散歩し咽の渴く節のよ立寄るも隨意あり

酒屋の之を記する序は記し置べきは西洋諸國と云へる内よも羅甸人種と「トイトニツク」人種の國の其酒の好も自か諸國押し均して相違あること不思議あるとなり先つ佛蘭西伊太利等の如き羅甸人種の國々先つ第一よ出来る酒と葡萄酒と定たることあり然るよ「トイト

ニツク」人種なる英、曼等の國々よ至れば先第一よ出る物の「ビール」あり一方の重もある飲物の「ビール」めて一方の重もある飲物と葡萄酒あり是れと著しき相違あり故に巴里杯めて其店めて注文あれば「ビール」も持ち來れども先つ通例の料理屋割烹店杯めて注文あれば「ビール」は甚下等ある物を出すと通例なり又葡萄酒を擱き「ビール」杯を注文すれば甚だ下品なる客人の如く思われ少しく差扣めると云ふ趣をさよ非ず然るよ「トイトニツク」人種の國よにて酒と云へる先つ「ビール」も取て掛るを通例とぞ葡萄酒杯て女より外先づ飲む者おしと云ふ顔付さをなし居るとなり後來日本と「ビール」國とあるべきや將た葡萄酒國とあるべきや今日めて「些と」「トイトニツク」人種の「ビール」國とあるべき様見ゆるが如何

前記せる酒屋の景況は専ら英に限りたることよ佛蘭西、日耳曼、伊太利等めて別は斯る居酒屋様のものあり夫の珈琲ハウス則ち「茶屋」と譯して可がるべきか（此酒屋の役目を勤むることよて此點よ至れば佛、曼、諸國と云ふ英よりも都合好きとなり如何となれば佛曼の珈琲ハウスよて通例椅子卓子等それく備へり居りて如何なる田舎と雖も之よ立寄る時と幾りと休息も出來カレヌもひと將基も少し新聞をも讀み談話をもちし得らる、様お持へあり

三九

四九

故一つと珈琲を注文するのみならず如何ある酒をも通例注文し得らるゝとあれはあり然るに前記せる如く英國の酒屋は唯立飲みを専らと持へたるものにて佛曼の珈琲ハウスの如く緩りと寛いて休息するの仕組なければあり

尤も英國よても珈琲ハウスあきよりあらねども佛曼の如く到る所よ之を見ると云ふ譯あは行の極く繁昌せる町々あてて佛蘭西の珈琲ハウスを其國に寫すも鮮うらま其体裁と甚だ相似たるものあり總て是等の事物よ付ては英國は佛國の仕組を學ぶと少からず然れども尋常の町々よては最早固有の國風よ従ひ無闇あし置くことあり

英、曼、佛共み珈琲ハウスよて料理をも兼るもの多し料理屋あらば通例一方を珈琲ハウスよあしめるを通例とす

●問 酒屋の手代と男子とや女子とありや

●答 双方共よ之あるやうよ見ゆ尤も酒屋よ限らず近年英國よては女子に出来る仕事あれど通例多く女子を用ふるとあり右と女子と天性物事よ綿密なると又一つよ其給金の賤さとは由るものあるべし前記したる酒屋の如きと幾んど皆な其手代と女子と云ふも可なる程なり尤も唯酒を注ぐのみのとにて別よ体力を要する程の業よあらねば給金の賤さ婦人を

用ふる方便なるべく又一つよ客人よ對して萬事丁寧よして愛嬌深さよも由るものあるべく其邊より定めて種々の意味もあるとあるべし斯く西洋の手代の通例皆な女子なるのみならず町々の郵便局の如きは幾んど皆な女子のみと云ふも可ある程あり又た電信の取扱ひも同様あり右の故さらば斯く爲せしものや詳ひらうならされども兎も角も其婦人の一手持と云ふが如き姿あま目よ留るとなり但し海外との往復を掌とる中央大電信局或は倫敦市中七八ヶ所よ設けある重立ちたる電信局杯よて女子を使ひ居らざる者もあり然れば總体よ婦人のみとは云ひ難けども先づ町々の電信局よては婦人多しと云て可あり

●問 彼地よも日本の如き菓子屋あるとや

●答 然り爾分菓子屋も多きとにて何處も同じ菓子屋は重きも子供を其花主とあし居る様子なで先づ菓子屋にて賣る品物の種類を舉ぐれば第一ビスケット(ミルク入り或は生姜入)マ厚焼薄焼幾種類もあて又てチョコレート(ミルク入り)を以て製したる者又ミルクを交へ子供よ宜しき様に彩色したる生姜等の類なり是等と日本よて云へば都て先づ干菓子部類に屬するものあてチョコレート珈琲ミルク入りの菓子之形と日本の金米糖より少く大ある程の粒よ種々の形とあ爲せしもの多し又此外よ日本よて蒸菓子とも云ふべき種類の者あり委り作

ら日本の蒸菓子（シロ）の如く小豆（アジ）と云へるものを一切用ひざることをすれば其蒸菓子と云ふも玉子、小麦、クリームを材料とし軟かぬ之を拵へたる物にて先づ風月堂にて製したる故がある西洋菓子と相似ある者あり

去り乍ら菓子屋の最も得意ある商賣は婚禮の節に用ふる一種の婚禮菓子と名づくるものあり嘗て一どたび記載したる如く英佛にて婚禮の節には必らず婚禮菓子と名づくる一種の菓子を飾り付ることに其必要ある事恰も日本の儀式は鳥籠のゆく可らざる如きなり右の菓子其價次第にて如何様にも大小ある菓ながら先づ通例の日本のカスターラと生姜入りのビスケットを混淆せる如き物質にて其表面を一面に白々ミレン交りの砂糖を塗りて拵へるか多し中等士君子の家あらんは此の婚禮菓子にて五十圓も百圓も費すと珍しからぬ事あり而して婚禮の濟し翌朝花嫁が手から此の菓子を渡さ親類朋友は夫れく進物とあすあり右の縁起を祝ふ菓子にて貰ひ受けたる方にて之を珍重し賞玩するにたるか多數の人々お分ち遣はとあれ其一個宛の切れと誠に小きあるものあり時より困りて幅一寸長さ三四寸位なるものを分配せらるゝのも珍しからぬ斯く儀式も大切の菓子あれば菓子屋の重なる儲込みと則ち此の菓子あることにて通例相應の菓子屋の店價は必あらぬ美事と造りたる

婚禮菓子の二三つを並べあるを見るまで。

通例の家にては晝飯或は夕飯は菓子を食べするところあり是等の菓子と通例自分の臺座にて遣る者多しとあるが又時としてカスターラ様の物を菓子屋より買入るゝと杯もあり去り乍ら菓子屋の得意と先づ第一は婚禮菓子第二は子供として第三はビスケットの類なり是は英佛の習として夜食の茶の時分は大抵多く之を食することあり

○問、倫敦杯にて賣り居る魚類は日本と同様なりや

○答、同様あるものあり又異ありたるものあり無言して言へば通例の魚屋は列ある魚の種類を甚だ少して先づ重し鮭、鱈、シマビラン、比目魚、鰈、最も多きとあり又最もく是等の魚類を食する事なり右の魚々の味は日本と異るとあり又此外は鰻もあり然れども鰻は日本の者とは聊か其種類相違あるかと覺ゆ先づ日本の下等の鰻と海鰻との間の如き然れども其色合全体の姿は先づ日本の鰻と云て可なり倫敦にては随分鰻をも賞翫することなれども其料理法は三四寸ばかり、筒切に切りスナウをかけて之を食す尤も鰻は其筒切の儘蒸たる者の如く見ゆる其外は右の鰻をフライにしたりるものあり通例日本人は故地の鰻の料理をば餘り賞翫する者少し余等が留國を遍歴する中其地在留の日本の朋友が鰻の料理を企てた



る事鮮のらき其中の一ニ之稱や日本の蒲焼は劣らざる程の旨なりしかども其他の何れも鰹の肉餘り大きく且つ脂多くして腥さく何分よも日本の鰹と同様よの思はれざりしあり鰹は英佛杯までも殊の外珍重とあるが此鰹は二種あり其一と日本を伊勢鰹と唱ふる者あり又他の鰹と日本よの餘り見當らざる者よて伊勢鰹は鰹の如き大ある爪を生したる者あり先づ此方を珍重する事よて其肉の味も亦日本の鰹よ此すれば甚だ勝れりと覺ゆ日本よて鰹は左まで上等の魚類とと思こざりしふ彼地に在れば余等までも自然殊の外之を珍重する様あらば吾ながら不思議あるとあり

又倫敦などよて牡蠣を珍重する事非常あり倫敦市中にある牡蠣も英國の海岸よ生をるあり又亞米利加、佛蘭西、葡萄牙より輸入する者あり然るよ地の牡蠣は高價よ去て最も珍重され葡萄牙の産之よ次ぎ佛蘭西、亞米利加其次に居るとあり牡蠣の時節始まる時よて通例拵指の先程有るか無きの者十二(一ダース)五十錢以上ある者あり少し下りて三十七錢五厘二十五錢内外とある年々牡蠣を葡萄牙、佛蘭西、より輸入する金高も相應よ大なる事なりと聞けり牡蠣の時節至れば處々の安料理店の前よ(牡蠣の時節始まり)と書ける看板を見る事甚だ多し英人の牡蠣を嗜むと甚だしき知るべし此事に詳らかなる人の話ふ英國の牡蠣は日本の産杯と少し其種異なるとの話もあり果して然るや否や

中央魚市場よ至れば日本同様の鯛も時として是れある由よて日本人が時として日本料理を企つる節よて此を買込むとあきよ非を然れども何となく其味甚だ劣りし様よ思はれたり又乾魚の類よ甚だ多し鯡、鯖、小鰹の類皆手奇麗よ店前よ列べあると日本よ異なりを只た此等の乾魚の乾え方如何よも手際よて籠甲の如く透はりて見ゆる程の者もあり日本の乾魚の其表面よ鹽を吹き或て白く或はシトくと濡り居るよ此すれば見たる計りよて既ふ大ある相違あり

●問 野菜類如何

●答 右て日本の者と違ふ居ると鮮なからせ且つ西洋料理よて用うる野菜のみあり時節よ由てそれよの相違はあれども先づ通例は日本よてサラダと稱ふる苣の一種及びキャベツ、ユウリ、ラファ、球葱、及びトマト、馬鈴薯の類なり日本よ通例の葱の種類之れあり又蕪菁之れども蘿蔔なし又甘藷を去時として二三の甘藷を稀よ店頭にて見懸るともあり一日日本の甘藷の旨味の懸えよ之を買取りて歸り下宿屋の主婦よ吩咐て是を焼き食事の時出さしめたるよ恰も日本の腐れたる芋の如くビシビシと水氣ありて甘みも更ふ多か

らき其儘打捨てしめたる事あり其後開合込に甘藷は英國杯よて出来難しとの事あり果して然るよや又前記せる外よある者アス、パラガス(西洋獨活)右は佛國よて品多くして廉なるも英國にては非常よ高價ある者あり故に餘程其時節の末よとらされば中以下の家よて之を食せると能くせと云て可あり

●問 彼地の湯屋の模様は如何

●答 湯屋も上中下種々の差のあれども先づ中等の者より謂ば倫敦杯よて湯屋の二枚敷位の一ト部屋くの仕切ありて大ある湯屋は部屋敷二三十もあり小ある者よは十がりあるもあり部屋くは皆狭く仕切で其中湯氣も立騰るとよて逆上するの憂あるが故に通例其仕切くの上こ一体も皆空気の通ふ様も透しあるとあり諸其一ト部屋の内の有様を云こ、其中四枚敷ばかりよ人の丈程の長サよて高二尺四五寸ばかりなる細長き湯坪あり其物質は先づ何か薬をかけテラくと焼きたる瀬戸物の如き者よて湯坪垢杯のつくよと少なき様も拵へあり手障も至て滑うて其色こ白し尤も是こ湯坪の内面を言ふ者よて其外部の板よて四角よ包よある事あり此湯坪の形は上中下の湯屋共よ大抵相似たる者なり中等以下の者こ部屋の外よ此湯坪に通せるマサの湯口附きあて湯屋の小使が外部より水の方を拾れば水出で湯の方を拾れば湯出で隨處よある様もなし故に部屋の内より温くせよとく熱くせよとか其加減を差圖するとなて又上等の部屋よ至れ此のマサ部屋の内よつき居り我れは湯坪よ在り乍ら香思ふ様に熱くも温くも勝手も其マサを廻わして自由よ加減をあすと出来る様よ仕掛たる者多し又少く贅澤なるの頭の上に如露の如き口設けあり我れは其マサを拾れば湯が瀑の如く噴上よて打下るあり又ゴムの管ありて管の口先も如露の如き口つき居り之を湯口よも水口にも自由よ着けて勝手よ頭を洗ふ様よあしある者もあり又一ト部屋毎よ夫々鏡、櫛、ブラ、ツシ其他脊中を摩る爲めのブラ、ツシ、石鹸、杯を備へ置きあり但し家よ困りてこ石鹸丈の別よ價を拂へねばあらぬ處もあり

先づ湯銭は下等よて六片(十二錢五厘内外)あり中等よて六片より一志(二十五錢内外)迄の間なり又上等種々よて一志より二三志までの者あり去り乍ら先づ通例は一志あれを一ト通りの湯屋と云ふべし左れば下等生活の人民よ取て我東京人あどの如く日々湯屋も趣く事こ迎も能し難き事よて一三ヶ月の内よて一度入るか入らぬ位の事あるべし又中等の人こ各々其家よ浴室を持居れども夫れすらも日本人の如く頻りよは浴せざる方あり是其時侯の熱する時節よなきよも由るあるべけれども又た一にこ家内の部屋くの便利よきが故ある

べし余等の如きフセフ者あては彼地ニ在るときは毎朝其部屋の中ニ備へある顔洗鉢にて毎朝く全體を水或て湯にて拭清め然る後衣服を着けたりしとなす是れ己の寢部屋ニ他人の勝手ニ立入り難く又他人ニ見透かさるゝの憂もかく部屋の中ニ怡む人々の一城廓の如く之に加ふるゝ其部屋内ハ水鉢・顔洗鉢・始め一通り手拭迄夫々綺麗に整へ備へあるが故に何人も通例ハ毎朝起ると直ニ遠慮なく其全身を拭清め然る後其服を着るとあり且其服も日本服の如く藍や身よつくべき憂もさか上ニ總て清潔なる白の下着を用ふる事あれば身体汚るゝ少たとあり余等の如きも彼地ニあれば日本ニ在る時の如く屢々浴せすとすも濟し事なり

西洋諸國にては人の肌膚を露とせとこ一寸よても非常なる耻辱の如くあり居れり斯く行儀正しさが故に其部屋と云ひ湯屋と云ひ全體を拭清めるに決して他人ニ見られざる様み持へあるとなり左れば暫時の間ながら彼地の風俗の中ニ在りて日本ニ歸り來り會々浴室ニ導かれナガシ杯と唱へ下男が裸体にて出で來り此方も亦裸体にて垢を流し去るべきと何か變ある心持もしたてし因て察するゝ外國人などの目にて我國の浴室の有様を見ればさぞ打撃となるべし左り乍ら倫敦の如きも以前は皆入浴ありし者の由ありしハ政府より規則を出し

遂に今日の如くなりしと云へば唯た彼國は我國より少し拙取り早きのみにて其初めと異相似たる者ありしあり

英國にては餘り其類なければも佛國にてはフリッシュンと稱へ別ニ價を拂へば垢摩の小使ありて垢を落し呉るゝと稍や日本の風と相似たり左れば日本のナガシと謂へる者も亦一種の贅澤法と云ふべし

國々因ては湯屋は髮床の附き居る者鮮なり左れば甚だ便利ある仕組なり

英國の湯屋ハ湯浴場の外に水浴場を設けある處も甚だ鮮みからせ此水浴場の綺麗ある石或は焼物・煉瓦等にて造りたる大なる池と云ふべき者も其廣袤は十五間乃至二十間四方の者も少からせ是れ清水を湛へ其深さも殆ど人の丈程あり夏分の青年の若者杯て此水浴場を泳ぎの稽古場とあして樂み慰む事なり左れば此水浴場の無倫入浴あり然れども裸体あらざる各々其腰部を襦と包ましむべき腰布備へあり入浴者之を纏ふて遣入るあり又場所よ由ては此地の清水常新陳交代するの仕掛ある者あり

若の水浴場は男子のみならず婦人の爲めよも之を設けある者あり其場所ハ婦人のみの専有は無し男子は無論立入ることも出さず

●問 マノラムと稱する一種は展畫之れある由承知せり是の趣は何様のものや

●答 マノラマの先づ日本のノゾギ又カヲリと申せ處よて其大體は廣き場中を圓く仕切り其圓にありて何處と楯目と分らぬ線は大なる續き畫を以て建て廻しり見物人の其中央よりて之を周覽するところ其見物人の周覽すべき場所と繪との間之句欄を以て畫と平行線に仕切りあり早く云ハ、蛇ノ眼を描きたるか如し中央の白き處は見物人の立つ場所にて黒輪の外邊は即ち畫の建て廻しある處あり而して其黒環の環に見物人と畫とを隔てたる空間あり此のマノラマの畫は或ハ山水或ハ都邑等様々あれども大抵自國勝利の戰爭を繪きたるり多きに居れり則ち伯林にて名高きはセマン（普佛大戰爭の時那破翁三世が計場にて迷ふ降を乞ひたる所の地）戰爭國のマノラマなるの類あり此のマノラマに就て目を駭かすハ其繪さ方如何も眞に迫り例へて一とつ草叢を繪きあるハ半分は畫よて其半分は畫と續けて眞物の草を懸へ在るあれども何處迄か眞物よして何處迄か畫あるや見界付す又兵卒の打撃する破れ帽子、空丸、等畫中にも有れハ其前ハ眞物も散亂させられ共是亦視紛ふ計りなり畫の高さを其大小より不同あれ共通例先づ三四間内外の有へし而して中央の見物人の場處これと一間許りも畫の楯より高く築き上げあり其間ハナメラマを居りて道を

り草叢あり其他土石花木一切の景色都て前面の畫と續けて眞物を以て拵らへあり則ち是れ由りて見物人の目を迷かせ孰れか畫孰れか眞物あるを想ひますとわさしむるの趣向を流石何事何物にも理學の入込み居る世界だけ顔料の使ひ方さへ斯く進んで咫尺の中は居り乍ら畫と眞物とを視まがふ程よわらしむるは感心の次第あり顔料の次ハ人の眼を迷はす元業は其遠近の釣合の如何も巧みある事あり例へば前面ハ一望の青海原よて山影模糊として大船巨舶とすも盈たぬ計マ見ゆる遠景ある處へ最近の遠邊に一幹の喬木を無遠慮よ高く太く繪きありて其枝々の葉ハ歴々敗ふへき程よ分明あり此の釣合よ由りて前面の遠景は眞に千里際なきや如くは想はる、あり又第三ハ人の眼を迷はす本に其光線のとおり方の甚た巧みなる事あり見物人の頭の上ハ一面ハ圓き青幕の天井を以て蓋ひあり此の青幕は畫の際より幾尺も手前よて絶れ居り此の間より光線を容る、趣向あり而て其天井の端ハ亦畫の頂上より幾尺か幾寸か下げありて見物人の眼よて畫は何處よて盡てたるやを知らざらしむ斯く前面を望めは望む程明かると事愈々明るくして且つ盡てし無邊よ見ゆるか故見物人の自然眞景を視る心地する等の譯あり何となれば若し此の天井よして何か別段の形や別段の色ある者ならしめ又た是と畫との界判然と分明よて居らしめて其比較よて忽ち其

書全体の書たるを暴露すへければなり

パノラマ館の内より右の大書の外より又た幾多の小書を観する様なしあるか多し是て一切宛の平書もて壁書を観ると同様あり亦た鏡のなきカラクリを観ると同様なり又たパノラマと通稱するは多く右の圓く建て廻りしたる大書を云ふとあれども其中には眞に日本のノヅキ同様幾個の平書を鏡もてノヅキ観する様もせる分もあり

パノラマ館等至る所一都府中よりは必ず幾個かのパノラマ館あるは通例なるは倫敦もてハ割合は至て希れあり如何なる故もや相分らされども或ハ倫敦は仕事所もて遊び所も非るか故斯く不風流あるありと云へる説をありき

パノラマの大書も同じ書中にては亦た別派のものもて猶ほ日本の舞臺書、書割、の如く其の専門家は非されど尋常書工もて出来難き由あり左をあるふしと思へる

●問書家よりハ日本の如く毎朝八百屋あどの来ることあり

●答 然り此の事少しも日本と異らむ出入の八百屋毎朝十時より十二時迄の頃中以下の家をばソソく用聞き廻るともて其店の大小は應し各々皆を小さき車を持ち居り之は青物、菓物、の類を積み之を馬に牽かせて行くとあり又牛肉屋の如きも毎日其の得意先を

廻ると八百屋と同様あり牛肉屋が牛肉を盛りたる器一種の板皿にて板の中を細長く操り取り益の如くおし其四角ある角々もて把手の如き者を拵へあり又八百屋の方もて青物を運ぶにハ日本と同様の箆を用ふるとあるが世人の知る如く彼の地は一切竹と云ふものなければ余等も最初ハ何物もてザラを編み造るやと思ひ居たりしはヨクヨク調べ見れば皆を小ざき河柳の心を以て造りたるものなり則ち日本もて柳行李は造る材料の柳の枝を以て日本の竹籠の如く編みたるものあり唯だ余等の目は最も羨まじきハ何事も皆を馬の力を用ひ八百屋もては牛肉屋もては荷も得意先を廻る程の者からんは其荷車を馬も牽かせ居らざる者稀れあり其馬を用ひ得ざる程の者は驢馬を用ひて其荷物を牽かせ居るも妙なり若し日本もて馬の飼料は入費おしと驢は責だてて驢馬もては用ひたま之を用ふるだけども大は人力を頼るとあるべきなり

又牛肉の事も付て思ひ出せる一事あり一日余等の下宿屋の使男が「日本もてハ牛肉のことを何と申すや」と問ひしは「牛と云ふ」と答へしは「然らハ牛のことを何と申すや」と尋ねしは「矢張り牛と云ふあり」と答へしは使男も大あ之を笑ひ又た余等も向む「羊のこと何と申し羊肉のこと何と申すや」と尋ねるかゆあるは余等も復た「孰れも羊なり」と答へしは復た大あ

打ち笑ひ「猪てて日本の婦人は牛肉のことも牛と云ひ羊肉のことも羊と云はる。にや餘り婦人には似合しからぬとあり英國よてハ御存じの如く牛肉のこともばヒーツと云ひ生きたる牛のこともばオックスンとかカウと云ふや又生きたる羊をハシープと呼ぶる羊の肉のこともばモットンと呼ぶ故に甚だ優しく聞ゆるとあるよ生きたる羊又は牛と其肉との稱ハダ同じにして婦人方が之を稱ふるも亦た牛を食ひ羊を食ふ杯とは如何も下品よ荒くれておかしく候てや何とてかして生きたる豚と肉との別々の名よ致さずては婦人方が嘸か去之を詞よ發するを迷惑と思はる。あらん」と云これて考へれば如何さま英國よては牛羊と其肉を之を別よし稱へを異にするがゆゑ幾何か優しく品よく聞ゆる場合あり我國も行くく定めて兩者の間よ相應ある別名を生ぜるとも立至るべき歟

去りながら他の西洋諸國の中よは生きたる牛羊と其肉との名を同じくし居る處も隨分之處あり非せとのとあれば右ハ日本のみ獨り優しうらざる下品の詞を用ゆと云ひ難きあり然れども若し生きたる牛羊と其肉と別々の名を稱ふると出來得べくんば之を殊よすること然るべきと思はる如何も優しき婦人の口より牛を食ふる羊と旨し杯と少し不似合ある處もあるが如し

●問 彼地競馬の有様如何

●答 英國人が非常な競争を好む或は舟或ハ馬、其他、球抛、クリケット、等の競争會を開く事之殆んど絶へ間なき程の事なるが競馬にて英國第一等の大賭はタルヒーレースと稱ふハイフツムと云へる處よ一年一度催ふす者を以て第一等とす同處は倫敦より汽車よて一時間内外の距離あり又其時節て毎年六月上旬の頃ありと覺ゆ英國の五六月は恰も日本の三四月の時節よて郊外よ遊歩せるよ最上の好時節あり然れば特ふ此時節を擇みたる者と見ゆ先づ右の競馬所の地形より云こゝ英國の他の部分と同じく渺々たる原野よして唯た處々に丘岡の陵夷起伏せるあるのみよて先づ一面に平地と云ふ可あり

諸其競馬所の周圍の廣表は凡そ三四里四方もあるべく全体よ芝原の如く細やうなる嫩草生茂りて僅か種々の樹木の其間よ散點せるあるのみなり此廣野の中よ一二里の長さある環を畫き此環線を以て競馬の馬道と云ふ者にて見物人の馬道も亂入せざる様内外兩側よ手摺様の者を設けあり而して其手摺より内の空地て見物人の遊ば場あて種よ様よの見せ物テントなどを張りて店を建ね實に賑やかなるを觀し其環線の側外の一部にこゝの大なる建物ありて此處にて競馬の節皇族貴族杯の機數をとる者とし其建物の左右よ傍りて見物

人々貸し渡す爲に數百間棧敷をかけ渡しあり棧敷の体は下より上まで段々腰掛る様は階級を造り其數凡そ二三十段もあるべしと覺ゆ此大競馬の四五日打續くとよて其間毎日見物人は右の棧敷は勿論其他馬道の外側は傍らヒシと込合ひ居れり通例の處にて一人前の棧敷代は壹圓内外ありしと覺ゆ尤も其處ありて種々の高下あるべし又此棧敷と馬道との間の空地は賭札を賣る者充滿し其組合の符調と馬の名前等を番附し賭札を見物人は賣附けるとあり其法と見物人總体と賣人一人との勝負の者もあり其他の仕組もあり又見物人同士の賭もあるへくなかく混雜あるとあり又貴族金満家杯の豪者を競ふ連中と幾十万兩の賭け物にする如き馬鹿者もあれば今日何百万兩の人の出逢ふ日なるとて平人へ物語る事あり又此賭を行けば裸体で歸ると云ふ諺のある程の事あり

余等の見たる中よて此の環線の全長を競馬の駈けること僅か一二回にて其他は皆を環線の三分の二或は四分の二位の所よて勝負とあしたる事なり又馬を數匹揃へて一聲の合圖は駈出す事は甚だ少なく馬も豫ねて競争の事を知り居ると見ゆ逸り逸りきりて馬を揃へて未だ合圖懸けぬ中出しぬけ先よ飛出すを留めんとして止め能はず其儘に駈出す者あり又既一匹の馬か斯く飛出すを見る時他の馬も堪り兼て二三匹の乗主の制するをも願ひを

彼よ伴ふて飛出すもあり然れば多くの馬が鼻を揃へて一齊に飛出すと甚だ稀ある程に難事と見ゆ定めて此等の事は日本の競馬も同様あるべし余等の如く何れの馬の勝敗をも唯だ冷眼に眺め居る者の身よ何の興もあらず肝腎の競馬よりも他の色々の見せ物懸み物か競馬所を廻つて興行せる者の方を面白しと覺る程の事なり

此日の賭をなして意外な儲をなして歸るもあり又巨大の損失を蒙る者もある中なれば其人氣も荒く従つてスリ騙の類甚だ夥し余等が競馬所より倫敦に歸る混雜の瀛車の中よて例の三枚骨牌(三枚骨牌を伏置き某の骨牌の義なりと暗射して勝負をなす者なり是の術よて旅人行客杯を欺く奸徒に至て多き事よて餘程の田舎者よ非れと乘らぬなり)の仲間よ出逢ふたるとあり然れども其節に雖も引懸けたる者あかりして勿論流石不愛想の英人なれば之を見向く者さへなく其儘に彼の仲間よ出て行きたりと聞き合す此日は往復の瀛車中なるとよては種々の事も出來する様子なり

又倫敦より此競馬見物に趣く者は瀛車を用るを一種別仕立の馬車よて往く者多し定めて此は瀛車杯の始よりさる以前に倫敦より衆人の出懸けたる頃の有様を今日まで存し居る者を見ゆ其馬車も通例の馬車とは違ひ倫敦よて田舎行用ゆる大なる長馬車なり之を大勢乗込

さて日傘をさし喇叭など吹鳴らして威勢よく馳せるとなり其喇叭は多くは厚紙杯にて製たる者にて競馬所の近處の露店などにて之を賣り居れり恰も日本の開帳の時厚紙杯にて可樂なる面を造り或は喇叭杯造りて此を見物人を買ると善く相似たる有様なり隨途にて男女共多く此喇叭を買ひ之を車中にて吹鳴らしつゝ、復は威勢よく返るとなり最も中よと兵の喇叭あるやも知れざとも先づ見ろけたる所にては此の如し田舎路を丈夫なる大馬車にて往來するとなれば大抵車中の人は砂塵にて其肩の邊眞白は見ゆるも鮮からせ左りながら何か勇まし氣は思はる、者なり流車のなき時代こそ兎も角も今日は一時間經つたか經たぬも通ふ鐵道の有者を矢張以前の如き大馬車を仕立て、競馬も趣くおんどは誠お面白き人情なり英國の競馬も恰も日本の祭禮と云ふべき様子あり彼地の人と全体の職務も勉強することも日本人より劇しき代りも又種々ある慰物物を設け餘念なく心を樂ましむるとも日本人より劇しきが如し

●問 其のホルヒールレースと稱する大競馬の時其近邊の賑やかさの模様は如何

●答 前記する如く競馬所周囲のみならず其近邊の野原一体に種々様々の觀せ物慰み物あり其中にて日本の開帳おどの時と之れおき種類ある者もあり又同様ある者もあり今や彼

地の人の如何なる慰を遊ぶやを下に略記すべし

第一ラムチ氷水とも名づくべき種類の店澤山あり又慰み物の中より歐羅巴の真似事ありて其仕方は見物人の所より十四五間隔て、一本の柱を立て其上に長さ二三間なる十文字の棒を置き其棒の四隅に人造の鳥をつけ鳥の背はガラスの空球を結びつけあり其持主が繩を引く時柱の上なる十文字の棒はキリキリと廻はり廻はり隨て其端に附きたる鳥も恰も自ら翔けるが如くは其柱の周圍を飛び廻るを見物人は此方より狙ひ射るとなり若し射中すれば鳥背のガラス球ピンと碎け落つるあり日本を出しより久しく銃を手よせざりしかは餘り左右の人のなき折を幸ひ一發之を試みたりまゝ其裝藥の強さよと驚きたり殆んど是が爲に肩を突き仰けらる、程の心地したり蓋し彼地の人は一休強藥を撃つ者と見へ斯る慰の射的あさへ此の如き強藥を装ひるゝ驚くへきとあり又此外も恰も日本の室内射的場シューティングレンジの如く小銃にて遠方の棒を垂下げあるガラス徳利を撃たしむる處あり此れも見物人の手元より十間ばかり隔て大なる柱を立て此より長二間計の棒を横一文字に五ツ六ツも段々に結びつけ其一ツの棒毎にビールの空徳利の二十ばかりも垂下げあり斯く棒毎に二十宛もある事あれば其數に至て多しく一寸眺むればビール徳利が竹棒となりたる如き有様なり此ビール徳利を目懸け射撃



するよて銃丸の中たる時の美事ふ其の空徳利を立割りホロリくと落とすとあれバ詰らぬとあがら甚だ面白く見ゆるあり又此外多き者之抛球なり其法は十間ばかり隔て、杭の上にも丸を載せ置き之を此方より球を投て墜落す事なり是之最も容易き者と見ゆて處々此設あり其他三四間隔て、可笑ある人形を造り置き此方より木の丸にて其人形を敲き墜し墜落す様を仕懸て先年日本にて行これし玉を打落す趣向の元祖あるべしと思へる又此女弓の感みもあり是も見物人の手元より十間内外の所は一坪ばかりある大的を置き此方よりして射中るとあり其弓一種の弓にて大さは殆ど日本の弓程なり但し少し短き様も思はれたり矢も畧等しきなれども竹より木なりと覺ゆ去りあから其の餘り重過ぎず輕過ぎざる工合如何なる竹同様善く出来居れり其群衆ともが我こそ命中せんと競ふて的を射る景色を見るも恰も日本人が揚弓を射る如く右の眼も右の手を著け狙ひ居る者多し左れば一本迎も十分の力を得て的迄直行し得る矢は少く多くは其前にて墜が故之を避けんため又之度をうけて射るを以て其矢はヒユウと虹霓形に飛行く者のみあり餘り可笑さば堪ぬざりければ詮なき事とは思ひしかども其所に立寄りて二々手三手射たりしは幸ひよして三四本は彼大的も容易く中りければ傍の者どもよて頻り感賞せられたるは我ながら

可笑く覺ゆ其儘其所を立去りしが長居せば小熟練の尾の露はれんことを恐れてあり昔々英人は非常な弓術の巧みありし者あて大陸諸國の兵と戦ふ時常に弓を以て敵を敗りし程の名手多かりしあり故に英國の弓は長きも稍や日本の弓より近かく他の西洋諸國の弓より大ありしを用ゐたるあて左れば其以前に那須與市に比し手鍛練も彼國よりは多かりしなるべしと理料の學問極めて微力ある者も能く數百歩の遠さへ鐵塊を飛ばせて敵を殲すの社會となりしより舊來の長技を失ひ今日めて之慰みよ的を射るさへ不需用千萬ある者のもととなりし世の變遷も亦甚しきありすや

嘗て此大競馬も趣きし時思ひぬ慈悲をなしたるとありき前記したる杭の上も木丸を載せて之を墜落さしめて金を取るの仕組をあす者之概ね極て貧賤にて且つ十五六の子供の之を興行し居る者多し然るも己等の商賣上の事より争起りけるふや十五六の子供兩人攫合を始め互る顔とも云はせ頃とを云てを突合組合各々面部も大疵を負ひ血まふれとありて喧嘩せしが遂に一方は縮み縮み其處に悶絶せし一方は尙ほを容赦なく打擲する有様あり先刻より群集して眺め居る見物人の中より今にも兩人を引分るかと思居たるも一人も進み出づる者なく唯面白氣に眺め居る者のみあれ餘り一方の殘酷を見るも忍び其邊は歩み寄り

て腹中より二三志の金を取出去是を一方の勝たる者も與へ余が此金を與るが故に汝等の争ひを止むべし若し余が命を用るべしと巡査を連れ來るべしと言ひしよて其争を辛じて息たりしが余等の争を止むると間もなく群集中より一二の老人の身元よく見ゆる人々出來りて余等と共に其争を止めたるをありしが既に其時一方は半死半生の体なり其後は如何をりしや余等も打撃て、歸路も着きたりし

●問 西洋諸國の新聞紙の体裁互に相同じきや又日本の新聞紙との異同の如何

●答 英、佛、伊、曼等の國々よて其体裁の同きあり又異なるもあり今や諸國の相異なる箇條一二を畧述せん英國よては雜誌類の外毎日發兌の新聞紙よては十の八九までは概して小説を掲ぐる者あり然るは佛國伊國よ至れば其國は大勢力ある一二の新聞紙を始とし其以下に至るまで日々發兌の者も皆小説を載せざる者なし是れ英佛伊の著るべき相異なる所以なり英佛共一二を争ふ國柄あるは如何ふしてか新聞紙に斯其相違あるやは甚だ解し難き事なり去りながら余等の想像よては英人は全体に不風流なると且つ其國非常の繁昌をて物事忙はしきとの爲めに其新聞紙上も慰み類なる閑散の事柄は幾んど掲げかねるの風をあらしたる者と覺ゆ之を反して佛國の如きは文學の風韻あると英國は優れるが上

歐洲第一繁華の地とは云ひながら凡百の業務の忙はしく多端あるとは稍々英國よ一步を譲るの有様なきありき此等の異同より兩國の新聞紙は此の如き相違を生じたる者ありきやと思はる又伊國と英佛二諸國との新聞紙の相違を云はば其新聞紙は大抵小説を掲ぐることを佛蘭西と同様なれども唯佛蘭西は異なる所は伊國よて毎日發兌の輸入新聞ある一事なり英佛二國よては雜誌類は輸入のものあれども毎日發兌の輸入新聞之れなしと云ふて可なり英國て勿論の事ながら佛國も亦然るべき勢力ある毎日發兌の輸入新聞は見懸けざりま様も覺ゆるあり伊國の分とても固より毎日發兌の事あれば其書圖など先づ高尙あらざる方よて其書圖の精巧に至つては毎週發兌の雜誌の方に路を取らるゝと云の有様あり蓋し伊國は英佛二國よ此すれば業務も多端ならせして一体の事柄に閑暇多く又た書圖なる故に人心も稍や都び居るよりして遂に此の如き新聞紙の体裁を生せし者ありと見ゆ我報知新聞の如きも半ば佛國伊國の新聞の体よ同じからしめたる者ありして日本の舊國あると其國人も文學の風韻あると事務事業の英、米、二國の如く繁忙多端からばして記載すべき事柄の世間よ少きを察し筆を佛、伊、二國の体を交る方然るべしとの相談よて遂に今日のことと体裁をばあせし事なり然れば若英、米、の新聞のみを見て世界よて新聞と云はる者は皆此の如

しと思ひ其方より反する者と新聞の仲間外をなし居る如く者へらる、者あらんは是れ大ら誤れる者と云ふべし

又記事の上より云ふも英、佛、諸國の新聞の特は日本も異なる所の點て其紙面は外國種の都合多くして又世間の耳目の是も集まるの一事なり尤も歐洲諸國は電報電信の便宜の快利にして彼我の交通非常容易頻繁なれば各國間の出來事と皆其利害甚だ已れは切實あるの故も由る事あれども全体も讀者の眼界甚だ廣くして新聞も亦之は應じ世界の事を泄さず一纏めは其紙上は載はると云ふの舊習常も見居れり左れと彼の新聞よりは外國のことも常は殆ど内國の事の如く讀者は感せしむるの便利あるを以て然るは日本よりは日本以外の事ならんよと最早新聞の種の中へは入らざる者の如く思ひ等閑は讀過する者鮮あからむ是れ全く外國交通の日尙は淺きが故なるへけれども行くく我日本の新聞も世界中の千一分の一も當らざる小き國內の事のみを心を留めしめて真正の世界のことを紙面に載せ大切なる大体の事は目を注げる様自然に成行すべきなり又た斯く成行かねばならぬ必要ある者なや何となれば今や英領濠洲、あて石決明板屋貝の柱等の産出盛大は赴かば支那の得意は悉く之を奪れて我國の取引は立どころ衰ふべし又亞米利加のテキサス近傍にて盡力

し居る桑の景況次第にては我國の生糸も大なる響を蒙るべし日耳曼地方にて廉さヒールの製造場を生せば我國の商賈人は爲に無敵の損得を受くるに至るべし一事一物我國の相手と外國に在るの世の中お立ちながら外國時々の接縁を知らせしめ事の濟むべき道理を決してあられまじき譯なり將た斯る經濟上の問題のみあらまを學術はあれ兵事もあれ何一つとして外國の事變に差響を受けざる者のあらざる時節は新聞紙上も唯た我々國內の事柄だけを載せて獨り是れのみ眺め居ると實も不覺の極と云ふべし然れと我邦の新聞紙は是非一度は日本國內の事柄のみを寫し出す小鏡はあらずして全世界の事變を洩れなく寫し出す一面の大鏡とあるを期せざるべうらむ目下日本の新聞紙と英佛の新聞紙とを比較し重なる相違の點を求めは先づ茲にありと云ふも可なり

●問 伊太利は御越しして風俗始め其他英國と相違ある箇條は意外の者なりや

●答 先づ八種より總ての事に至るまで英國と異なる者の眼に觸る、と多き中も日常の細事と云ふて、先づパンの形杯の違ひ居る事第一は目も留まれり尤も伊國よても英國風や佛國風のパンも之ある事あが通例多く食卓に現はる、と特は伊國に限りたる一種のパンあり其形は小指或は食指位の大きき一尺ばうりの棒の如くおしむる者にして之を五六

本一把とあし英、佛、等にて通常のパンを置く如く客の左方より持來り置く事なり此異体なるパンの様と甚だ珍しく覺へたり英人佛人等と談話して言伊國の事及ぶときハ直ちに此のパンの事を語つて出たると多し然れば右ハ余等のみよわらむ英佛の人をとも珍らした事と見ゆ此小枝の如きパンをばくくとし宛食らふ事なり又た其次は伊國製の葡萄酒を盛りたる徳利の甚だ異体あるとなり其形を恰も日本の一輪挿ある花瓶の底の方丸く口の方細長く直立せる者と略ぼ相似たる姿ありて但た其物質を勿論ガラスにて之を造れり其ガラスと極めて薄手のものにして碎れ易きが故にや蓋の類を以て奇麗は此徳利の口より以下の全身を巻き掩ひ徳利の底より其の割れざる様同しく蓋にて圓座の如き物を造り添わり其の全身を蓋にて巻き立てたる体と恰も薩摩の泡盛徳利の如く甚古雅に見ゆる物にまて如何にぞ英佛杯にて斯る古風ある徳利をば見懸る事ハ出来ざるあり右の徳利の大きさ二三合入りの方と見ゆ又其の他食料より云は、同國にては彼のマカロニーと稱ふる一種の素麵(温麵)と云ふも可あるべし(一)の夥しき一事なり此のマカロニーと恰も日本の温麵素麵と同様なる姿にて又物質もへ同様ある如く見ゆ但し其風味に至ては日本の温麵素麵よりは少しく味の濃かあるかと覺ゆ蓋し此は温麵粉の外も又何う一種の交せ物にてあるやと思へる通

例他の諸國の料理にて時々用ゐる所のマカロニーと重むる伊國より輸入せる者なり則ち伊國之其本家だけありて其國人の此素麵を嗜むと非常なるもの驚きたり朝晩の食卓に此マカロニーの出であらざる事ハ少く程にて初めの中こそ珍らしく賞翫したれ後々ハ少しく難澁せる計り頻々現われ出来れり右のマカロニーの本とさ者も至ては恰も日本の温麵の大きさにて唯た其異なる所を管の如く中心には穴の明き居る一事あり又素麵の如く穴無くして線(細)のさ者もわり黄色赤色等の色を着色する者もあり伊國の小都邑を通行する時此の種々のマカロニーの澤山店頭並べあるを見るとなり同國より之を輸出する類は夥しき者にて一昨年伊國よりコレラ病の流行せし時英佛諸國にて此のマカロニーを伊國よりコレラを持込の種子ありとて其注文を減少したる爲め伊國の製造者仲間大なる響を蒙りたりとの評判さへありし程の事あり此外飲食の上にての行儀を都べて皆を英佛杯と略し同様にて著しき相違の所も見されども唯其料理は全体に粘厚さ方にて何品も限らず油濃き者多くなすとなれば從て其油を多く用ゐる事なりと云へり英國も此すれば佛國の料理は概して重くられたる旨味多き方なるが伊國の料理ハ佛國を超へて更らふ尙一層重くれて油強しと云ふべ

し全体は其味濃かよして油強き方より順序を立れば伊國の料理と第一とし其次は佛國其次は曼國其次は英國なりと云ふべし又淡泊よして油少なき方より云て、此順序を遵まにして英國を第一と爲すも可あり尤も何れの國とも重なる料理屋の佛國を學ぶ事よて其料理人小使さへも出稼の佛人を雇ひ入る、者多ければ右て全体は其國の料理を區別したる者と知るべし

●問 日本よて洋服を着たる人を見るよ其外套(英語よてオーバー、コート)の形と種よして或て何も飾りなくして其長さ膝切りのものあり或て襟、袖口、等よ毛皮杯を飾り付け其丈も少し長さあり或は又た全軀の地の厚くして裾と足の踵よ届く程長く腰の邊りよ帶、鞆の類を着けて引き締めるやうな爲し居るものあり右て彼地も同様ありや如何

●答 外套の形の國よめて種々流行の相違ある様よ見受けたり先づ英國倫敦を以て申さば此の二三年は襟、袖口、共よ少しも飾りなく又其丈も膝切り有るか無しのものを用ふると通例よして決して他の形のものあり故よ偶々余等が寒氣を防く爲めよ異軀あるものを造り之を着けて外出する時何か類りに人よ見らる、如き心地すると多かりしなり尤も稀れ他形の外套を着け居る者も見掛ると乍ら能く注意するよ其骨格容貌多くの他國の人よして

英人よて非モ然れば近來兩三年倫敦よて通例の外套の形と先づ前記せる如く種めて飾りなきマフリとしたるものよて其の流行も飾り多く變りたるを少しと申すことを英人より承りたり

倫敦と日本よ比すれば夏の季節短くして冬の季節長く全半ヶ年は唯た寒き氣候よて其餘の半ヶ年を春、夏、秋よ分ち居る有様なれば外套を着けざる季節は甚だ少く少し寒を恐る、の八て一年中僅か二三ヶ月を除く外八九ヶ月間を常よ之を着け居るとあり斯く冬の長さ代りお倫敦と常よ露深くして歐洲大陸の諸國に比すれば寒氣の稍や輕さ方よて先づ東京の寒氣より強て甚たしとは覺へざる程あり英人の氣丈なるとは寒中外出するよも一向に襟巻を用ふる者あく凍々たる寒風の中に襟に飾りもなき外套を着け乍ら喉の邊りよ頬頰をひき出しにしサツ／＼と歩き居るとあり然れば此間よ立ち獨り襟巻杯を爲す時は何う人より目を注げて可笑しく思てる、の有様あきよ非き又婦人の外と襟巻を爲す者あきよ男子の獨り之を爲し居るも何やら元氣あく思はれんかと取かしよ余等か如きも寒中よも大抵頸の邊りをばひき出しよて外出せるとなり男子が襟巻を爲すよ肩弱げに見ゆるやあ之を避ると理窟の事よから婦人よソレよも及ぶ間敷と思はる、よ中以下の婦人は冬分外出するよ襟巻を

用ひせして其の鼻端きを眞赤よしながらサツカと歩き居る者頗る多し尤も年老ひたる婦人  
 之多し襟巻を爲し居れり然れば若き婦人之一の其品を作す襟巻を爲さざることを見ゆるなげ  
 若き男子の襟巻を爲さざるも一之此の邊の意味より生ぜざるもあるべき歟又老年の人は男  
 子と雖も襟巻を爲し居る者を稀よに見受けれどソレすらも通例と小さき襟巻を用ふるも  
 て日本人の用ふる如き大なる物と極て罕れなり但し右に述べる所は都て中以下を云ふとよて  
 上等の人とて出入共に手馬車を用ひ居るとなれば車の四方をさへ縮むれば寒氣を恐るゝよ  
 る及ばせ然れば是等と格別のとと知るべし去り乍ら極寒ならぬ時公園杯を驅り行く人を見  
 るよ母衣を開き或ハ箱馬車の戸を開きたる儘めて寒風吹かれ乍ら頸の邊を暴らし居る  
 人甚だ多きとなり之を概するよ英人と平生より行儀至て厳しく幼少の時より暑寒よ其  
 身軀を崩さざる様方正なる行儀の範圍中よ生育され遂ふ其の性を成せる者と云て可なり嗚  
 本の社會の何事も不極りよして士君子淑女共よ幼少より暑寒堪ゆる行儀の規則なく其身  
 軀を柔弱よ爲し居る者と相此すれば實よ大なる相違ゆるよ思ひ付きたり  
 又夏分傘をさし日を除ける婦人のよ限るとよて婦人なれば歩行するも皆な蝙蝠傘を開  
 き居れり然れども市街中よて如何よ暑ければとて決して男子の傘を開き居るものなきハ不

思議なり孰れも皆を照り付けの馬車杯に乗るや乍ら平氣よ澄まし居る者多し余等の如きも既  
 よ斯る國風中に交はれば獨り傘を開くも何とやら柔弱らしく其儘よて歩行すると多し尤も  
 日本の如く暑氣は甚だしからぬとあれハ先づ耐へ難き程よハ非を去り乍ら余等の身に取て  
 ハ随分傘を開きよ思ふ時も甚だ少からぬとなり曾て此の事ハ英國よて聞合せたるよ傘  
 の一事は左して禮法の中よハ入れ居らぬ積りよて少し田舎ハ旅行する時杯ハ英人も皆な襟  
 巻を傘を開きて日を避くるとあり左迄規則嚴びしき譯よハ非を去り乍ら倫敦市街中よては實  
 よ申合せたる如く殆んど一人の傘を開きて日を避くる者なし  
 又男子の外套の色ハ通例無地よて縞物とゆなし其無地の色は縹々あれども先づ焦げ茶、  
 薄鼠、黒杯も少からぬ唯た赤ハ勿論薄縹黃類と甚だ少きとあり去り乍ら右は唯た市街を  
 往來するの時の外套を云ふとよて少し旅行よても爲さんとし田舎杯よ赴く時よハ縞物杯の  
 長く履よ至る程の外套を用ふる者少からぬ故に流行の外套と平日の外套とは全く其趣きを  
 異よすと云て可あり又巴里杯の二三年の外套の有様を申せば種々の流行もあるとあらんが  
 先づ通例と前記せる英國と同様よて二三年の處に襟、袖口、よ飾りなくスワリとしゆる短き  
 物多し一ト口よ云ふば英國の外套の都て上品ある方を用ひと云て可あり去り乍ら同地に

ては襟、袖口、は毛皮杯を用ひたるを着けし人をも間々見受る様も是れより北のうた日  
即曼杯に至れば寒中より用ふる外套は特別に長く厚く英國とは全く其趣きを異せし是れ寒  
氣の殊あ甚だしきが故なるべし又魯國杯の摸樣を聞き合すれば寒氣強きがゆゑに外套の制  
も亦之に應ずる様も益々厚く長くして毛皮杯を多く用ひ居れりと云ふ然れば先づ氣候の寒  
温は因て國々の相違ありと云て可なり

●問 伊太利の衣服寮屋等も付異りたる風俗を承り度し

●答 衣服などの有様より云は、伊國の首府ある羅馬或は是より次べきフロレンス杯之格  
別あれども其の小都府に至れば衣服の風の甚だ面白き者多し先づ第一旅客の目も留まるは  
日本にて坊主合羽或は廻合羽とも名くべき合羽の裾は足の踵も届く程の長さ者を着け右  
の腕を合羽の外に合せ目の處より出し其右なる長さ裾をば、ハタリと左の肩より打掛け居る事  
恰も袈裟を斜に掛けたる如し則ち左の方の方合羽の形より、一面は垂れて踵に至り右  
の方の右の腕を露し之を斜に胸より左の肩より纏ひ居れり然して其頭は、鯉きたる如く縁の廣  
くして軟やかあつ高き帽子の上を一の字形の中より折込みたる者あり（明治七八年頃まで日  
本にて少し流行せり必し讀者と記應せらるべし）此帽子を少し斜に打冠ふり彼の長さ廻合

羽を袈裟掛けし細長き巻煙草を薫らしつゝ、カフナー店の門口の柱に斜に立居るは是れ伊  
國田舎の若者の一寸意氣なる所と云ふべし余輩の眼より見れば恰も中世の歐羅巴に至りし  
心地して當時の歴史上の事どもを思ひ出さしむるの種とある者あり又西班牙杯も右の長さ  
廻合羽と畧同じき者を着け居る由あれば是の裝束を一体は其昔羅甸人種の國々も行はれた  
りし遺俗ありと見ゆ伊國の巻煙草は其丸さで英佛諸國のよりも甚だ細やかよて長さとも殆  
ど此より倍せり而して巻煙草の口元より中心に極小なる管の如き者を通しあり是を抜きて吸  
ふ様は爲したり全体は同國の烟草と甚だ強く辛き方の様に覺ゆ

伊太利の諸小都府は殆ど日即曼の諸小都府と同様にて衣服帽子の有様も種々様々なり丸帽  
子を冠り居る者あり高帽子を冠り居る者あり誠は不極の有様あり又羅馬の如き首府を以て  
云は、高帽子を冠り居る者も先づ身元ある人のみよて通例と種々の低き丸帽子を戴き居る  
者多し又倫敦などよて、マンチン及びチムツキと黒の色類よて、メボンのと縞物を着け居る  
が通例よして先づ縞縹紗などよて田舎行きや或は極打解けたる時かのみ外の之を着るとなき  
ふ羅馬などよてと縞縹紗の服を着けて往來し居る者も澤山は見懸けたり又人種上より云て  
恰も英國の茶色の毛多く黒色の毛少なき割合程伊國よて黒色の毛ある者澤山よて赤茶色

の毛て先づ少なき方あり倫敦を以て黒髪こくぱつの日本人杯うしやうの背影せいかげを眺ながむれば著しく目立つ事あるが羅馬等ろまては黒色の毛ある人多きが故も日本人杯も左まで目立たざる様の心地せり又其面貌かほづかを云て伊國人は日本人あとの風韻ふういんにて極く適する方にて英人に比すれば佛人の顔かほ之キユツと引縮りて意氣いきなる方あるが佛人は此こは伊人の方は尙一層引縮りて意氣いきみ見ゆる者多し又其顔色かほいろは淡紅たんこうの者（英人の如し）鮮あざなく寧ろたい白しろき方あり

又家屋かみやの有様ありさまは一体諸都府しよとふ共に英佛二國にこくを比すれば古びたる方にて其建築けんちくの模樣もよう体裁たいがいは先づ似寄にやりたる者なり唯た英佛諸都府しよとふの中古の建築風けんちくふうより漸々しんじや進歩して種々の材料物質ざいりよくぶつしつを煉瓦れんが造り又た遠方とんぱうのものをも隨意ずいい運送うんそうし得る今日の事ことを昔むかししと木材もくざいを用ゐし所ところも今日けふの鉄てつ或は石いしを用ゐると云ふ傾かたきよて万事ばんじ輕便けいべんと趣おもむくと云へる勢いきほなるは伊國の諸都府しよとふに至り見ればそれ迄いたは進歩しんぱし得せして是は尙は中古の建築風けんちくふうをなま居る者ありと思はしむるの有様あり例へば屋根瓦やねがわの如きも尙石瓦いしがわを用ゐず去て多く赤色の煉瓦れんがの粗末そまつなるを用ゐ且つ其屋根の勾かまひ排格はいかく好このまで依然いぜん中古の畫圖えずを見る如き心地せしむる事多し又中古の建物の其體たいも存ぞんじたる間まは其家の壁かべも馬鹿ばかげて厚あつく丈夫ぢゆうぶあると實まことに人を驚おどかす程ほどの事あり今日けふては不要ふたふたの處ところ下手へた念ねんを入れて無用むよう物質ぶつしつを費つやし使つかふ事ことをば爲なさず諸事しよじ萬端ばんたん

唯た其の入用いりようある處ところまで限りて切り詰つを煎せんし詰めて都みやこてキョウウきやううと置おく出來きするは昔むかしし物は昔むかしし物程ほど無駄むだ念ねんを入れ無用むようれ場所ばしょに材物料質ざいりよくぶつしつを費つしゆるは何れの國も同様どうがうめて則ち伊太利いだいりの諸都府しよとふては是こゝ類いする事共ことを夥おほしく其の建築上けんちくじやうに見みかけたや又昔むかししは其府内しよちゆうの市場いちばも用もちひたりし者と見え小都府せうとふの中ちゆうは必かならずに二ヶ所にヶしよ大なる廣小路ひろこぢの如ごとき空地くうちあり處ところも因よりて現いまる猶なほは府民しよちゆうが茲こゝ集あり色々の市いちを立て居るをも見受みうけたり又其府内しよちゆうの諸街路しよけいぢは概おほして狹隘けうがいあるか上例じやうれいの如ごとき悉ことごとく石邊いしへをあしあり故ゆゑに車くるまにて馳はする度毎たびに甚おほだ繁昌はんぢやうする事あり伊國の諸都府しよとふて用もちひる定時馬車ていじばしや乗合馬車のりあひばしや等ら先づ通例つうれい佛國ふつこくと同様どうがうあり

●問 英國えいこくにては日本にっぽんにて稱なづする鳥屋とりやの類いれありや

●答 鳥類とりるいを賣うる店みせと鳥類専門とりるいせんもんの者ものあり然れども通例つうれいは魚屋いしやと鳥屋とりやと兼帶けんたいなる店みせ多し店の通例つうれいの處ところは魚いしを並ならべ置おきて其上そのうへの方かたは鳥とりをフア下くだげある者ものを通例つうれいとを

●問 鳥の種類しゆるいと如何いか

●答 第一だいいち多おほき者は鶏けい第二だいに鴨あひ第三だいに雁かり畜ちくひ立たたる雁かり日本にっぽんはあししの類いあり右の諸鳥しよとりと何れも日本にっぽんの物ものと同じとあがら鶏けいあとの如ごとき大抵おほ日本にっぽんの者ものより幾分いくぶん大なる方多おほく先づ軍鶏しよけいと尋常じんじやうの鶏けいとの合あの子位こゝろ見みゆ一羽ひとの價ねと通例つうれい二三にさん志しの間まと云いて可べなり(五



十錢より七十錢までの間（又鴨の類之四五志の間）一圓より一圓廿錢内外の處（よして鷄も前記せる鷄と同様に日本もの者より少し大なり京都邊にて畜ふ所の一種の大なる鴨よりも更らゝ大なる様覺ゆる併し先づ鴨は通例日本の鴨と同様に稍や似寄りたり其外ふ鷄鳥とか家雁との稱ふべき一種の大なる鳥あり其大さと殆んど鷄鳥と同じき者少からせ左りながら其の毛色容子と總て野雁と同様に察するも其初めは野雁ありし者を久しく畜馴れ其子孫が即ち今の家雁とありし者あるべし鷄鳥は其嘴、鼻の處ふ凸肉ありて面を蔽り居る如く見ゆると通例あるも右の家雁も此の如き凸肉なく一切ヒシツヒと稱ふる野雁と善く相育たゞ然れば其以前は野生の者を漸々畜ふたて、一種の物となしたることは疑無さが如し此等諸鳥の共進會、博覽會杯に赴て見物するに右の家雁の種類は實に非常なる大物ありて其中は首の眞中を手にて握り廻されぬ程も大なる者多し又此家雁の外は眞の鷄鳥をも賣り居れり又七面鳥をも賣居れり七面鳥杯之價甚だ高き方あり日本にて云はゞ年始歳暮を兼ねたる祝日とも云ふべき夫の歳末のクリスマスの大祝日には何れの家も皆な右の家鴈、鷄鳥を料理する事慣例あるが如く見ゆ故に此頃に至れば其價殆んど平常より四五割を引上ぐるあり又冬期は野生の鴨を賣り居るも多く通例日本の鴨の種類に異あらざ

又日本の者と全く異なる鳥類あり即ち彼地にては（鶉）と云ふ總名を附し居る者種々あり如何ある之を類別すれば鶉の屬なれども其大小は色々同じからせ日本の如く小さき鶉も稀には見懸る事あがり英和字書あんどにて鶉と云へる譯字を下しある彼地の鳥は鶉の屬中にて甚だ大なる者なり即ち其の大きさは殆んど雉子と鳩との間位ありて其姿は先づ鶉あれども全体に逞しき者あり又其の毛色は黒みか、りて赤き雞冠様の如きものを戴き居る類もあり此等は日本には無ふして彼地には多く人の好んで銃獵する所の者あり雉子、を多く鳥屋は下がり居る者なるが此も二種ありて其一は日本の雉子と略は同様ある者あり他の一種は日本の雉子よりも一層奇麗なる者ありて先づ日本の山鳥と雉子との合の子の如く見ゆ其脊中には通例の雉子の如くありて頭より胸までは黒けれども其の胸前より腹一面にかけては山鳥の如く金色の毛生たり（日本は雉子は此胸より腹の邊は一面は唯た黒き毛生たゞ）又此雉子の中ふ白き首環の入り居る者あり此等も日本にては見かけざる一あり

●問 鳥類の風味の如何

●答 鷄、家鴈、等全体の家禽を云はゞ其の風味は無論淡泊なる方にて旨味なくシバくする心持せゞ偶々日本人あどが打寄りて之を日本料理に用ふるも常々旨味少あしとの小言を

聞くまで右と醬料の如何よ由る者ある乎或は西洋人が好んで此淡泊なる所を賞翫する譯ある乎兎も角日本の料理は用ゐる時何か旨味の足らぬ様は覺ゆるあり因て余等と後々は日本料理は斯る家禽を買入るを見合せ野生の鴨を買來て之を料理せし事あり人為の働の加へりし家禽類こそ色々の變化をも受けたるべけれ天然の儘の野生の者は日本と同じうるべしと想像せしが果して其理窟と見へ眞鴨其他野生の鴨類は先づ日本の味を感じたる事あり又鶉杯の如きも銃獵よて之を獲るよ日本の如く天然の儘の山野よ天然の儘よ鳥の栖み居るところ殆ど英國中通例の處よては之をささものと見へ銃獵の爲め別段よ鳥の種を畜立る由あり皇族、貴族、金満家の如きと銘々己れの銃獵地面を所有し平生より其中よ鶉、雉子、あんどの類を畜立て置た獵時節よ至て茲よ出懸る事あり又其外に商買の爲めよ銃獵地面を所有し一日何程との條約にて銃獵人よ之を貸渡す者あり然れば前記せる雉子、鶉、の如きは皆日本の如く純然たる野生の者よあらせして半と畜立てあるが如き姿あり然る故もある間敷が鶉なんどを日本風の燒鳥よ料理するよ其味の淡泊よて旨味なき事殆んど鶉、家雁、と同様あり蘇蘭の極北の地方或は愛蘭の邊鄙はいさ知のす通例の場所あらんよと英國中よ殆んど開け盡して如何もも鐵砲杯を携へ出懸けるも容易に鳥類を見當るまじと思はる、程の有様あり

是れ一と其國の平野よして處々よ少しの丘陵あるのみよて日本の如く險しき山岳少く禽獸の栖所多かりざるが故も由るべしと思へる

●問 伊國羅馬府の有様は如何

●答 羅馬は二千年來の古跡にて西史を讀む者の皆を何となく昔しなつかしく想ふ處あり余等の如きも日本よ在りま頃平素羅馬史を翻閱して古羅馬人が歐洲全土を一統を居たる時の事あどを追念し其の模様を斯くあやしあらん杯と想像し居たるよ久まかりしかは一たび吾脚を其境よ着くるよ及てハ實は懐古の情よ耐へま余もフロレンスより夜汽車よ乗込み羅馬府を指して出發したりしよ未明にハ既に羅馬府の近傍よ馳せ着たり車中の小使が戸を開て最早羅馬府よ近づきたまよとの聲に眠を驚かされ俄よ衣服を更めて先づ汽車の窓より其邊の景色を打眺めたる事のりしが此日は細雨霏々として降りしめり太と穩やかなる初夏の天氣なりければ斯の煙霧蒼朦たる中よ左まで險しうらざる遠山の餘かよウチれる波の如く遙る西北よ横はるを見たり是れ即ち彼の古羅馬人と爭ふたるサピチ人種の棲みま地方よて余も地圖を案じ扱は彼處ありけりと思ひたり

既にして羅馬府よ近づけば彼の有名なる古水道の恰も無限の長橋の如く蜿蜒として平野よ

奔れるを見たり是れ則ち二千年前の遺物にして日本よりは似たりたる土工なきが故に類を以て之を此説せん事難けれど先づ通例の日本の長橋の橋柱を煉瓦にて圓形に疊ぎ上げ其上に煉瓦の洞道を幾十町となく直線に續けたる者こそ云ふべけれ兎角する中流車之間も亦く敗頽して苔茂きたる古城壁の間を横切りつ、羅馬府内は到着せり

概して羅馬府の地形を言て、初め余等の想像せし如き險阻なるものにはあらざ先づ一面の平野にて近くは三四里遠きと七八里の間に山勢極めて温藉ある樹脈の遙かる羅馬府の幾分を抱擁し居るあるのみ是れ余等のみならず知らざれども初め羅馬の古史を讀み當時の地形を想像する時と羅馬府の都て險阻なる山嶽を以て立て廻らされたる者の様ある心地し居たりしを斯る平垣ある有様を見て先づ意外の思をあたしたりしが又熟々考れば二千年の間は羅馬府近傍の地勢も相應に際滄山谷の變を經たりし者にして昔の羅馬府と恰も既し土中へ埋もれ盡し今の羅馬府は昔しの羅馬府の天井を基礎として其上に立ち居ると云ふも可ある程あり其証據は市中の片はどりよと幾千年前の古高宅の下部の八分通りと地底に没きて僅かに其上部の一二分の地上に露はれたるを利用して穴居同様其の内を生活し居る貧民も少からざり又地底より掘出したる古建物の圓柱杯と概ね皆な其の頂き今の家屋の土臺より下にあり

る者多し羅馬府の人口を概ね十万人内外にて市街の建物を全体に古びたる者多し左れども亦た中古建築の模型を存し甚だ丈夫に見ゆる者も少なからず今の王室が伊國一統の功を奏し十五年前茲を以て其の首府とあせし迄に此地に唯だ羅馬法王を参拜し世界第一と稱するカズリツク教の本山寺院あるサンマートンも参詣せんとて輻湊する所の信徒並に此地の名所古跡を探が爲めは接踵來遊する所の旅客の二者を相手し全府の活計を立て居たる者あり

市中に驚く所の品物も皆是等の外國人の本國を持歸るべき土産物多く日用品の方こそ左まであらざる様も思はれたり左れば全体に町も狭く之を巴里倫敦と云ふ視ふれば其大小冷熱之固より相比較すべき類はあらざ然れども今の王室が此地を首府と定め去より漸次に市區を改正し新らしき建築杯も起り行々一の繁華ある新都會も變せべき有様あり先づ前記せる人口と此地の沿革の舊來とを察する時は畧は其他の事を推量すると難うらざるべし

●問 引續て羅馬名所の御話を承り度し

●答 巴里倫敦の羅馬府も及ばざる一事は其の名所古跡の多きと是なり左れば余等の逗留中も新らしき繁華の場所へ赴き觀ると少くして暇ある毎に古跡のみ見物せり西史を讀たる日本人杯も取りて第一は珍らしきと彼の二千年前共和政治の始めより王政の始

めも至るまで用ゐたりし古宮殿の跡なり又羅馬史中よりカピトルと書し其節羅馬の本城とも云ひし處よて今日も尚ほ其の上は羅馬の府會議事堂、府廳、など建築しあて其の廣さは二三町四方よて今日よても他の地面より一二丈も高く聳へ居れり前記せる如く今の羅馬府の基礎之昔しの羅馬府の天井の上よ立ち居ることを考ふれば其の昔しの羅馬府の頃よは此本城の地面の餘程市街より高く掘んで要害の區たりし者と察せらる前記の古宮殿は即ち此本城の裏手の麓あり此古宮殿は舊と地面の下よ埋もれ居たりしと中ごろ其土を掘ひ上げて堀り顔としたる者あれば尋常の往來の方遶かよ宮殿の圓柱の頂きよりも高く之を見物する者は皆を往來より一段低くさ地面よ降り行くところあり此の宮殿の趾にて今日よ存し居り認め得べき者て其一部の石臺と三四の圓柱と又其傍ら立てる一箇の凱旋門とのみなり此の石臺ある一區は則ち彼の英雄該撒が志士プラヌス等の爲よ要殺されし所ありと言ひ傳ふ果して信あるや否や數石は都て大理石あて其圓柱の格好風約は亦た實よ美事あるものなり

又此古跡の一方よて四五町四方の小高き丘ありて是は羅馬が帝政よ變じたる以後の皇居の趾ありと云へり丘の地質を都て煉瓦あして其の舊の唯一箇の宮殿なりし者が幾千の年を経る中よ斷次土砂よ埋もれて遂よ今の一堆の丘を成せしよて非ざるやとの思ふ、程の者

なり四方より此地よ遊ふ旅客共が前記せる古宮殿の大理石などを持去る者多く之を制禁せされば終ふ其形を損する迄も至るべきが故よ茲よて伊國政府より出張の番人ありて之を看守するところ余等の如きも何とてかして此の古宮殿の大理石を手よ入れんとせしう左りて番人よ咎められんも面白からば又其の大ある者と持歸るも不便なれば唯よ余か遊覽の印の爲めよもと其邊の大理石の一小片を打缺きて携へ歸れり他日之を彫刻して當時の紀念と爲さんと思ひ居れり

初め其の共和政治の時代よ當て小亞細亞より歐洲を一統して以後羅馬人民よ一体よ奢侈の風を長したりしが故よ其宮殿の圓柱をせも既よ定めて美事あり居しならんとて今日よ存する二三の記述を以て之を想像すべきが其の帝政の始末より中頃よかけては取分けて建築の進歩せしものと見え帝政の頃の神廟の圓柱二三本右の古宮殿の傍よ立居れる其物質よ紫色の大理石よて其割合の宜しさと彫刻の美事あるとの實よ人をして感嘆せしむ

古宮殿より少し隔りて一二の凱旋門あり是を過ぐれば彼の有名なるコロセオと稱ふる闘闘場の古建築あり其狀を畧記すれば圓形の飯櫃の如き者よて其圓形の周圍を始て七八町もあるべく直徑二三町もあるへし其圓形の中央に平場ありて茲よて猛獸を闘せしめ或の奴隸を

して互に決闘せしめ或の人と獸とを闘せしめたる土俵舞臺共云ふへき所あり其の中央の平場より少し高く石を積み上げソレより圓形なりに段々高く數十の階を輪づくり設けあて即ち見物人の席を左れに見物人之中央平場にての決闘を立て廻として上より看下す様おせるものあり而て其外面周圍の地面より幾丈の高さふ直立し居れり又其闘獸場の地底よ穴庫の如き部屋幾個もあり是はかねて猛獸を入置く處にて決闘の時よ並より之を例の平場より引出す様よおしたる者ありと云ふ此の闘獸場の中央と總て廣大ある石を以て積み上げたる者よして其昔しと總て彫刻せる大理石を以て内外共飾り鏤めたる者ありしが中古歐洲戰國の時よ及び羅馬の古物の悉皆零落せし頃羅馬の一侯國の主某が其の宮殿を造らんが爲よ此闘獸場の大理石を過半取り去り唯たソレのみよて一個の大ある宮殿を建築したりと言ひ傳ふ其他亂世の事おれ何者が取るともなしと思ひくよ之を奪ひ去り遂よ今日の如く其中央の骨のみ露殘するよ至りし者と云ふ如何よも以前大理石よて飾りし證據よて今日よても其の或る個處よて尙は一二彫刻大理石の零落しのことよて存し居るを見受けぬり今日よ存せる古羅馬の建築物中よて此の闘獸場こそ則ち古色第一と稱せらる、所にして四方來遊の旅客の昔まを忍ぶ人々は風清月白の夜も乘じ此邊を逍遙して流光の廢墟を照らふを賞す

るも多しと聞けり彼のギツボ氏の羅馬帝政史の英國文藝社會よて有名の一書なるが初め同氏の此よ在る頃一夜月を踏て此の邊よ散策し俯仰低回感念の依々たるよ堪へを乃ち帝政の史を編きて往事を叙述せんとの志を此時よ發したるありと言ひ傳ふ此の闘獸場の寫眞の日本おどよも持歸れる者多ければ時々諸處よて之を見懸し者も少からざるべし其昔しは一たび世界の中心たる各都の間よ立ちて壯嚴偉麗を誇りたる建築が星移り物換りて斯く荒敗せるの有様を念もひ又彼の古宮殿の中よ一たび出入せし該撒。ブルユス。其他の諸豪傑の事を憶もへば轉た懐古の情に耐へを余の逗留中外出さへすれば幾回となく此れ等の古跡のみ訪むたる事なりき

●問 彼地よてホテルと稱ふる旅舎の有様は如何諸國共よ其体裁は同様ありや

●答 通例ホテルと稱ふる旅舎ハ諸國とも其体裁先づ同様と云ふて可あり是よは上中下幾等も階級あり上等の分よ非常よ高價よて下等の分よ又た非常よ廉價あるもあり今や世界第一繁華の地たる巴里よて最上と稱するグランド、ホテルの有様を略記せば其他は推て知るべし右の大ホテルよ五六階の高さよて其間數よて三四百の間なるべし食堂は第一階(即ち尋常の平地に並べる間)よありて食事の時刻よて客人皆な其所よ打揃ひて食事を爲すものと

す又低き程部屋も上等にて二階三階と高くある程其價も廉なり又低き部屋程其天井高く位置の高くあるは従ひ部屋くの天井も亦た低く屋根は密接する最高頂上の部屋杯は日本家の低き天井と殆んど同様あるものあり左れば大ホテルにては其部屋次第にて直段と種々様となす先づ四階位の處にて十五疊内外の一ト間にて一日廿フラン（四圓許り食事と無論一切別あり）あれば其の低き三階二階の部屋くは此より次第高價とあり又天井の方より近づく程従て廉價とある

ホテルに先づ部屋代丈を拂ふを通例とし食事は爲すも爲さざるも客人の自由なや食事の附きある部屋とてハ別段之なし右の大ホテルにて夕飯一食の價ハ八フラン（一圓六十錢許り）なりさと覺ゆ晝飯ハ此の半價内外にて朝飯ハ又之れより廉なり然れども若し三度の食事を悉く食堂にて爲さると多分十一ニフラン（二圓三四十錢許り）にて済むべし尤も右に無論食事のみの代あり又此のホテルの食堂なる者と料理屋と同然ある有様にてホテルに止宿せざる人にては此食堂にて食事を爲し得ると恰も料理屋に行くが如し又食堂にて各種の酒を以て其の注文は従ひ之を持来る尤も酒代の食事の外之を拂ふを以て食事の後、付の給仕は通例廿錢許りの心付を與ふ是等の給仕と總て黒の禮服は白襟を附け一同立派に装ひ居れり

居れり

食堂は最も見事にて身元善き客人あれば夕飯の時と通例黒の禮服（燕尾服）を着けたるもの多し食堂の内より五行或は六行も長さ大食卓ありて銘々此に就くとあるが客人一名食堂に入り来る毎に禮服用の給仕直ち之を案内して其の若く可き席は若かしめ客人は食卓に密着して眞直に立ち居れば彼の案内せる給仕ソツと後方より椅子をめてがい客人は悠然と尻を据れば丁度好きに工合に自然と腰掛らる、なり然れども未だ是等の事を経験あらざる時之茲等の跡のユナシ甚だ不落落にて直は田舎者と見て取らる、あり

又た百名前後の諸國入りまじりの客人が思ひくは食卓に列し居るも其行儀肅然として妄暗は高聲を放ち調子外れの談話を爲す者も無く同行の客人同志互ひお談話を爲すさへ極靜かなる調子にて満堂何となく物柔らかな品よく打上がりて見ゆる程離れ合するとも無く一同の作法行届き居るもの余等の驚き入りたる所なり又た其の料理の風味も甚だ好きとあるが献立お之季節は因りて相違もあり懇煩しければ畧することを然るべし但し朝飯、晝飯、の時杯之男女の客人共夕飯の時程食堂に列する事と意を用ゐざるあり

去りてから食堂に赴かすして自分の部屋に食事を取り寄するとも勝手次第あり然れども部

屋より取り寄する時と其代を一割以上高く取らるゝことあり是は部屋に持運ふ面倒の賃金を、  
拂ふ譯さるへし又一ト品ニタ品を擇ひて注文をするも客人の自由あり

●問 其外ホテルの有様如何

●答 是迄述べたるは何れも巴里のグランド、ホテルと云へる客舎の例を擧げたるを以て  
英、曼、伊諸國のホテル共先づ大体は斯の如し極上等と極下等とを格別とし先づ通例八疊  
或の十疊許りの三階若くは四階ある部屋にて寢臺附の者あれば五フラン又四シルリン  
グ(一圓内外)を通例と云ふ又たモーブルトと稱する夕飯一ト拵の食事にて一圓内外の價格  
を通例とすまやながら場所柄次第にては非常な高價あるあり又非常な廉價あるあり  
又た處よりては部屋の蠟燭代を別取るものあり給仕の召使代を別取るものあり其  
甚したは一本の蠟燭ハーフラン(廿錢許り)を取るものあり余等見て英人、佛人、と路伴とあ  
り其は客舎に投じたる事ありしが其夜種々の物語の序は英人が例のお箱なる國自慢にて英  
國程客舎の便ある國は無しと言ひまゝ佛人にて大に之を笑ひ余が英國のナヤリリン、コロ  
スなる停車場附のホテルに投宿せし時所用ありて小使は一對の書翰を帳簿迄持行しめしよ  
翌日の勘定書を見れば是か爲め廿五錢取られたるものあり實は驚く可き高價なり佛國にて決

して彼様なる事無しと言ひしは英人は負けぬ氣もあり頗る佛國のホテルの高價ある例と  
率て口論し大笑とありしとあり又た或人が米國のホテルにて明日の天氣を氣遣ひ今夜之露  
れ居るや否やを小使に見來らしめたるにアトにて其代を三十錢取られたりと言へる笑話あ  
る程あり實は何事もウカとて命せられず余等が紐育にて食指許りある大さの細繩二三丈を  
買ひ來れと命じたりしは二圓以上を食られたる事あり然れば通常の物品の外は免つ容易よ  
は用る難き方ありと知るべし又英國の大陸案内書中旅客之石輪を必らき用意す可き旨を  
載せ一ト切の石輪にて二三十錢以上を食らるゝは珍しからせとの注意を爲しありしが如何  
よも右様の事甚た多し注意すべきとあり

世事は經驗を積めば積む程巧者になり行く者にて余等の如き氣の利かぬ者迄も國々を經廻  
り旅慣るゝは従ては自然何事も狡猾になり立ち働く傾きとなれり然れば我が懐中の温度よ  
り懐の暖かある時より大盡顔を爲して最上のホテルに泊り込み少しく其冷かなる時ハ面目  
を關せぬ迄を界とし成る可く廉價のホテルに投宿せり今更後來の旅行の爲は一二の傳授を  
筆記し置くべし

外見は体裁好くして實際の經濟なるは上等のホテルに止宿して珈琲店の食事を食ふを第一

とす珈琲店其他料理屋に至れば通例一ト品よても二ト品よても己れ好みの品を擇み多量も少量も自分の欲する丈注文することを得然ればホテルの食堂よて滋味厚味もせよ其時左程欲しからの料理を數多く是非共めてがはれ是は高價の代を拂はんより自分料理店に往きて己れの腹加減よ合ひし隨意の品を食すること便利なれ料理店あれば注文次第に我ら欲しき品を一品あり二品あり擇て食することも出来従て其の價も甚た廉あり又外國人、同國人よ對して己の宿所を名のり或は來客杯ある節も上等のホテルなれば面目も甚た宜く萬事よ都合あり故よ好きホテルの相應の部屋よ投じて料理屋の食事を爲すは甚た便利ある法あり不案内の人は之よ反し食事をば其ホテルよて爲し却て部屋をば頂上よ近き極廉ある所よ定むる者も尠なから是は餘り感心せぬ仕方あり

●問 然れば先づ經濟上々々云は、ホテルの食堂よて出でぬ方なりや

●答 然り、然れとも言辭も全く通せざる國よ至りま時杯はホテルの食堂なれば黙し居りて出す丈の物は持來るか故無造作あり在るよ若し料理屋杯よ行きまるとて運來る料理の名もメニューは分らず樹立を知ら難くハ出來難ければ斯る場合及び婦人連の旅客杯は餘儀無くもホテルよて食事を爲さねばなり是然りながら余等とても英語の外は佛語をて伊語あり曼語

あり僅かよ十五り二十位の外の解し得ざる身ありしうとも猶は大膽よコマカして時々は料理店よマクれ込ミ食事を爲またることあり萬事よ敏捷ある歐洲人の事ゆゑ先づ大抵と手眞似よても此方の意味を悟り與る、となり況んや此方も知た振を爲しウとかヤナーとか生靈氣よ其の國語を吐乍ら料理屋の料理の表(日本あれば「板」と云ふ處なり)を大抵よ指も時は給仕等心得て持來るとあり又名品の直段は數字にて記まあるが故よ別よ欺かる、の憂も無き唯た其の國々のマクとかフアンとかの價格と數字とを知り居れば例の表と見合せて充分悟り得べし又料理の名の國々よて無論一樣よこあらねども諸國共に多くは都びたる佛語を用ゐ居るとなれば先づ幾分は悟り得可きあり又英語と曼語との如きと甚た相似たる者多きか上よ其間よ交し居る外國出の詞とては亦た多く佛語なれば日印曼よては余等も料理の献立と大抵間違はぬ方なでしか唯た一度可笑しかりしはケースと書きしものありしを是は英語のケースよ似つかはしければ多分菓子あるへしとて誂へたるよ彼のケースの出て來りしよは閉口したるとあり然れハ折々は斯る間違は出來するを免れませ

開け切でたる故き國々のとあれば歐洲の旅行と何事も痒き所手の届く如くよ順序整ひ居り此上も無く氣樂なるとよして亞米利加杯よ此すれば實に雲泥萬里の相違ありし如し余等



か歐洲旅行中には常々毛布包と手カバン杯の類兩三個を携へ居りしか別々荷と云程もあ  
らねど若し已れ持運ふとすれば隨分厄介なるとあり左れとも旅行中余等と會て此の厄介を  
感したるとあく先つホテルを出立する時は小使か之れをホテル持の馬車に載せ客人と共に  
停車場迄送り來り停車場に着すれば停車場附の荷持人足出て來りて之を受取り客人の乗込  
む汽車の處迄運び呉れ又て荷車も載せ呉れるあり又ライン河の如く風景を旅客の眺むる  
地方まで少し心付を澤山遣てせし彼の荷持人足は此方の窓が景色を見るに宜しとか彼方  
の窓が宜しとか教へ呉れて其處に座を定め占むる世話もさへ爲す者あり扱汽車が留まる所  
に至れば又其停車場の人足出て來りて此方の指圖に従ひ之を其の停車場に客待を爲し居る  
ホテルの車に運び載せ此方へ唯アレコレ指圖するの事にて空手を振りつゝ此も乗込むあり  
又船に乗込む船より下るも皆同様の手續にて自身に荷物を扱ふの面倒を曾て之れ無く  
幾百里の長程を旅行するもを實に自由自在にて何の不便もあらねば又た遠方の旅客と見て  
觀る取る如き無作法を働く徒も少く(決して其徒無きものは非ず)流石は故國は故國なりと其  
萬端の順序の行届きたるを稱したるとあり

●問 有名あるアルプス山の景色は如何

●答 世人の知る如く此の山は佛、伊、兩國の境に起伏して北のかた澳利亞に奔り又た茲に  
澳、伊、二國の境を爲し居るあり古代に於て良將ハンニバルが兵を援きて羅馬を掩撃し來り  
し時此の山脈を越ぬ又た那翁一世が伊太利を侵す時も間行此を越えて不慮に敵の背後を  
掃きたる等にて歴史には有名なる故跡とあり居るとなり人力能く天工を制する第十九世紀  
の今日に生れたる我々は左したる苦勞も無く安々と此の巍峨たる山脈を越すとあから以前  
は定めて一の大難所たりしと相違おしと思はる余は佛境より車に乗り夜を冒して此を越え  
翌朝伊國のトリノと云へる地に着したり佛境の方ある山麓にかゝりしは夜八九時の頃あり  
しが伊境まで平野に降りしに拂曉なりし最も涼車は此の山脈の低き所を彼方此方と廻り廻  
りて行く上は此の山脈の厚さの非常な厚さが故をわれと兎も角斯く時間を費すは以て此  
の山の大有るを察するに足るへし山巔ある伊、佛、兩國の税關にて荷物を改裝し夜半十二  
時の頃ありと覺ゆ、時方さへ四月の初ありしが山上までは處々に積雪の隘々と積り居るを  
見たり昔まハンニバルか阿弗利加より數多の戰象を率ゐ來りしに此を越る時、寒氣に堪へ  
ずして象も多く斃れたりしと云へる虚説はあらまと思ひたり日本は島國の故にや國內  
の山脈は大低馬の脊を立てたる如く上り下りは急あるも山脈の厚さは甚だ薄し左れば日本

の諸山脈より推想せる者にてハアルプスの高山ハ其の斜面も定めて急をらんと思ひ居たりしは左は無くて山腹之非常ニ厚く山麓ニ至る迄左程険しとも思はぬ程ハ其勾排甚だ緩かり又谷々の勾排頗る緩よして饒頭ニカラの如き圓山を上りてハ下り下りては上りする内ハ最高ハイランドの巔ニ達するが如く覺ゆ左れば谷と云ふも日本の如く狹隘峻削ニカラある者ハ非ずとして實ニ陵夷なるものあり成程流石に大陸の山脈の氣象ニ斯る者あるへしと始めて思ひ當れり同じ高山大嶺と云ふも大陸の者は薄ベテの急ある者ハ非ざるあり扱山嶺より山麓ニ至る迄ハ處々ニ陵夷ある地面あり概して森林少く諸山と云ふも可あり民家も其間ニ散點せるか何れも山中の事あれば二階家は少く恰も日本の一軒立の平屋の百姓家ハ髣髴ニカラたゞ唯テ旅客の眼ニ異体ニ見ゆるも民家の屋根瓦あり此邊は一体ニ煉瓦ニカラ杯を用るを薄き石片を以て不規則ニ屋根の上に積み重ね居れり其の石片と薄くヘゲたる三四尺許りの色々の形の者あり此邊の山中ハは斯る石片多しと見ゆ此の瓦の外ハ都べて伊佛の民家ニ異なる箇條なし

佛境より山麓迄ハ隨分洞道多しと思ふが山麓より伊國の山麓迄ハ又一層洞道のみよて忽ち明、忽ち暗、出しりと思へば入り入りしかと思へば出て、麓の方七八合迄の處ハ幾と唯テ洞

道續きある心地せり

既にして瀛車山下ニ來り彌望空濶の郊野に出てたり地圖を案すれば伊國の西北境は都て此アルプスの山脈ニ抱擁され又少く西南の方に至れば直ちニヘランスの山脈あり此兩山脈の間には左程の餘地あり其思はさりしに實際此に來り見れば平原蒼々沃野千里とも云ふ可き地形にて岫嶽相接し原野相聯り處々に桑樹多く村落所在ニ散點せり斯の如く空濶坦遠ある地形ハ恐く日本には曾て見ると能はざるべし流石に舊國程ありて原野杯の開け盡したる有餘人力の加はり居る有様は又た一ト入み眺めらる伊國が二三十年を出てすして早く強國の間ニ列するニ至りしも決して偶然ニ非ず亦其國本の在る所を想ふへし

●問 倫敦の氣候は如何

●答 倫敦の位置ハ日本の函館、札幌、よてを尙一層北の方角にあるとなれば其寒氣も亦た非常ニ強かるべき筈あり然るに其寒氣は東京より稍と少しく寒しと云ふ位のとめて別々しき相違ありとも思ひ昨冬の如きと五十年未嘗有の寒氣ありしと彼地の人ハ云ひしなれども在りて堪へ難き程との思はざりし又一昨年ニカラの冬の寒氣は東京よりも稍と輕き方ハ覺るたり去れば其地の北ニ寄りたる割合には同地の寒氣の輕きと明りあり一説にて大西洋の熱

帯よて炎日に照り込められたる潮流が其温氣を廣くして英國の西岸一帯に衝き當るも恰も太平洋熱帯の潮流が日本に於けると同じく爲め斯く緯度の割合よりも温氣を生ずるありとも謂ひ又或る同地には霧多く冬分の常より霧を以て同地を覆ひ包むが故に其寒氣割合は輕きありとの説もあり又英國を指して「常青卿」と名けし人もありしと聞く是れ場所によりては冬分も草色蒼々として日本をどの如く黄ばみ枯るゝとの言ひ多きが故に斯く呼へるありとも云へり如何にも處々の公園などを散歩し見るに日本の芝は似たる軟草一面は青色を帯ひて其儘に年を越す者比々皆是あり尤も其中に少しの赤みたる枯葉も見るとにて固より春夏の初めの如くは色合句あふて好くはあらざるなり然れども之を日本の芝原其他の草叢が秋冬の際には全く黄色に變り盡す者此すれば甚しき相違あり斯く草の枯れざるも一は寒氣の甚しからざるに因る者や

因に謂ふ右の日本の芝に似たる軟草は芝より一層愛すべき者にて芝は其葉硬く尖り居るも此草は其葉柔やうある事恰も俗間にて稱ふる離草の種類は似たり此草を日本の庭園或は公園に移し種をば如何と思ひし事もありしが或人の話に傳て之れを日本に移せたることありしは氣候の温かよ過ぐる故にや非常に長く生延びて花々たる草原を變り英國の如く短く細

やかよ愛らしき芝生の用をばあさうしと云へり或は左もあるべき乎

此の如く寒氣は其の外に離れんとす唯だ其寒き時節の水は凍くよは驚くべし昔て記載したる如く先づ概して言はば一年十二ヶ月の中の五ヶ月を冬とし残り七ヶ月を春夏秋に分つ可なり斯く冬の長き處なるが故に又其の手置も殊の外宜しく家座敷等々の造作も又馬車、乗合馬車、等の造作も皆多くは冬期に對して其の寒さを専ら工夫せるが如く見ゆ始めて地よ着せし時は夏の初なりしかは是等の造作向都て如何よと不細工に見ゆ何とかな今少し空氣を放散流通する趣向のなさやと私のお笑ひ居たりしは追々寒よ向ふよ至り始めて初はと思ふたりとあり窓戸の糊り都て「キナ」く一行届き室外と室内とは恰も別世界の如く爲しめる風は最も冬向に適當せる者なり斯く糊りては家も在て煖氣を映さ家内打寄りて多鐘りをなすは又た一種の趣きある様に見受けたり斯くて歳の初め四月頃より漸々と温氣を生じ是より世間も次第に春めき六七月より八九月にかけては人皆之を遊觀の好時節とし或は諸國に旅行し或は海邊に遊び廻して樂しむことなり

余等日常に日本の氣候の變遷、中を得たる時節多く又た晴天多く最も人休し遊樂せる好土あるを誇り居るともから彼地の人には亦た其國の世界第一の氣候たることを誇り居れり是も亦

帯て炎日に照り込められたる潮流が其温氣を齎して英國の西岸一帯に衝き當るも恰も太平洋熱帯の潮流が日本に於けると同じく爲め、斯く緯度の割合よりも温氣を生ずるありとも謂ひ又或て同地には霧多く冬分の常は霧を以て同地を覆ひ包むが故に其寒氣割合は輕きありとの説もあり又英國を指して「常青卿」と名けし人もありしと聞く是れ場所によりては冬分も草色蒼々として日本をどの如く黄ばみ枯る、このあき者多きが故に斯く呼へるありとも云へり如何にも處々の公園などを散歩し見る日本芝は似たる軟草之一面は青色を帯ひて其儘に年を越す者比々皆是あり尤も其中に少しの赤みたる枯葉も見ゆるとにて固より春夏の初めの如くは色合句ひふて好くはあらざるなり然れども之を日本の芝原其他の草叢が秋冬の際には全く黄色に變じ盡す者、此すれば甚しき相違あり斯く草の枯れざるも一は寒氣の甚しからざるに因る者もや

因に謂ふ右の日本の芝に似たる軟草は芝より一層愛すべき者にて芝は其葉硬く尖り居る、此草と其葉柔やうある事恰も俗間にて稱ふる離草の種類に似たり此草を日本の庭園或て公園杯に移し種をば如何と思ひし事もありしが或人の話に嘗て之れを日本に移まるとありしは氣候の温かよ過ぐる故もや非常に長く生延びて花々たる草原を變じ英國の如く短く細

やかよ愛らしき芝生の用をばあきざりしと云へり或は左もあるべき乎

此の如く寒氣は照の外は輕けれとも唯だ其寒き時節の永く續くよは驚くべし嘗て記載したる如く先づ概して言はゞ一年十二ヶ月の中の五ヶ月を冬とし残り七ヶ月を春夏秋に分つても可なり斯く冬の長さ處なるが故に又其の手當も殊の外宜しく家座敷窓等の造作も又馬車、乗合馬車、等の造作も皆多くは冬期に對して其の樂きを専ら工夫せるが如く見ゆ始て地は着せし時は夏の初なりしかは是等の造作向都べて如何よと不細工に見ゆ何とかな今少し空氣を發散流通する趣向のなさやと私のお笑ひ居たりしは追々寒く向ふよ至り始めて扱はと思ふあたりを窓戸の細り都べてキナ／＼と行届き室外と室内とは恰も別世界の如く爲しある風は最も冬向に適當せる者なり斯く細りて家内在て煖爐を焚き家内打寄りて冬籠りをなすは又た一種の趣きある様に見受けたり斯くて歳之初め四月頃より漸々と温氣を生じ是より世間も次第に春めき六七月より八九月にかけては人皆之を遊觀の好時節とし或は諸國に旅行し或は海邊に遊び廻して樂しむとなり

余等は常々日本の氣候の寒温、中を得たる時節多く又た晴天多く最も人体に適當せる好土あるを誇り居るとかから彼地の人は亦た英國の世界第一の氣候たるを誇り居れり是も亦

た銘々國自慢の一証なり日本も來りし英人杯の倫敦を優れりとする口實を聞くに曰く日本の國は常に濕氣多し其証據は品物も黴を生じ從て腐朽するを速かあり左れば金屬も黴を生ぜると甚だ多しと此點は如何も一理ありあらず倫敦にては如何ある時節と雖も曾て鏽を生ぜざりしあり理髪道具の如きも日本も持ち歸れば其の一面は黴を生ずると二三ヶ月の内は幾度あるを知らせ給て日本の空氣に濕氣多しと云へる辭も誤りあらぬと思ひ當れり如何も彼國の空氣は寒き時多きが故に熱氣に蒸されて濕りを含むと少くも一体は乾燥ある如き心地せり斯れば其邊は彼國の空氣が優り居るやも知るべからせ然れども唯だ倫敦にては快晴の天氣殊も少く早朝より晩方まで蒼々たる碧空を見るを得るの日は一年の中は幾くもあかるべまと思へる、程も曇り勝りて又た其陰晴の變化の劇しき事は言語同斷あり

●問 倫敦邊にて氣候の異りたるよりして推及べる色々の風俗もあるべし如何

●答 夏の外は春、秋、冬の三期共常ふ蝙蝠傘を携へ居らせしては不都合なる程もぶつうけの驟雨來る事少からせ然るも茲も又奇あるとは倫敦の雨の長く續うると水量の少なさとの二事なり日本にては東京其他概して盆を覆へすが如き水量の多き雨の五六時間も降り續

くこの珍まからせ左あるに彼地にては此の如き雨と絶無とも云ふべき程にて一寸降り來るかと思へば忽ち止み始終曇りがちにてポツ／＼と小粒は落ちあがらる水を撒くが如くは降り來らせ左れば手代伴頭杯若者ハ蝙蝠傘を持たぬ者すら甚だ多し若し途上にて傘なくしてハ行かれぬ程の雨は逢へば一寸家の入口其他の蔭に立寄りて之を避け居るときは遠からせして歸れ行くなり是亦奇と云ふべし

春、秋、冬の三期は於て倫敦にて最も厭なる心地するは東風なり蓋し此風の北のかた遙かに魯西亞日耳曼の水雪の上を捲き來るが故もや其寒き事非常あり是を以て英國にては通例東風と云へば病人杯は最も宜しからざるもの、如く謂ふあり日本支那杯にて東風とさへ云へば何となく和らぎて長閑な面白き者の様も想くる、習慣とは大變の相違あり亦た風土の殊れる所を見るべし

前記する如く公園或は牧地の如きは冬期と雖も亦青色の草を見るは是も引替る樹木は概して皆其葉を落さざる者少なし日本にて常盤木と云へる杉、櫟、あんだの如く綠葉を帯びたる儘冬を過せそのものは甚だ稀なり通例庭園又ハ公園杯も植へたる樹木も春夏に茂榮し秋冬に落葉するを通例とせ是れ一ハ春夏の暖かき時には蔭を愛し秋冬の日光を愛するより自

然斯の如き常盤木のるき有様となりし者なる歟要するは英國にては常盤木の生長都て非常な速きが故に寧ろ生長速やき他の樹木の方を愛し植るあり又た間々松杯の類を植へある處もあれども日本をどの如く喬大な生長し居る者少し但し伊太利の如き暖國にては松の大なる者をも多く見かけたり

前記する如く倫敦にては冬分のドロリとせる曇天の上は霧さへ立籠る事多く之は加ふるは百万戸の家が軒別部屋くよて煖爐を焚く其の石炭の烟が幾百万の烟突より立升るとなれば積り積る煙の四方に飛散すると能て多くて其近所の樹木の枝幹は附着し従て市中及び公園杯の樹木は皆黒色よクスボリ居らざる者をし左れば其葉の黄はみ落ちて枝幹の全く露ひる、秋冬の際に宛然一幅の墨畫の山水を見るが如き心地すと云ひし人ありしが實に能く形容したりと云ふべし

是の故に秋冬六七ヶ月の間は殆ど緑葉を着け居る樹木は絶て見ると能はせと云ふも可ある殆未あして三四月頃あ至り青き嫩葉のボツ／＼と黒く爛ぼれる樹身より一ト際色立て芽出しかくるを見るときは實に得言はれぬ愉快の心地するあり

又た一寸またる自宅の庭園は日本にてアチキヤ(處よりよりて稱へて異同もあるべし)と稱す

る者よ似たる一種の木植へある者多し冬は緑葉ある者は殆ど未だ此の木のみと云ふも可ありアチキヤと云へる木は日本にては素と甚だ不風流よて無論庭園の飾り杯する者もあらぬは彼國の園庭は在りて見るときは甚だ其趣は適なる居る様眺めらる、なり以て東西の風韵の甚だ相同じからざる一端を察するよ足べし

●問 倫敦邊にて春花の景色等は如何

●答 六七ヶ月の間花は勿論木の葉さへ見るとなき世界より自然な暖かなる春期は向ひて彼處此處種々の新芽を吹出し花さへ色々は咲はじむるを見る時は坐るは故國の情を生ぜるあり余等の如きは是迄外國は留學したるとも少く稀に旅行すればとて廣くもあらぬ日本内地を東西は奔走するのみよて汽車汽船は便ある今日にては左程は懐郷の感の出たるともあかりし其身を萬里の外に置き親戚朋友等も少き有様よて節物の移り代はるを見るときは實に一種の感を生ぜる者にて支那の詩人杯が懐郷の情を述べたる境界も思ひ當れり左れば一日ハイドパークを散歩せる折不圖下の如き拙作をも得ることあり魂園日暖百花明、

綠葉深邊有鳥聲、萬里假合春相似、滿眸草木不知名、

彼地の人ば全体は草花を愛して木の花を愛せぬ彼地の人ば歌或は詩に述ぶるは多く皆草

花にて木の花は誠まことに稀まれあり斯いかる高尚こうこうより生なせしよよる者か木に咲く花よして麗うるはしき者は甚おだ多おほからざ然しかれども日本同様の花の絶たて無なくもあらざるあり先づ春頃はるに開ひらく桃ももの花杯はは全く日本と相違さし又同じ頃ときに櫻うめの花も開ひらけども日本の如く美事みごとある櫻うめはあらざ元來もと彼地こゝの人の櫻うめを愛するは唯ただだ其實じつを珍めづ重たがするに在る者あれば其種類しゅるいの撰ひらきも從したがて日本とは趣おもを異ことにせり故ゆゑも同じ櫻うめの花よはありながらも日本の美事みごとなるもの比較ひかくすべくもあらざ去りあはらソレにては其満開まんかいの頃ときは猶なほは觀處くわんじょあり此こゝに對たいすれば何なにとなく故郷こきやうあつかしく眺ながめたるも少すくなり又梨なしの花は嘗なほば日本と同様どうようにて遠とほく望のぞめば皎然せうぜん雪ゆきの如く見ゆる程ほど堆たいかく植うけたるも少すくなり余等われらが春晩はるばんに佛國ふつこくの南境なんきやうより白耳はくじ義ぎを旅たびせし時ときに方あたさに花時はなときにして櫻うめ花はな梨なし花はな枝えだを交まじへ村落そらうの間まに散さん點てんせる景色けいしきを日本の田家でんかに異ことならざるの心地こゝろしたりき此こゝの如く櫻花うめがはな、桃花ももがはな、梨花なしがはなの類るいは先づ日本と稍さうや同様の者を觀得みえるとあれども獨ひとりり梅花うめがはなに至いたては曾なほて其似寄にきよりの者ものさへ見懸みかけたるにあらざるに梅うめと元もとと異ことなる木きの如く思おもはるれども彼國かゝるくにの氣候けいゐにては尙なほは適あせざる譯わけあや但ただた春晩はるばんに伊太利いとうりを遊あそびし折は一夕ひとよ客舍きやくしやにて食く堂だうに入りし時とき卓上たくじやうの花瓶はなびんに種くさ々の花はなを雜まじへ挿さみある中に料はらざるも忽たちち一枝ひとえだの梅花うめがはなの款い重じゆうとして奔出ほんしゅつし居ゐるを見たりしが如何いかにも久ひさまぶりにて朋友ともだちに面會めんわいせし心地こゝろせるが上うへ獨旅ひとりたびの

事ことよしあれば分くわんけて懐郷くわいきやうの情なさけも堪たへざりしかり左れば同國どうこくよは必ず梅花うめがはなあるべしと思おもはる當時たうじ看み出したるは確たしかかに梅花うめがはなと違ちがひし倫敦ロンドンは暴風雨ぼうふううも少なからぬ事ことあるが平生へいぜいの風力かぜりきも亦またた随分ずいぶん劇げつまき事こと多く東京杯とうきやうはいに此こゝすれば惡わるき天氣てんきがちの方かたあり去いり乍はなら人智じんちの進すすむに難がたひ諸般しよばんの理科學益りがくがくえきと開ひらけ為なりて社會しやかいを受うくる所の助けの尤なほなること毎まに驚おどろくことあるが英國いんこくの新聞紙しんぶんしよは大概たいがい例刻れいこくに氣象臺けいさうたいよりの通報つうほうありて數日かずじつサキの暴風雨ぼうふううの調査てうさを前まへ以もつて預記よきするあり亞米利加あめりかの大西洋海岸たいしやうやうかいより今いまと愛蘭あいらんの何なにの地方ちほうよ吹廻ふきまはり居ゐり何日なにじつ頃ころよは英蘭いんらんの海岸かいがんに來きるべし等らう一ひと々々測量そくりやう屈くつさ之これを新聞紙しんぶんし上うへに掲たぐるあり尤なほも此こゝの通報つうほう通とりに行いかすして意外いがいに荒あれの少すくなき事こともあれども又また通例つうれい幾いく分か其驗そのしるしはあるあり左れば余等われらが旅行りよくするよも西にしの方かたよりの天氣てんきは多く此こゝ通報つうほうを自みづから目め當あたてて晴はれを計はかりし程ほどありし又明日あしたの天氣てんきの有様ありさまを今日けふより世間よに預報よきするとは諸國しよこくよ其例そのれい少すくから大陸たいりくの諸都府しよとふの中なかよては氣象臺けいさうたいより翌日あしたの天氣てんきの概略がいりやくを日々掲たげ示しめむための懸板けんばんを懸かけ居ゐたるをも見し事ことあり

●問 人家にやに近ちかき鳥類ちようれい即すなはち鶯うぐいす、鳥とり雀すずめ杯はいは英國いんこくも日本と同様どうように多おほき事ことあるや

●答 如何いかにも雀すずめの如ごときは其澤山そのたくさんある事こと日本と同様どうようあり又其毛彩もうさいも一見ひとみして同種類どうしゆるいの

者たるを知るべし但た例の烟の爲めや倫敦の雀は黒く燻ばり居れり日本人打寄りて言  
 容鏡等の事よ及余時は毎ね鳥類就中雀あどは日本も英吉利も其語格は同様と見へ少し  
 む啼聲の變らぬは不思議なり雀杯こそ日本の者を倫敦よ持行きて其仲間よ入る、も言語容  
 貌都べて他國の者とは思はれざるあらんとて打笑ふたる事なりと爲、鳥の倫敦市中は殆  
 ど見懸けせと云ふも可ある程なり是の倫敦のみならず巴里、柏林、も同様ありしと覺ゆ但し  
 倫敦より少しく郊外よ出れば鳥は随分澤山よて其の聲、形、ともに總て日本の者に異あると  
 あり然れども爲の方は英國よては不思議にも見當りたることあらむ邊部の小都邑あどに至ら  
 ば時として見懸る事もあるべきやも知らざれども先づ倫敦近傍の都府にては注意したるよ  
 曾て見當りたる事無かりしあり察する所市中も不潔物多く或は空地あどありて爲、鳥、の食  
 物となるべき者或は其家となるべき場所の多き都府よわらざれば爲、鳥、も自然栖まる難き  
 者と見ゆ若し東京の市中が倫敦、巴里、杯の如く掃除行届きて不潔物少く爲鳥の食料絶無  
 とあらんよは是等の鳥類は強て芋を以て逐ひ廻はらすとも必都府より以外の地よ移り去  
 る事となるべし又今日の如く市中一面不潔物多き時代よ在りては爲鳥の無數よ栖遊して是  
 等の汚穢を掃除し異るも亦た必要とこそ云ふべけれ

鳩之之を飼居る者處々に少なからず就中寺院よは多く之を飼置ける様見受けたり又尋常の  
 家よては唯た樂みよする譯よや又の何等かの必要あるもや兎よ角市中も飼居る者を段々見  
 かけしあり

●問 倫敦の雪景色は如何

●答 函館、札幌、よりも北の地位なるが故に倫敦の雪も多かるべき等の處甚だ少なし如何  
 よも冬よ至れば兩三度は雪の降るとのなきよもあらねど先づ東京位の者よて非常よ深く積  
 りしとて同緯度の北米加拿多或は歐洲大陸日耳曼境杯とは勿論此較よあらぬ由あり一二尺  
 以上積れば珍しき者と見へ場末あての子供や若者あど相集りて雪抛ををし樂しみ居れり  
 又此若者共が興よ乘じて往來の人よ雪丸を抛つけて其れが爲め警察署よ喚出されて罰金を  
 課せられるあど話隨分新聞紙上に少からず又まいつても雪が屋根よ積りありては其融け  
 汗始終シタ、り落ちて敷石杯を汚す故其の不都合を避くるため家々よて多く屋根敷石等  
 の雪掃をあそなり左れば少し雪降りのは後貧民が雪掃の道具を擔ひ家毎よ御用はあさやど  
 尋ね歩く人手少き家は之を呼び入れて庭前又は屋根杯の積雪を取除かしむるあり

●問 自轉車にて世界を一周すると云へる名高き旅客ステーション氏は不日東京に來着すべ



さ等ありと云ひ又第二の自轉車一周客マートビー氏も既に此程印度コロムポ迄到着したりと云ひ亞非利加のモロッコ國王迄宮中自轉車を斷ふに至れる由續々貴社の紙上にて拜見せり左すれの自轉車は今日西洋一般の流行物と相見ゆ彼地にて自轉車の有様は如何ありや

●答 倫敦などにて市中を乗り廻りし居る者の有様より記さんよ彼の肩を摩れ合ひ轂と轂ち合ふと云へる中央盛り場ある市區内の通りみよ素々り斯る慰み半分の者の横行すへき餘裕も少なければ市區内の通りよて之を見掛ると甚だ稀れある方なれども少しく往來の疎らなる場末又の公園、空地、などよては随分自轉車を馳せて乗り廻り居る者をも多く見掛るなり自轉車よ上中下色々の種類あれども概するよ日本杯よて見掛るものよ其の軸粗好悪甚だしく相違せる様あり第一に其輪の幅極めて細くして一寸見たる所電信線の針金位の太さあるか無さか程よて又た其の輪齒と名づくべき輪の外邊を成せる圈金も甚だ薄く唯だ之を一目したるのみよて既に左も輕快らしく見ゆ又加ふるよ車輪の外邊は大抵皆厚さゴムを以て縁とりあれば其の彈力よて車輪と地面との激觸も柔かよし乗手よの至て安易ある趣向を又た其制も種々ありて日本お在り來れる如く後ろよ小車二個前お大輪一個

の三輪車又の前後よ小輪と大輪と各々一個宛ある二輪車等は勿論又た兩人相乗の双坐車あり此の双坐車は大抵三輪付よて前よ一人後よ一人乗る可き形の者あり又た右よ一人左に一人乗る可き形の者あり午後より夕方よのけ公園杯よ至り見れば彼の双坐車お朋友よや或は將來の婚約ある仲間よや年若き男女相並びて打乗りつ、平坦砥の如き廣き路を輕快なる輪よて音をもさ、モアチヲコナヲと乗り廻はり居るもの多くを見受けるあり尤も是等はすべて中等以下の者共よて無論上等の人々よこあらせ又た相乗車よて其輪を踏み廻はすの勞を取り居るものよ皆な男子よして女子は唯だ左右前後四方の景色を打眺めあがら少しも手足を動かしませして平然と驅り居るあり

此度ステーション氏が乗りて世界を一周し居る自轉車は直徑四尺許の輪ありと云へば先づ余等が彼地よて通例見掛けたる尋常の大きさのものなりと思へる  
先般以來屢々我社の紙上よも譯載せるが如く日即曼よては既よ之れを軍陣傳令の事よ試用し佛國よては之れを郵便遞送の事よ試用し何れも好結果を見たりとのとあるが斯くまでよ至りたるよ決して一朝の故よこあらせ西洋よては夙より自轉車の流行甚だ盛んよして倫敦などよは現に自轉車雜誌と稱へ自轉車に關する丈けの有らゆる事柄を記きて定時刊行せる

専門の雜誌も之れある程あり亦た以て其の流行の久しく且つ盛んあることを知るべし  
 又た西洋よては寄席などの如き場所にて一寸前藤として此の自轉車の曲乗をあすも往々  
 少なからざるの乗方は色々あれども先づ其の一例を擧げんに彼の曲乗の藝人は左も輕快よ  
 見ゆる直徑四五尺許りの大輪付きたる二輪自轉車を舞臺の中央より持出だし最初之より打垂  
 りて廣しと云へど限りある舞臺の上をば縦横十字に或は斜めに或は空に或は自由に自由自  
 在に乗り廻りし又た勢ひ込で走り居る車をば腰を捻りて忽ち中止し瞬き五ツ六ツする間と  
 云へる者は恰かも二本足よて屹立せるが如くイみたるまゝ、少しも動かさず此外或は車を停め  
 片足を車上に掛けたるのみよて半身は落ち掛りながら宙に留まり居り或は枕の如き小さき  
 箱を幾個を高く積立てたる上よ彼の自轉車を置きして身体をば車上よ安じツツとマメ居  
 る等種々の技を演せるすぬ終に彼の自轉車を次第に解きて仕舞よと執手も踏處もなき  
 大車のみを裸よて殘し之れを子供が輪を廻はす如く二三尺向ふよ轉がし置きてアトより之  
 れよ飛乗りて手よ執るべき所も無ければ足よ踏ひべき所も無きよ踏だ輪の中央ある心棒の  
 振る可き穴の周圍の少く高くあり居るを足掛りよ突立て足の方よて左足右足更るく下  
 を蹴廻はしつ、手よては又た罔金を手練り手足相須ちて其の勢を助けながら蹴せ廻ぐる中

よ遂よて非常の速力を生え全然尋常の自轉車と其れ早さを同ふはるよ至る杯は最も熟練を  
 見るなり然れども更よ一とキツ目覺しきハ自轉車の曲乗濟みたる處よて餘興として大八車  
 の隻輪を外し來り前の自轉車の裸輪同様よ之れよ打ち乗りて自在に蹴せ廻ぐる様前の自轉  
 車の輪とは事違ひ不細工よ重むく大きあるものあれば之れを乗りこなす手際は又た一ト入  
 の熟練と感心せり此程コロムボよてマルトヒ一氏が種々の伎倆を衆人よ示したりと云ふも  
 彼地よてヨクある所の曲乗と見合せなば餘り異はりある事もあらざるべきやと思像せらる  
 あり

●問 米國よて名高きモルモン宗徒の開拓地なるソート、レーキ、ンターよ御立寄成し由其  
 の有様如何

●答 余等の乗りたる瀛車はユニオン、パシフィック、ソート、レーキ、ンター迄は少し寄り途よ、  
 ソよて瀛車を次ぎ代へる趣向なりシオグデンよソート、レーキ、ンター迄は少し寄り途よ、  
 こあれども僅かよ一二時間よて往かる、處あれば見物の爲め態々寄り途をこそ人も多きあ  
 り御承知の如く右の都府の名高きソート、レーキ、ンター(潮湖)ある大湖よ沿ひたる者よて余等  
 がオグデンを獲して最早や二三分よて彼の都府よ到着すべき筈ありし途中より遙かよ一

曲の溝水は多少の映影を浮べたる者の徐々として窓前より現れ出でしを見たり然れども愈  
と都府に近づくに及ては復た見へるありき

此の都府を去る四十年許即ち千八百四十七年の七月中モルモン宗徒の一ト組百四十三  
人が始めて開拓したる所にして最初より町の割方杯は六に意を用ひ十エーケル（凡そ四  
町餘）宛を仕切りて一區畫を画し此の區畫の四面より外より向けて家を建て列らね此の區畫を  
幾個もく井然と相對し合せて遂に全都府を組み立てたる者なり而して是等の區畫同士  
の間隙即ち町幅は百廿八英尺（凡そ廿一間半）と定め又た町の兩側の家をして門口を互ひ十  
ガヒにして向ふ同士迭ひて店を眺め合ふことのおき様としたる杯に殊に意を用ひたる處を  
る由余等は素てより斯る話を聞き居れば如何にやと見るを樂み居たり涼車の到着せるは  
恰も夕方にて晚餐を終ると其儘杖を提げて直ぐ櫛市中を散歩し視たるに成程町の區畫の井  
然となし居る有様往來の幅廣く直ぐよまて所謂大造變の如しとも稱すべき程に整ひ居  
る有様皆を素て聞けるに違はせ又た家の檐下より二間許り出でたる處は兩側共三四尺許り  
は廣さの溝堀りありて是は絶ぬき深々として水の流れ居るあり折しも夏分の事をかれに此  
の溝を横ざりて板を渡し其上椅子杯置きて納涼臺となしすやみ居る人々も多かりし元來

此地は土質輕鬆にして少しく風吹けば土は皆を灰の如く颯がり驟へるを見たり左れば是  
等の溝は土を潤はすにも必要ある事ある可しと想れたり又た町の兩側は植木付けある樹の  
皆を大きく生長して割合お弱木の少りしは亦た以て最初より町の割方都べて成算ありて  
樹木植付けの事杯も既し夙より着手の整ひ居し者あるを推量すべし主要するに市中區畫の非  
然として且つ町の組立の按排宜しきを得たる工合は歐洲大都府もねさく及ばざる所ある  
べし舊國の都府は在り來りの家並をアトより取繕ふは過ぎされども此の都府の如きは最初  
より先づ圖引を定先置て後ち建てたるものあれば其の善く行届くも尤もあり

●問 引續てソート、ソーキ、シテ一の有様並にモルモン宗の事を承り度し

●答 先づモルモン宗の奇談より記さん御承知の如くモルモン宗は今より五十年許前より  
米國の一賤民あるジョセフ、スミス、の開創せる一派にして此のスミスある者は別は著り  
れたる程の履歴もなき田舎百姓の息子あり左れど其の母は何か異常の處ありし婦人ありし  
と見へ平生より口癖の如くは已れば必し一人の豫言者を生ひべしと云ひ居たり（豫言者と  
は將來の世事人事を豫言する者の義にて其の豫言する所を皆な神の感應より出づると稱す  
るあり昔より西洋にて一宗を開創せる祖師又は之を承継して其道を弘めたる上人等は

抵斯の豫言者と名づけらる、種類の人々あり。此の婦人の腹より彼のスミスの外に尙ほ幾個の子供を擧げたりしが母は亦た何か認る所やありけん他の兄をば棄置き彼のスミスのみをば幼き時より斯の子こそ行く、豫言者とあるべき者なりとて殊更ふ詭り居たり然るも又た不思議と稱すべきは此のスミス如何ある故もや生れ落ちて一向は笑ふと云ふとをなさず尋常の子供あらんもの物心つき染むる頃より人の腕又たは膝の上より在りてもアナヲコナヲと打眺め看廻はし或は嬉々と笑ふとの多きが通例あるも此のスミスは限りては更は笑へるとかく唯だ恒は下は俯ひ居るのみありし又た少しく生長して遊び嬉ふる、よも他の兒童の如くは子供らしき譯もなき事をば爲さず仍復下俯いて唯だ何か思慮し居る様なりければ其の十二三歳は達せる頃は蚤くも近村の評判とありスミスこそ凡物ならせと云ひ離すまでよ至りより孔子が子供の時にマ、事して遊ぶよも宗廟の祭の眞似をなしたる杯後來世の中に立ちて多くみせよ少くもせよ衆人を率ゐて一派の教をも建つる者は兒童の頃より既に何か常と異ありたる行状のあるものと見ゆ又た此は非れば衆人を服するにハ至らざるものと見ゆ今の清朝の初めは支那の田舎は或る子供ありて鴨を畜ふ妙を得其の子供の聲さへか、れば數多の鴨のアナコナは散じ居るものも皆一行にありて列を正し揃ひ歩くとの事

とり其評判高くあり其の子供の終に謀叛人の首領と戴かれて一時地方を亂せる話あり是は其の異常を政治上に利用したる者なれどスミスの方は素てより母の口癖に言ひ居たるが如く之を宗教上は利用して乃ち今のモルモン宗を組立つるに至りしあり  
 スミスが十五六歳の時井戸の中より一塊の怪石を掘り出だしたるは此怪石は願掛けすれば何か感應のある由を云ひ出だしたる事が則ちスミスの始て宗教世界に一ト足を踏みかけたる初歩を以しと覺へらる此頃は近村にてスミスの取沙汰既に喧すしくあり居たる時ありしかば扱こそとて之を信仰する者も希れあらざりしものと察せらる然れどもスミスが眞に踏込て一宗の祖師とありし其の後シカゴより行脚し來れる一僧がスミスの噂を聞傳へて一日突然其の居を訪ひ終日何か密談して別れたる時を以て始末となす是より幾ほともなくスミスハ神の告げによりて或る山嶺より銅牌若干枚を掘り出だせり其牌面に鰐りあると皆をイスノールの古語ありしをスミスが神の助けによりて讀み得たる所に據るに是は所謂イスノール十族の一ある猶太王ソビエの子コフエーの記したる者ありコフエーは國難を避けて其の一族と共に故郷あるユウーサレムを迷ひ出で大洋を横さりて此の米國に殖民したりしが其事を長あへに傳へん爲め手づから其前後の顛末を録して茲に載し置きたるあり因てス

ミスは自から之を英文に譯して出版せり則ち今のモルモン宗の經典ブック、オン、モルモンと稱する者あり

ミスが其の經典を出版してモルモン宗を首唱し出だせるは其三十歳許りの時なりまど覺ゆ今を去る僅かに五十年程の事あり然れどもミスはモルモン宗を首唱し出だせる後幾は必もなく地方を説法し廻はれる中に暗殺せられ其アトをばブリュガム、ヤングと云へるが故ぎて七八年前其の歿する日までは常にモルモン宗の管長とあり居しあり

モルモン宗が米國人は本と神聖ありイスレールの古族の移住きたる者ありと言ひ出たるは大に米國人の心に叶ひたる所なるべし又たモルモン宗の他宗と特に目立ちて殊なりたる一點は御承知の如く一夫多妻を正道とする一事あり余等が彼の前管長なるアンニガム、ヤングの墓を見物せる時案内者は門前にて「是がヤングと其の諸妻との墓にて候」と案内せり成程ヤングの墓を中央に据へ其他彼の隅此の隅に都合三基の墓あり皆あヤングの妻を葬りたるものなり西洋の墓には十字架を掘り附る杯色々の形ちにせる石を樹てし日本の如き風の者と又た之を平に地上に寝せたる者との二様ありヤング及び其諸妻の墓は即ち第二の地上に寝せたる方の者にして長方形ある大理石の上に其の姓名月日等を記したる質素のものなり

りし又た其の墓地も餘りに廣からま十間乃至二十間四方なりしと覺ゆ

●問 嘗て承りしが彼地新聞紙の上に付尙は日本と異なりし箇條はなきや如何

●答 英國にては一物殆んど皆な其専門の雜誌なきものはなし例へば慰みの事柄のみを記載して發行する遊樂新聞あり又た自轉車なれば自轉車の事のみを記載する曰轉車雜誌あり其他遊獵、川漁、に至る迄皆な夫々の雜誌ある程の事なれば矧してや重んじむる遊藝事業に至ては皆なそれ々の雜誌なきものあらざ但た茲に一種の奇異なる雜誌ありてマツトリモニアル、ニュースと名つく右は縁談新聞とも譯すべきか一切世間の縁談の口入れを記載せる新聞にて餘り可笑しき新聞なるがゆゑに余輩も其見本として一枚を携へ歸れり右の新間を一讀すれば實に抱腹すべき事少なから先づ第一面に現れ居るは年齢何歳幾許の収入の男ありて此たび年齢若干如何なる女房所望なりと廣告し居るもあり又金持の後家らしく見ゆる者の若き入夫を求むるもあり其中には餘程財産を所有したる者を記載したるも少からま又此の新聞に因りて實際便利を達し睦しく婚縁を爲し居り合好き者幾千人以上なりとか其數を記載せるもあり果して左程の効能あるものによ去り乍ら婚姻は人生の大事なれば互ひに其平生を知り居るが上にも念に念を入れること常なるに斯る新聞の文面のみを便り

として縁を結ぶ者ありとは實に廣き世の中と云ふべし尤も通例の人は先づ斯る新聞には掛

ふべき理窟もなければ相應の讀者もある事を見ゆ  
去り乍ら又た時としては大なる間違を惹起す事も少からざる由にて嘗て右縁新聞紙上に  
て年頃の男子の廣告と年頃の女子の廣告とあり双方共に似合はしき事と思ひ互ひに相投せ  
しかば愈々双方より日を約して見合ひの爲め某の所に出會せり扱て男女とも先方は如何な  
る人物なりやと且は心配し且は樂々乍ら顔を合はしたるに何ぞ計らん兄と妹にてありけれ  
ば双方共に仰天して逃出せしと云ふ物語りさへある程なり又右の新聞は定めて婚姻の節世  
話料として金子を申受るやうの事も之れあるべきやに察せらる兎にも先づ面白き新  
聞と云ふ可し

佛、伊、等の國々と英國とは新聞記者の身上に付き亦た各々相異なる場合あり佛、伊、二國に限  
らず米にても其他何れの國々にても新聞記者は通例政治家を兼帯する者少なからず文學得  
意の政治家とか又は法律得意の政治家とか各々其得意とほる所は様々なるも兎に角新聞記  
者となりて政治家を兼帯せる者多し早く云へば新聞記者たる者は通例政治家の役目を務む  
る者少なからず佛に在りてはナエーア氏が新聞記者たりしが如きガソベツタ氏がレビュア

リックフアンセーの記者たりしが如きクレマンソー氏が現に新聞記者たるが如き皆な其証  
なり又た伊太利に在りても有名なる新聞紙にして其記者たるものが國會議員中の重なる  
人物と稱せられざる者は幾んど稀なる程なり又た米國に在りても今の大統領クリーブラン  
ド氏と兩三年前雌雄を争ひたりしメイソン氏は亦た新聞記者なり其他西班牙の議員中にて重  
なる政治家と稱せらるる者は皆な新聞記者にして陸威、瑞典、丁抹等の諸國の如きも粗は  
同様の有様なり是れ蓋し新聞社の爲に云へば然るべき人物を主筆と頼む時は其社の勢力を  
増すが故と勢ひ然るべき政治家を聘するに因るとあるべく又政治家の方めても之を機關と  
して我説を世に表白するの機會を得るが故と亦た進で之を當るにも因るあるべく又新聞紙  
は關係あれば其名を廣むる事も早く隨て政治世界は頭角を露はすに便宜なるが故にも因る  
あるべく凡そ是等種々の都合より新聞記者は政治家兼帯の者となり來りし事なるべし然る  
は獨り英國のみは殆んど其趣を異にし政治家は政治家、新聞記者は新聞記者、と全く別  
の職業を爲し居れり尤も尋常人にては固より新聞の主筆となると出來難き譯なれば新聞記  
者の名は世も聞へ相應に珍重する、傾きはあれどもまれば他の國々の如く新聞記  
者は則ち政治家と云ふが如き譯は行かず何とあれば新聞記者は新聞限りの事務家にて政

治家とは先づ縁のなきものと云ふ如き仕方あればなり是れ英國と他國との其の新聞記者の  
身上よ於ける異同なり

去りながら英國の記者とても随分社會にはモラル方の者にて又た新聞記者の行狀又は話  
柄とある事少くならずタイムス新聞の前の主筆(二三年前に死去せり)某が尙ほ社務を執  
れる頃英國の上等社會の貴婦人等が聊か企る事ありて新聞に大敵を持ち貫はねば不都合な  
りとの相談にて則ち盛宴を張りて彼のタイムス記者先生某を招待せり素より計りての事な  
れを彼の甘名許の上等の貴婦人等は寄りて集りて周旋款待至らざる所なく右より左より取  
持らたる末情で此度の企を申入れ貴社新聞にて然るべく助勢を頼み入る旨を述べたるは彼  
の記者先生は太と平氣を受合ひ委細承知せりとして其夜は別れたりしが其後間もなく愈よ右  
の一事紙上に現はる、事となれり然るに彼記者先生は滔々たる筆を以て遠慮會釋もなく此  
企の筋に違ふ廉くを指摘し散々非難しければ上等社會よて其頃傳て一談話とせしむる云  
へり

●問 新聞社が會議の筆記杯取るには如何にするや

●答 英佛の重なる新聞社は議院開會の節は勿論皆な其社より速記法の筆者を四五名づ

、議院に差出し議院よも亦た別段に是等を坐せしむべき新聞記者の席を設けあるなり筆者  
は已れ記せる所幾枚か溜まれば早速此を持ちて本社に驛けつけ直ぐさま印刷し付する其間  
に第二の筆者が又た其の記せる所を齎らす等眞に櫛の齒をひく有様なり左れば是等の筆者  
は其受給時間一人前十五分の交代なりと聞けり各新聞共に斯く筆記を取るが上に又た重なる  
新聞社は議院に電信を通じ居れり故に議院にての今某氏が斯く述べたりとの事は一  
分間毎に手に取る如く知る、なり余が佛國のレビニブリック、フランセー新聞社を訪ひし時  
只今議院より電報通じ居れりとして其有様を觀せられたる事あり實に便利至極と云ふべし日  
本杯も議院開會の後には我社にも特許を得て是れ位の便利を計りたさむものと思ふなり又た新  
聞社のみならず重なる政黨俱樂部其他の結社杯には皆な議院より電信通じ居れりと云へ  
り然れば大抵の俱樂部にてさへ今や議院には某氏が何事を饒舌り居れりとか何事の議決は  
何十の多數なりしとか少數なりしとか皆な手に取る如く知れ得るの仕組なり實に便利至極  
と云ふべし是は電信のみならず電話機の用も追々廣まる有様なれば議院の話しも行くく  
は諸方よて手に取る如く親しく聴くことを得る世の中となるべし十九世紀に生れし人は是れ  
豊に便利至極に非ざるや

●問 日本の子守女が子供を背負ひ居るとして西洋人は之を笑へりと云ふ話しを聞きし事ありしが彼地の子守女は子供を背負うと一切之れなきや

●答 如何にも子供を背負ひたる者は一度も英佛等の諸國にて見掛けたる事なし但た前に抱き居るは段々多く見掛けたり先づ通例は中等以下の女房或は子守が子供を伴ひ行くには車を用ふるとして恰も當歳より四五歳迄の子供を乗すべき小さく手軽く工合好く出来たる二種の四輪付の車あり子供をば此車に乗せて女房或は子守が之を後ろより推し行くなり近所の公園に赴た或は買物杯に赴くには皆な此の子供車を用ひざる者なし余等も日本にて往々之を見掛け居たれ共是は實用より寧ろ飾物なるべしと左して意をも留めざりしが則ち大なる誤りにて皆な子供を連行くに實用する者なり

中等以上の家にては早く乳母を雇ひ又は牛乳杯にて育てる故にや日本の如く子供を抱へながら身元好き婦人が所々に出行くをば餘り見掛けざる方なりき但し伊太利杯にては乳母が子供を懐き主人と共に外出し居る者少なからず嘗て一寸記したる如く其乳母の一種異狀にて美事なるには目を驚かせり例せば中世の衣服かとも覺したフックとしたる筒袖袴にて其色も冴えたる淺黄杯にて又所々に金モールの總杯をフックと垂れ其の戴きたる帽子

も亦た一種異狀なるに同じく金モールの總杯をつけたる杯中々に四邊を拂ふ計りなり斯る風は倫敦杯にては餘り見掛けざるに定めて中世の衣服と知られたり是れ蓋し小兒を飾るに未だ年少なるが故に其代りに乳母を飾り立てたる異風の今日迄も存し居るとなるべし伯林杯にては伊太利程にはあらねども乳母と覺しき者は一種の支度を爲し居るを見掛けたることもあり去りながら多く盛飾せる乳母を見掛けたる事伊太利の如きはあらざりしと覺ゆ

●問 引續きてソート、レーキ、シターの有様を承はりたし

●答 前記せる如くモルモン宗は創立以來僅かに五十年許になる間なれども之に歸依する者は中々に少なからぬ有様なれば他の耶穌教徒の者共は頗る心配なる趣にて種々の手を盡し或は間者を縱ちてモルモン宗徒とならしめ或は尋常の旅客となりて彼都府に滞留し色々秘密なる内事をも聞き出し其の奇談も甚だ多きなり今其の秘密の一二を掲げんに彼の世界の始めに當りエホバの神が創めてアマムなる男子一人を作り又た其の肋骨を抜き取りてイープなる女子一人を作り此の男女二人を花園に住はせ置しにアマム。イープ。は悪魔に惑はされエホバの神が豫ねて食ふべからむと命じ置たる木實を食ひたるより神は大に怒り始めて人類に死と云へる罰を與ふ是よりして人類は繁殖し乍らも死と云へる事必し之れに伴



ふ様なりしと云へる經典の本文より従ひモルモン宗に入る者には最初此の始末をば見振芝居にて示す儀式ありたれば始めてモルモン宗に入りたしと申し出る信者をば先づホノ暗らさ風呂場に導き異様ある衣服着けたる婦人出て來りて身体を洗ふ是れ現世の塵濁を洗ふて尊とた神の徒となるの印なり此の洗禮畢りたる處にて又々之れをホノ暗らさ一室に導くなり信者は此處に待ち居る中忽ち隣室にて何か物語る聲漏れ聞ゆるなり是れ神が天上にて愈々下界より人類を作らんとすとの相談をなす處なり此の相談終りたる處にて神と下界の花園は象とりたる前面の庭に下り來り此處に色々の男女出て、前記のアダム。イーブ。を作る事より惡魔に誘はるゝ迄の始末を演ず殊に彼の兩人が神の誡を破て食ふと云へる木實杯は樹身はじめ一切其處の壁に畫がさあるなりと云ふ甚だ子供らまき事似たれども其歸依の者共より觀れば轉た信心を増さしむる者と見ゆ此事は近來米國の耶穌教徒が問者となりて入り込み自身現より目撃して探り出したる秘密なり

モルモン宗の本山は今日にては年々一百万圓の収入ある由にて此の一百万圓は多く耶教師を派出し其宗旨を弘むる事に用ゆると云へり余等モルモンと稱する彼宗の寺院を見物せるに全体の結構は先づ一寸書の明治會堂の如きものにて只た廣き會堂の左右及び後邊にかけ四角状の二階を着けたるのみの極て質素なる普請なりし壁上には彼の祖師スミス神がの告げにより銅牌を掘り出す處を畫きありしが是も餘り威服すべき程の手際には非りし會堂の前面は例の如く説法壇ありて其壇上の模様杯は別に目立ちたる程變りし處もあらざりし此の會堂は都合二万人を坐せしむる者の由にて殊に意を用ひたるは堂内音聲返響の趣向なり番人が余等を導ひて會堂の後邊の壁際に立たし先已れば其反對の端ある前面説法壇の上より立ち小さきペン先をボトリと机の上に落したるに其響き明らか二三十間此方より立ちたる余等の耳に聞えたり

右モルモン宗の外観の異様なるは屋根の色尋常の瓦などと違ひ一寸日本の草葺の如く見し事あり又た此近邊に新たなる大なる寺院を建立しかけ尙ほ普請中なるを見しが前のモルモンが堂内の柱は悉く木の地を色どり大理石・蠟石・漆になしたる杯のゴマカシとは大に違ひ皆立派なる石材にて組立て居りたり

●問 一夫多妻の有様又はモルモン宗と他宗との關係等より付き何か目立ちたる事有りや  
 ●答 一夫多妻の正道たる否とは扱置き一夫多妻事かふる多くの細君が皆を幸福ありや否

この一事は頗る話の多き所あり兩三年前の事と覺ゆ彼の都府にてモルモン宗徒の婦人二千人以上も大集會を開きたる事あり集會せる婦人は何れも既も人の妻とありたる者にて其中には當ソート、レーキ、シーアの開け始めより此に住る居ると云へる七十歳以上の老婆もあり各々其の一夫一婦たりし時と又た後ち一夫多妻とありし時との事を比較し己れの身上の經驗も就て演説せるも皆一夫多妻となりし後の樂み多き事を言はざるはあかりしなり然れども米國の一体の婦人仲間にては斯る邪教蔓延びこりては倫理地を拂ふのミならぬ女性たる者の幸福を滅絶するも至るべしとて特に一夫多妻排撃組合と云へるを結びて頻り之と防禦するも盡力なし居る仲間もあり此の組合より出だしたる探訪者杯がモルモン宗の婦人よ就て親しく聽き得たる所なりとて報告せるを觀れば現も多妻の仲間もあり居る婦人にて其實は誠も面白からぬ味氣あき日を過ごし居るとの中情真心を打明けたるも往々少からぬ趣あり然れども斯る不平を竊かよ訴へたりと云へる婦人は大抵最初に婚禮せし元妻又は第二番目に嫁し來りしもの等其多くを占め第三以下の年少細君ふは割合も寡あかりま様ありき

兎も角も幾分か此方の心持にて迎ゆる所あるかを相知れぬと彼の都府にては出遇ふ婦人も

相見る婦人も何となく勢よく影の薄き様想はれたり殊も歐洲諸國又は米國の自餘の諸都府とは相違し婦人の市中を往來し居る者の極めて少かりし一事は亦た實に目立ちて覺へたりソート、レーキ、シーアの固よりモルモン宗徒の開きたる地なれば其等にもあるべきあれども全都府悉くモルモン宗徒あらざるはなき程の勢にて府廳の役人首じめ一切皆モルモン宗徒あれば偶々他宗の者あるとさして之れを異端外道と視做し万事も付け擯斥さる、有様あり余等が市中の或る書林に立寄りたるとさきも彼の書林の主人は己れモルモン宗徒もあらざるが故平生殘念ある事のみ多しと物語れり又た笑しかりしは余等の同行中少し用事ありて當都府の殖民事務取扱所に立寄るべき積にて旅舎を出る時より其旨を馬車の馭者に申付け置き去に市中の見物都べて畢りて旅舎に返着く迄彼の馭者は到頭彼の取扱所に立寄りて之を賣むれば只だ何か口中にてグズグズ囁くのみにて更も動かさ餘りに面倒あれば遂にソコより下り去がアトよて考へ合すれば彼の取扱所は耶蘇教徒ある米國人の出張所あればモルモン宗徒たる彼の馭者は之れを仇とし惡くして故さらに立寄らざりし者あり

モルモン宗徒の内規と至極善く行届き五人組に伍長を置き伍長を都ふるも百人長あり百人長を都ふるに万人の頭ありと云へる如き仕組にて終りの之を本山の一手にて總管する杯

の趣は都合好く出来居る由あり他宗の者其の評判にては其の宗徒の経書と追ふに米國の國會議員中に其の宗徒のもの幾名を出だし幾分か議場の勢力を占めたる所にて彼のユータ州(ソート、レーキ、シテ)即ちニューメキシコ州の首府なり)をば行く獨立の一邦とあし此にモルモン宗の本據を定めて是より次第に米國を蠶食して己れの宗旨に引き入れ米國を一統し了りたる處にて終に之を全世界をして悉くモルモン宗國と變せしむべんと企ありと云へり彼の宗徒の心持より云はゞ其位の處までは勿論意氣必くしてはあらぬ等にもあらんが先づ實際に之其の第一歩すら覺束あげある有様なり

ソート、レーキ、シテ)にはモルモン宗徒の専有の機關新聞もあるあり

●問 彼地にて歳暮年始の儀式は如何

●答 歳暮年始の儀式は佛國と英國とは稍や異なる所ある様に覺ゆ佛國にては専ら年始を祝する様あるが英國にては専らクリスマスと稱するところありクリスマスとは耶穌基督の誕生日にて十二月廿五日の曉あり此の日をクリスマスと稱へ是れより一月初めに掛けては先づ英國にて重なる商店杯の大休とも云ふべき有様あり則ちクリスマスは歳暮年始を兼ねたる一年中の大なる切れ目と云ふも可あるべし

親戚朋友知人に對し一年中の歳暮年始の折目切目の祝日なればクリスマスと稱すと云へば最早や十二月の初光よりソロソロと騒ぎ掛ける譯にて店々の前には「クリスマス進物御用」杯と書きつけ種々様々の物を列べて賣捌くあり又此の頃にあれば一般の人氣も何となくハハとして恰も日本の正月前の如き心地せり最も得意あるは子供にて祖父祖母或は叔父叔母兩親兄弟杯より其貧富相應の玩物手道具の類を澤山に貰ひ受るを心待ちに待受け樂み暮をあり又互ひに意を屬し居る若き男女の如きは此の機を幸ひに然るべき贈物を爲して情好を通さるもあるべし又日頃の無沙汰を此時の進物にて詫る朋友を多かるべく萬事萬端一切の折り目切れ目は十二月二十五日のクリスマスより大切なるものはあしと考へ居る風習あり又通例の知人にて品物を贈答する程に至らぬ者も互ひにクリスマス、カード、と稱へる一種の名札様のものを贈答するあり此の札は大小精粗種々様々あれども先づ通例は四寸内外のものにて恰も西洋カナルの如く細長き格好あるが通例あり而して其表面には或は草花或は人物杯種々様々の面白き洒落たる繪に彩色を加へて印刷しあり又其上には「汝の幸福を希ふ」とか或は「目出度今年」とか「嬉しき一年」とか種々の文句を記載しあり此のカナルの背面に先方の名を書し又此方の名を書し互ひに贈答して懇意を表するなり然れば十二月

廿五日前後は郵便脚夫は大困りあて平常の書簡に比すれば幾十倍とも云ふべき状袋を運送  
せるなり左れば配達するたびに下女杯に向て其骨折を述べ立るも少からせ又年中出入り  
の郵便配達人其他の者には此のクリスマスマスの時に少々の心付を與ふる家も甚だ多し是等の  
有様は恰も日本の歳暮年始と同様あり

借てクリスマススの前晩は子供の身に取ては此の上もなき樂みの夜にて何時の頃よりの言ひ  
習はせふや靴足袋を其の寝間の扉に釣り下げ置く時は天人が來りて種々様々の玩物を授く  
るとか云へるとして此等を爲そ童男童女も少なからせ就ては其家の父母兄弟祖父祖母杯は  
豫て用意し置きたる種々様々の玩物をクリスマススの朝子供の未だ目を覺さざる内其寢床  
の近所へ堆く積み置き子供は朝、目を開けば己れの周圍に人形其他種々様々の物あるを見  
て先づ第一は悦び居るあり斯の如き始末にてクリスマススハ先づ家内の祝ひ日にて他人雜ら  
せの樂を爲す日と祝做すも可なるべし

クリスマススの前日より恰も日本の松飾を爲すが如く緑葉を以て種々の飾付けを爲すあり  
英國にては右の飾りに用ゆる木は二種ありて其一は日本の柊の類にて赤き實の結り居る様  
に覺へたり又他の一は日本にもあれども稀に見掛る所のものにて先づ柊の如きものあり此

の二種とも先づ常盤木の類にて其葉は十二月頃青くとし赤或は白の愛らしき實を其間若  
け居るとあれば歳暮年始の飾りとして恰も申分なきものあり左れば此の二種の木の右祝  
日の十日前より處々方々にて日本の門松を售る如く售り行くなり因て之を買入て先づ通例  
天井より下がり居る瓦スランツ飾り付け或は室内に飾りある鏡の縁杯飾り付るもあり  
又其邊の額杯の縁飾り付るもあり斯く此の緑葉の室内に飾り付けあるを見れば何となく  
人氣もサエぐどなる心地するなり異郷の者に在てそらも斯の如くあれば子供の時より是  
れに慣れ居る彼地の人々には定めて我々が正月のお飾りを視る如き心地するところべし

●問 其他のクリスマススの景況は如何  
●答 切て十二月廿五日ハクリスマススの當日なれば其排曉より寺々までハ日曜安息日の如  
く頻にカラン／＼と鐘を鳴すと共に爺媪の如き老人を首め其他家内の然るべき者と先づ第  
一寺参りを爲すなり又寺の方にては固より祖師降臨の日の事あれば無二の盛んなる  
儀式日にてソレ／＼飾りを爲し祭禮を執行ふ参詣人は寺の儀式済みてソレより各々定ま  
る親戚の集會所へ赴くあり此日は親戚朋友團樂して樂みを爲すところあれば豫てより何れの家  
へ打寄るべしと雖れの所を此の會へ用ふべしとか父子兄弟祖父祖母杯の間にて定先ある